並 木 遺 跡

―安中市消防署庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

２０１０

群馬県安中市教育委員会

並 木 遺 跡

―安中市消防署庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

２０１０

群馬県安中市教育委員会

並木遺跡から妙義山を望む

Ｈ－７号住居址出土　焼印

序

群馬県の西部に位置する安中市は、平成18年３月に松井田町と合併し新しい安中市となりました。両市町は「碓氷郡」に属していた経緯があり、古代より密接な関係にあります。なかでも長野県境にある碓氷峠を介して東山道、中山道と言った歴史的な街道、近代に至ってはアプト式鉄道の開設と信越本線の開通、そして新幹線といった交通の要衝として栄えてまいりました。

今回発掘調査を行った『並木遺跡』は、安中市の安中地区にあります。安中地区は近世安中藩の安中城を中心に旧中山道の宿場町が置かれ、街道筋には杉並木が整備され、今もその面影を残した交通の要衝として栄えて来た地区です。また『並木遺跡』のある一帯は上野尻と呼ばれ、この地名は古代碓氷郡の「野尻郷」あるいは古代東山道駅路に設置された「野尻駅家」に由来する地名として知られています。

『並木遺跡』は安中消防署の庁舎建設事業に伴い、平成20年度に発掘調査を、平成21年度に整理・報告書作成を行ったものです。調査によって古代の集落址や近世の遺構が発見されました。また平安時代の住居址から、鉄製の焼印が出土しました。印文は「東」で、一部欠けてしまっていましたが全体的にとても残りの良い状態で、古代碓氷郡、古代東山道との深い関係が注目されます。

このような発掘調査成果をまとめた本報告が、学術分野に寄与するだけではなく、地域を学ぶ郷土資料として活用されることを願ってやみません。

最後に、調査にご協力いただいた高崎市等広域市町村圏振興整備組合、高崎市等広域消防局、安中消防署及び発掘調査に従事していただいた方々、また各関係機関の皆様には感謝申し上げます。

平成22年３月

安中市教育委員会
教育長　中澤　四郎

例　言

1　本書は安中市消防署庁舎建設に伴う並木遺跡（遺跡略称Ｄ－24）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　並木遺跡は、安中市安中一丁目字並木地内に所在する。

3　発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、高崎市等広域市町村圏振興整備組合の費用負担によって行われた。

4　確認調査は、安中市教育委員会文化振興課文化財係主査　千田茂雄が担当した。発掘調査及び整理作業は、安中市教育委員会の指導のもと、有限会社毛野考古学研究所　有山径世が実施した。

5　確認調査は平成20年９月１日より９月５日まで実施した。発掘調査は平成20年10月３日より平成20年12月２日まで、整理作業は調査終了後より平成22年3月31日までの間、断続的に実施した。

6　本書の編集は有山が行った。執筆はⅠを千田が、他を有山が担当した。

7　発掘調査における資料、出土遺物は一括して安中市教育委員会で保管している。

8　発掘調査および本書の作成にあたり、以下の方々に各種ご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

株式会社スカイサーベイ　株式会社大成測量　スナガ環境測設株式会社　安中土建
高島英之　笹澤泰史　外山政子　三浦京子

9　発掘調査・整理作業に従事した者は以下のとおりである。（順不同・敬称略）

発掘調査：生駒朝男　岩井英雄　宇佐美璋一　須藤利男　須藤はるの　多胡わぐり　萩原今朝治
萩原治江　黛　清美

整理調査：鬼形敦子　廣上良枝　大塚規子　瀬尾則子　小野澤絹子　池内麻美　伴場りく
一場友香里　松村由記　有田麻紋

10　調査組織

平成20年度

教育委員会事務局

教育長	中澤四郎
教育部長	佐藤伸太郎
学習の森所長	小島成公
文化財係長	藤巻正勝
主査	壁　伸明
主査	蜂須賀まゆみ
主査	千田茂雄（調査担当）
主査	深町　真
主査	新井雅彦
主任	井上慎也

平成21年度

教育委員会事務局

教育長	中澤四郎
教育部長	佐藤伸太郎
学習の森所長	小島成公
文化財係長	藤巻正勝
主査	壁　伸明
主査	蜂須賀まゆみ
主査	千田茂雄（調査担当）
主査	深町　真
主任	井上慎也
主事補	小此木克之

凡　例

1　遺構の実測図は１/80 を基本とし、全体図は１/300 とした。

2　遺構図中の北マークは磁北である。

3　遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

縄文土器：１／３　土師器・須恵器・灰釉陶器：１／４

縄文石器：１／３　石製品：１／２　鉄製品：１／２

4　遺物実測図のスクリーントーンは灰釉陶器の釉薬、実測図左下の●は須恵器を示す。

5　土層説明中での記号、略称は次のとおりである。

色調＜：より明るい方向を示す（例　暗＜明）

しまり、粘性　◎：あり　○：ややあり　△：あまりない　×：なし

混入物の量　◎：大量（30 ～ 50%）　○：多量（15 ～ 20%）　△：少量（５～ 10%）

※：若干（１～３％）

混　入　物　ＲＰ：ローム粒子（溶け込んだ状態）　ＲＢ：ロームブロック（固まりの状態）

ＹＰ（Ａｓ－ＹＰ）：板鼻黄色軽石　Ｂ（Ａｓ－Ｂ）：浅間Ｂ軽石

Ａ（Ａｓ－Ａ）：浅間Ａ軽石

6　ピットの深さは、以下のスクリーントーンで示す。

○ ０～ 19 ㎝　20 ～ 39 ㎝　40 ～ 59 ㎝　60 ㎝以上

7　遺物重量分布マーク

	10 g	100 g	1000 g		1 個	5 個	10 個
土師器甕系	•	●	●	編物石	+	+	+
土師器坏系	▪	■	■	砥　石	⊞	⊞	⊞
須恵器甕系	◦	○	○	丸　石	⊗	⊘	⊘
須恵器坏系	▫	□	□	鉄製品	×	×	×
灰釉陶器	▲	▲	▲				

8　遺物観察表に示した計測値の（　）は復元推定値を、＜　＞は残存値を表す。

9　遺構土層および土器の色調観察は『新版　標準土色帖』（農林水産技術会議事務局　財団法人日本色彩研究所監修 2006）に従った。

10　遺物番号は、実測図・観察表・写真図版ともに共通である。

11　本書掲載の第１図は安中市発行 1/2,500「安中市都市計画基本図」、第２図は国土交通省国土地理院発行 1/25,000「松井田」「富岡」「三ノ倉」「下室田」を使用した。

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　調査に至る経緯…… 1

Ⅱ　調査の方法と経過…… 2

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境…… 3
　1　地理的環境…… 3
　2　歴史的環境…… 3

Ⅳ　層序…… 5

Ⅴ　遺構と遺物…… 5
　1　遺跡の概要…… 5
　2　縄文時代の遺物…… 7
　3　古墳～奈良・平安時代の遺構と遺物…… 7
　4　近世の遺構…… 28

Ⅵ　成果と問題点…… 38
　1　奈良・平安時代の土器群の変遷について…… 38
　2　Ｈ－７号住居址出土の焼印について…… 40

写真図版
発掘調査報告書抄録

挿図目次

第１図　調査区設定図……１
第２図　並木遺跡と周辺遺跡分布図……４
第３図　基本層序柱状図……５
第４図　並木遺跡全体図……６
第５図　縄文時代の遺物実測図……７
第６図　Ｈ－１号住居址実測図……11
第７図　Ｈ－２号住居址実測図……12
第８図　Ｈ－３号住居址実測図……13
第９図　Ｈ－４・５号住居址実測図……14
第10図　Ｈ－５号住居址実測図……15
第11図　Ｈ－６号住居址実測図（１）……16
第12図　Ｈ－６号住居址実測図（２）……17
第13図　Ｈ－７号住居址実測図……18
第14図　Ｍ－11号溝、Ｄ－１～５号土坑実測図……19
第15図　Ｈ－１号住居址　遺物実測図……21
第16図　Ｈ－２号住居址　遺物実測図……22
第17図　Ｈ－３号住居址　遺物実測図……23
第18図　Ｈ－４・５号住居址　遺物実測図……24
第19図　Ｈ－６号住居址　遺物実測図……25
第20図　Ｈ－７号住居址、Ｄ－５号土坑、遺構外　遺物実測図……26
第21図　Ｈ－７号住居址　遺物実測図……27
第22図　Ｍ－１～３号溝実測図……28
第23図　Ｍ－４～７号溝実測図……29
第24図　Ｍ－８～10・12・13号溝実測図……30
第25図　Ｐ１～47号ピット実測図……31
第26図　奈良・平安時代の土器群……39

表目次

第１表　遺跡一覧表……４
第２表　遺構観察表……32
第３表　土器観察表（１）……33
第４表　土器観察表（２）……34
第５表　土器観察表（３）……35
第６表　土器観察表（４）……36
第７表　土器観察票（５）……37
第８表　石器・石製品・鉄製品観察表……37

図版目次

図版１　東山道駅路関係学術調査時における並木遺跡周辺
並木遺跡　全景
図版２　Ｈ－１号住居址
Ｈ－１号住居址　竈
Ｈ－１号住居址　竈遺物出土状態
Ｈ－１号住居址　貯蔵穴遺物出土状態
Ｈ－２号住居址
Ｈ－２号住居址　遺物出土状態近景
Ｈ－２号住居址　竈
Ｈ－２号住居址　竈遺物出土状態
図版３　Ｈ－３号住居址
Ｈ－３号住居址　遺物出土状態近景
Ｈ－３号住居址　竈
Ｈ－３号住居址　竈遺物出土状態
Ｈ－３号住居址　竈袖内遺物出土状態
Ｈ－４号住居址
Ｈ－５号住居址
Ｈ－５号住居址　遺物出土状態近景
図版４　Ｈ－５号住居址　竈
Ｈ－５号住居址　竈断ち割り
Ｈ－６号住居址
図版４　Ｈ－６号住居址　遺物出土状態近景
Ｈ－６号住居址　竈
Ｈ－６号住居址　竈掘り方
Ｈ－６号住居址　掘り方
Ｈ－６号住居址　Ｄ－３断面
図版５　Ｈ－７号住居址
Ｈ－７号住居址　焼印出土状態
Ｈ－７号住居址　掘り方
Ｄ－１号土坑
Ｄ－２号土坑
Ｄ－３号土坑
Ｄ－４号土坑
Ｄ－５号土坑
図版６　Ｐ１～47号ピット
Ｐ１～47号ピット
Ｍ－１号溝
Ｍ－２号溝
Ｍ－３号溝
Ｍ－４号溝　断面
Ｍ－５号溝
Ｍ－６号溝
図版７　Ｍ－７号溝
Ｍ－８号溝
Ｍ－９・10号溝
Ｍ－12号溝
Ｍ－11号溝
基本層序
図版８　出土遺物
図版９　出土遺物
図版10　出土遺物
図版11　出土遺物
図版12　出土遺物
図版13　出土遺物
図版14　出土遺物
図版15　出土遺物
図版16　焼印Ｘ線写真

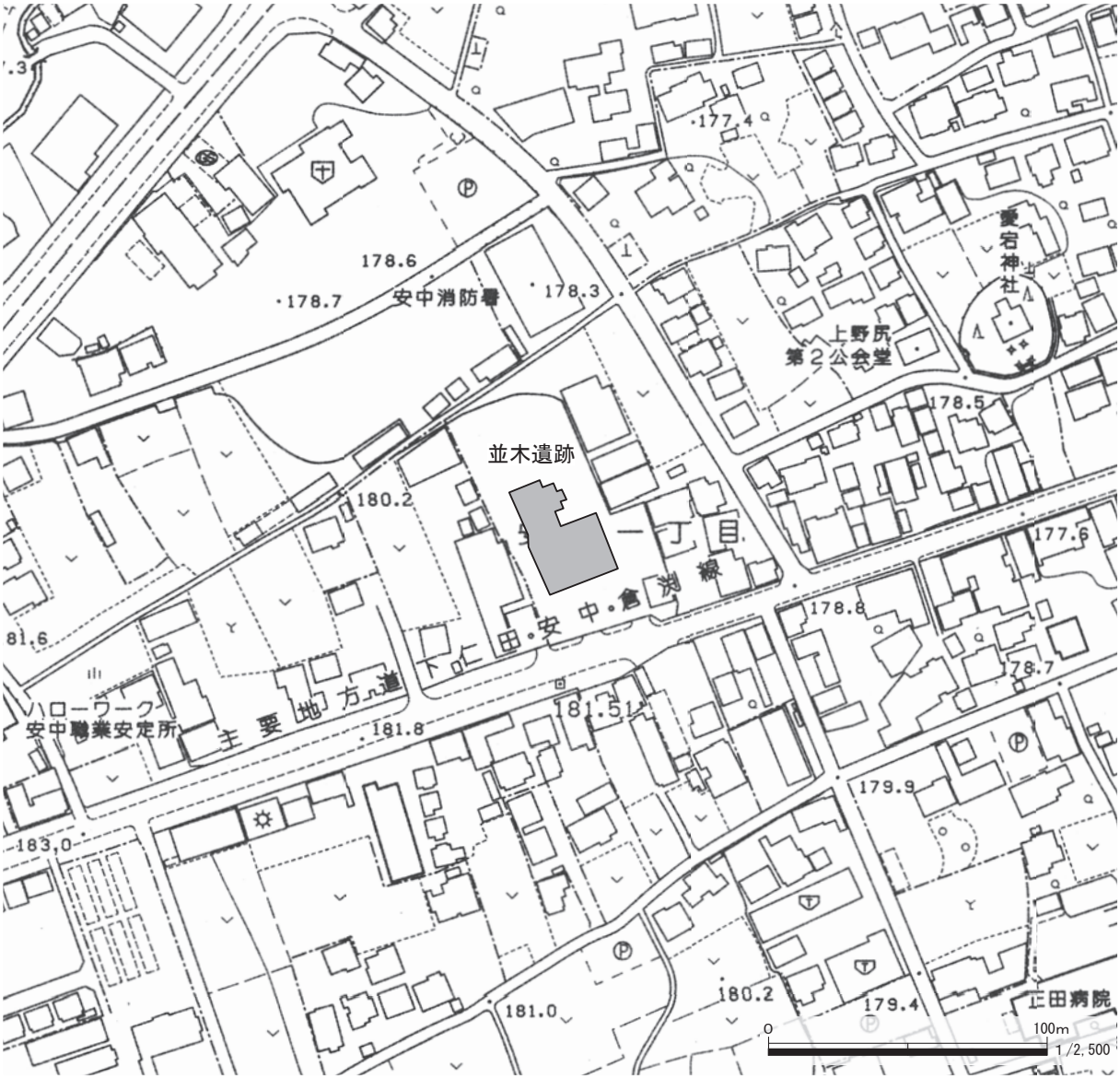
Ⅰ　調査に至る経緯

平成 20 年８月、高崎市等広域消防局から安中消防署庁舎建設事業の実施に伴う埋蔵文化財の照会があった。

事業計画地内は一部、周知の埋蔵文化財包蔵地内にあり、また古代東山道推定路線に近いこともあり遺跡が存在する可能性が高い地域である。そのため、事業実施に先立ち埋蔵文化財の取り扱いについて事前協議を実施する必要がある旨を高崎市等広域消防局へ伝えた。

その後、高崎市等広域消防局と市教育委員会の間で文化財保護のための協議を行った。協議に於いては、文化財保護のための計画変更をも含め再三にわたり行われた。

しかし、計画変更を行っても埋蔵文化財への影響は避けられないことから、当初の計画どおり事業を実施することとなった。



第１図　調査区設定図

Ⅱ　調査の方法と経過

調査範囲は、平成20年９月１日から９月５日まで実施した確認調査の成果をもとに設定した。グリッドは調査区全域をカバーするように４ｍ×４ｍで設定し、北から南へＡ・Ｂ・Ｃ･･･、西から東へ１・２・３･･･と表し、北西角をグリッドの呼称とした。さらに２ｍ×２ｍに４分割した小グリッドを設定し、北西、北東、南西、南東の順にａ、ｂ、ｃ、ｄと呼称することとした。なお、グリッドの位置については、調査区北西角を基準としたため、国家座標（日本測地系Ⅸ系）への取り付けは行っていない。

発掘調査は、平成20年10月３日より開始し、同年12月２日までの間実施した。重機によって遺構確認面まで掘削した後、ジョレンを用いて人力による遺構検出作業を行った。その結果、住居址７軒、溝13条、土坑５基、ピット60基が検出された。遺構の掘り下げに際し、住居址については、土層観察用のセクションラインを基準として、住居内を16区に分割した。遺物の取り上げは、分層して各層位ごとに取り上げる「16分割分層方式」にて行った。その他の遺構については、範囲を確認後、溝は適宜セクションベルトを設定、土坑･ピットは半截し、土層を記録した後に完掘した。遺構外については、小グリッドで層位ごとに取り上げた。

図面・写真による記録は、土層断面・遺物出土状態・完掘状態・掘り方等の各段階において行った。遺構図は縮尺１/40を基本とし、カマド等の微細図は１/10、全体図は１/100で作図した。平面図については航空写真を利用し、断面図・微細図については手実測で測量した。写真撮影では、カメラはニコンＦ３-35㎜版を、フィルムはカラーリバーサルと白黒ネガを使用した。作業進捗状況等の記録用には、デジタルカメラを適宜用いた。航空写真はラジコンヘリコプターを用いて撮影した。

整理作業は、発掘調査終了後、平成22年３月31日までの間断続的に実施した。遺物の洗浄・注記→分類・接合・復元→写真撮影→実測・トレース・遺物観察表作成→図版作成の順で行った。遺物の注記は、ポスターカラーを用い手作業で行った。接合にはセメダインＣを、復元にはエポキシ樹脂を使用した。遺物実測は原寸で行い、縄文土器・須恵器の破片については拓本を用いた。遺物写真撮影には、デジタルカメラ（ニコンデジタル一眼レフＤ200）を使用した。また、並行して遺構図面の修正・写真整理および図版作成を行った。

なお、遺構・遺物の実測図トレースにはAdobe IllustratorCS2、遺物写真の加工にはPhotoshop6.0、報告書の図版作成・編集作業にはAdobe InDesignCS2を用いた。

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境

１　地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部に位置している。市域は、碓氷峠付近を水源として北西から南東方向へ流下する碓氷川により南北に分断される。碓氷川の北側には九十九川が並行して流れ、市東部で碓氷川と合流する。これらの河川流域には、河川低地や河岸段丘が発達している。河岸段丘は下位段丘面（磯辺地区、人見地区）、中位段丘面（原市･安中台地）、上位段丘面（横野台地）から成る。また、市北部および南東部等には丘陵（秋間丘陵・岩野谷丘陵・松井田丘陵）が広く分布している。

並木遺跡は安中市安中一丁目字並木に所在する。碓氷川と九十九川に挟まれた碓氷川中位段丘面（安中台地）の最高位に位置し、やや北へ傾斜した平坦地に立地する。標高は約 180 ｍである。

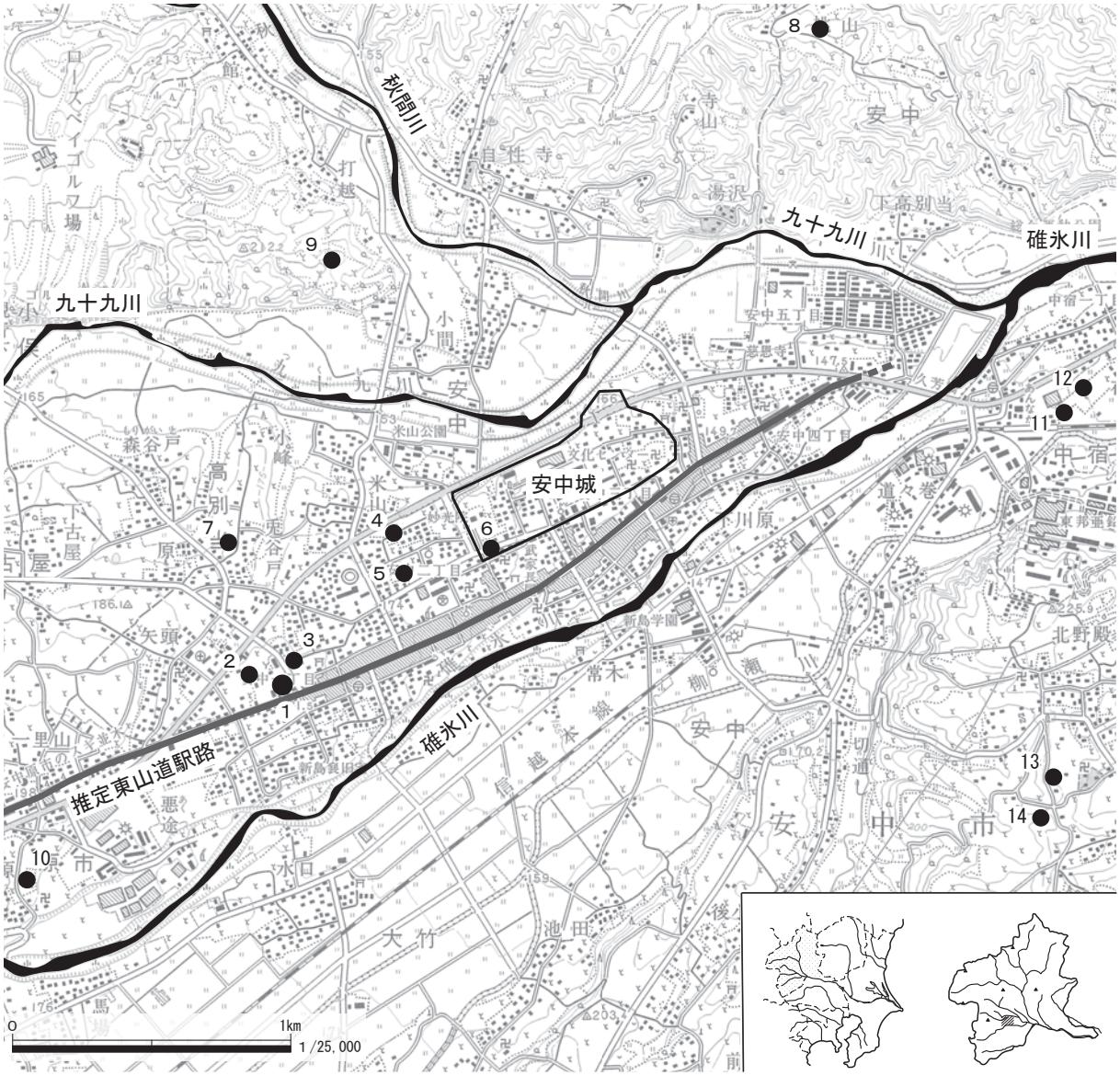
２　歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、本遺跡の所在する安中台地では確認されず、碓氷川流域の上位段丘（横野台地）を中心に検出されている。縄文時代・弥生時代においても横野台地が拠点的な地域となり、本遺跡周辺は遺構の密度が薄い。縄文時代は土井遺跡、植松・地尻遺跡、地尻・地尻Ⅱ遺跡で中期の土坑が検出された程度である。、弥生時代は植松・地尻遺跡で中期後半の住居址が検出されている。

古墳時代は、多くの古墳が築造される。本遺跡周辺にも多数分布し、７世紀代の円墳である悪途東Ｋ－１号墳、めおと塚古墳等が見られる。集落址は、植松・地尻遺跡で多数の住居址が確認されているものの、安中台地を見渡すと遺跡数は少なく、規模も小さい。

奈良・平安時代において、本遺跡一帯は古代碓氷郡を考える上で重要な地域の一つである。古代碓氷郡の「野後郷」に比定されており、郡家が存在した可能性も指摘されている。さらに、東山道駅路が通過し、「野後駅」が置かれていたと推定されている。このように、碓氷郡の中でも中心的な地域と考えられ、こうした性格を示すと推測される遺跡が確認されている。植松・地尻遺跡では区画施設を持つ大型掘立柱建物群が検出され、公的な建物跡と推測されている。遺物も「評」と刻書された７世紀代の須恵器蓋や、金銅製の巡方・装飾品の一部（ドングリ形）、布目瓦等の特殊遺物が出土している。地尻遺跡・地尻Ⅱ遺跡では古墳時代末～奈良時代初頭の住居址が検出され、畿内の土器を真似た暗文土器や須恵器の円面硯等が出土している。高別当地区や桃山地区からは、瓦塔の破片が採取されている。東山道駅路は、当初その痕跡を留めた地条帯として、本遺跡と土井遺跡の間を東西方向に通る道路部分が推定されていた。市史編纂事業により学術調査が実施されたが（上野尻遺跡）、古代の遺物（須恵器・瓦等）は出土したものの、駅路の存在を明らかにするには至らなかった。なお、当該期の集落址は、地尻Ⅲ遺跡、土井遺跡、西殿遺跡、堀谷戸遺跡等で確認されている。生産址は、九十九川流域一帯で浅間Ｂ軽石に覆われた水田址が広範囲に確認されている。

中世は、上野尻遺跡で大溝が検出された。北東に位置する地尻遺跡・地尻Ⅱ遺跡で居館址を巡る堀が発見されていることから､これに水を張るための用水路である可能性が高いと考えられている。近世は、永禄２年安中忠政の築城とされる安中城が存在する。



第２図　並木遺跡と周辺遺跡分布図

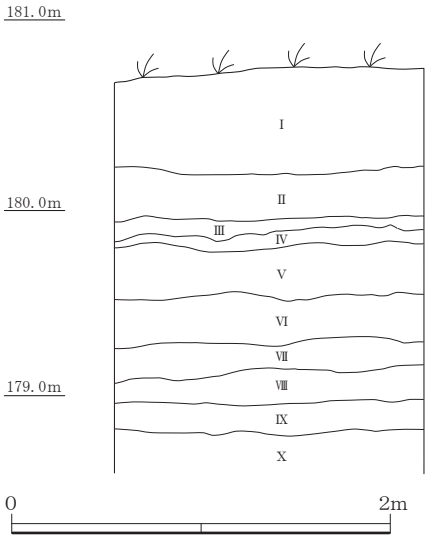
	遺跡名	旧	縄文						弥生		古墳				奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中	後	終					
1	並木					＊								○		○		△	本報告
2	土井					△							○			○			古代集落址
3	上野尻														△	△	△		中世溝
4	植松・地尻		＊			△			○				◎	○	◎	○			古代公的施設
5	地尻Ⅲ														○	◎			古代集落址
6	地尻・地尻Ⅱ					△									○	○	△	△	古代集落址、中世溝
7	高別当瓦塔出土地															＊			
8	桃山瓦塔出土地															＊			
9	めおと塚古墳													◎					円墳、７世紀後半か
10	悪途東Ｋ－１号墳					△								◎					円墳、７世紀代
11	中宿在家									＊						○	◎	○	古代水田址、城址
12	中宿在家Ⅱ															○	◎	○	古代水田址、城址
13	西殿				＊									○	○	○			古墳後～古代集落址
14	堀谷戸				＊		＊						○	○	◎	◎	△		古墳後～古代集落址

◎：大規模な遺跡（集落址・古墳等）　○：中規模な遺跡（住居址・牧関連等）
△：小規模な遺跡（土坑・溝等）　＊：遺物が出土した遺跡

第１表　遺跡一覧表

Ⅳ　層序

本遺跡の基本層序は第３図のとおりである。指標となるテフラは、現地表面から約 194 ㎝下（Ｘ層）で浅間－板鼻黄色軽石（As-YP：1.3 万年前）層が確認されている。浅間Ｂ軽石（As-B：1108 年降下）層および浅間Ａ軽石（As-A：1783 年降下）層は、後世の撹乱を受けており、一次堆積層は残存していなかった。Ｖ層は古墳～奈良・平安時代の遺物包含層であり、遺構確認はⅥ層上面で行った。



層名	色調	しまり	粘性	混入物					備考
				ＲＢ	ＹＰ	Ａ	Ｂ	白色粒	
Ⅰ　コンクリート・砂利層		◎	×						
Ⅱ　にぶい黄褐色土層		◎	×			○			盛土、小石○
Ⅲ　にぶい黄褐色土層	Ⅲ＜Ⅱ	◎	×	△		○			盛土、小石○
Ⅳ　灰褐色土層	Ⅳ＜Ⅲ	○	○				◎		Ｂ混入土層
Ⅴ　黒色土層	Ⅴ＜Ⅳ	◎	○					△	
Ⅵ　暗褐色土層	Ⅴ＜Ⅵ	◎	○					○	
Ⅶ　褐色土層	Ⅵ＜Ⅶ	◎	○	○				○	
Ⅷ　にぶい黄褐色土層	Ⅶ＜Ⅷ	◎	○	◎				○	ローム層、下部にﾊｰﾄﾞﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ堆積
Ⅸ　明黄褐色土層	Ⅷ＜Ⅸ	◎	○		○				ハードローム層
Ⅹ　橙色軽石層	Ⅹ＜Ⅸ	×	×						YP一次堆積層

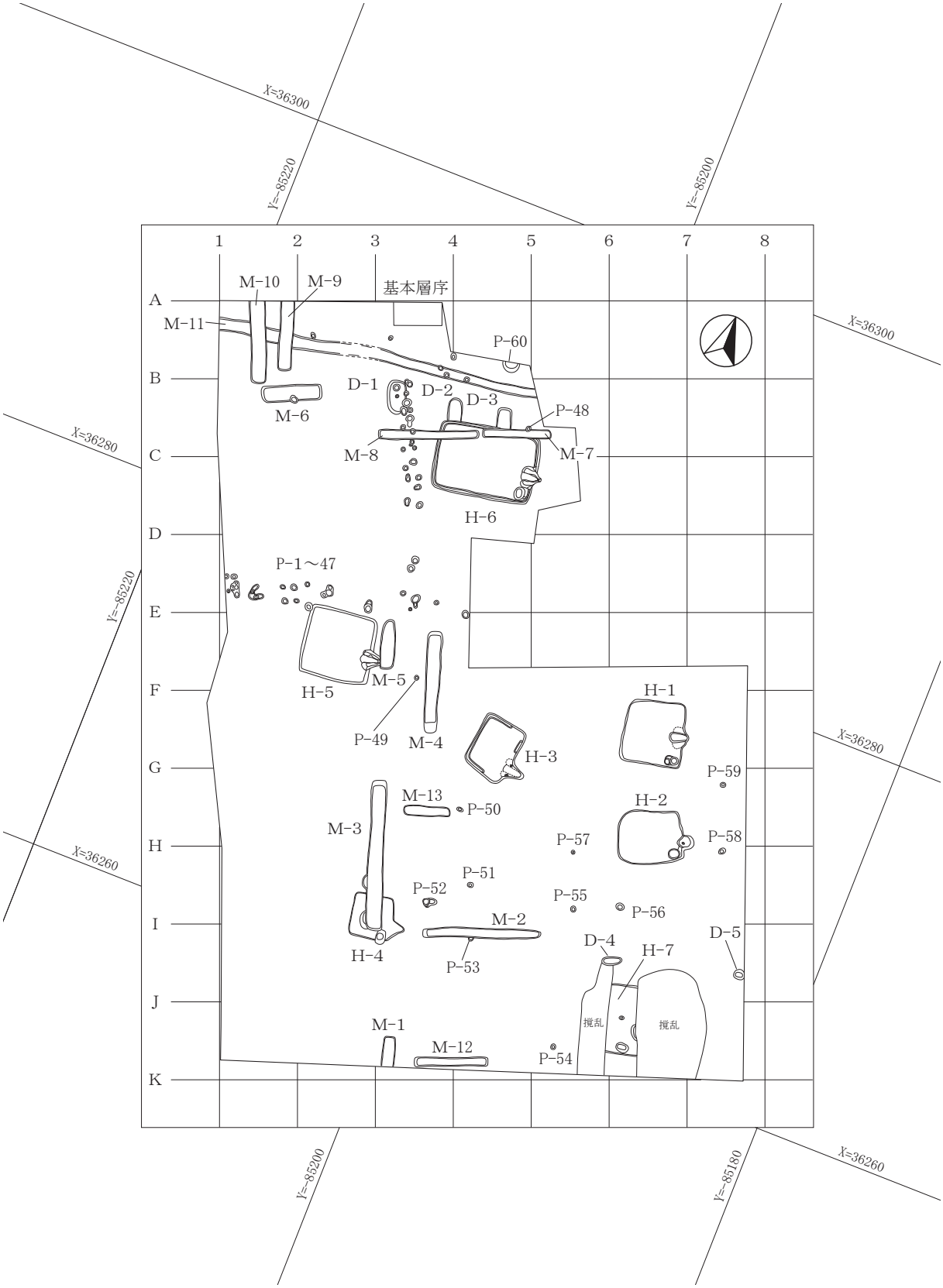
第３図　基本層序柱状図

Ⅴ　遺構と遺物

１　遺跡の概要

本遺跡で検出された遺構は、古墳～奈良・平安時代と近世に大別される。古墳～奈良・平安時代に比定されるのは、住居址７軒、溝１条、土坑５基、ピット８基である。住居址は、奈良時代が２軒（Ｈ－５・６号住居址）、平安時代が５軒（Ｈ－１～４・７号住居址）である。規模は小～中形で、主柱穴を持たず、竈は東壁に付設されている。竈構築材については、奈良時代がローム混合土を主体とするのに対し、平安時代は自然礫を多用している。床面も奈良時代は貼床だが、平安時代は直床と差異がある。なお、Ｈ－７号住居址は住居中央に小ピットを有し、周辺の硬化面上に焼土・炭化物が散っていることなど、他の住居址とは異なる特徴が認められた。近世に比定されるのは、溝 12 条、ピット 52 基である。溝は浅間Ａ軽石の復旧溝である。ピットは、不規則だが２基ずつ逆「Ｌ」字状に並ぶピット群（Ｐ－１～38 号ピット）が検出されている。

出土遺物については、縄文時代は中期初頭～前葉の深鉢、打製石斧等の石器、古墳～奈良・平安時代は土師器、須恵器、灰釉陶器、砥石、編物石、鉄製品、椀形鉄滓、近世は陶磁器碗、在地系土器鍋等が確認されている。特筆すべき遺物として、Ｈ－７号住居址から出土した鉄製の焼印が挙げられる。



※遺構番号Ｐ－１～47については、第25図で個別に付してある。

0　10m

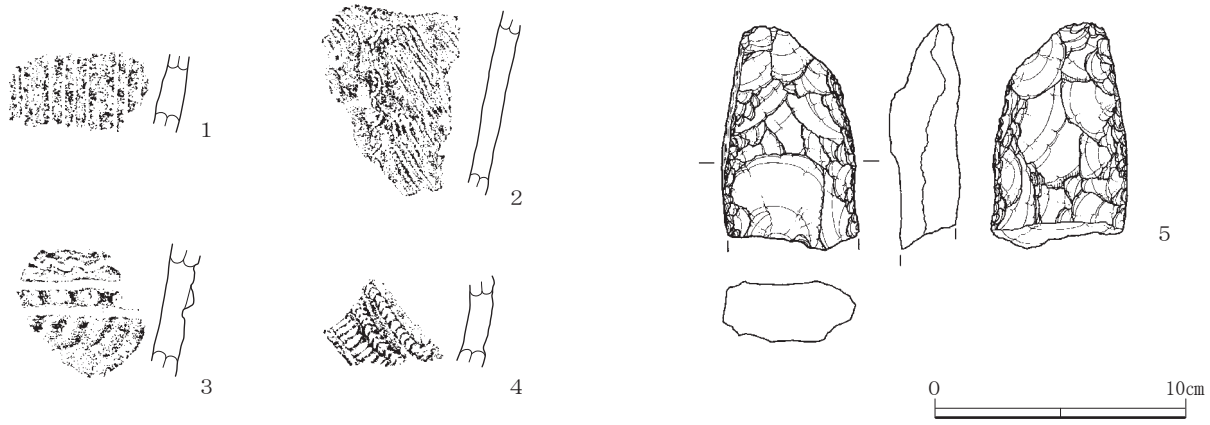
第４図　並木遺跡全体図

２　縄文時代の遺物（第５図）

遺構の存在は確認できなかったが、表土、遺物包含層（Ｖ層）、住居址（Ｈ－５・６号住居址）から、縄文土器および石器が少量出土した。

縄文土器は全て深鉢の小片で、時期は中期に限定される。１・２は中期初頭の五領ヶ台式に比定される。１は半截竹管状工具による縦位の沈線文、２は単節ＲＬ縄文が施される。３・４は中期前葉に帰属する。３は阿玉台Ⅰ式に比定され、横位波状沈線文および指頭押圧のある横位隆帯が施文される。下位には、当型式に特徴的なひれ状圧痕が見られる。４は勝坂Ⅰ式に比定され、連続押引文と三角押文が施文されている。

石器は、製品となるのは５の打製石斧１点のみである。頁岩の剥片を素材としたもので、側縁部には摩耗痕が認められる。製品以外では、Ｈ－５号住居址 12 区４層およびＣ－２グリッドから安山岩・頁岩の剥片が出土している。



第５図　縄文時代の遺物実測図

３　古墳～奈良・平安時代の遺構と遺物

（１）遺構

１．住居址

時期

奈良時代：Ｈ－５・６号住居址

平安時代：Ｈ－１・２・３・４・７号住居址

奈良時代の住居址

Ｈ－５号住居址（第９・10 図）　Ｍ－５号溝およびＰ－ 11 号ピットと重複し、本住居址が古い。平面正方形である。床は全体的に締まり、竈前方には硬化面が認められる。貼床で、ロームブロック・にぶ

い橙色粘質土を含む黒色土が埋め戻されており、深さは４～10 ㎝である。壁溝・主柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。竈は東壁の中央よりやや南側に付設される。全長 115 ㎝、燃焼部幅 32 ㎝である。奥壁は良く焼けて赤色化している。焚口から燃焼部にかけて灰が薄く堆積していた。袖はロームと黒色土の混合土で構築されている。袖の先端内側には黒色土が円形状（長径 13 ～ 14 ㎝）に検出され、芯材の痕跡と考えられる。燃焼部からは、土師器甕（第 18 図 13）の破片がまとまって出土している。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・高台付坏・高坏・甕が出土した。床面直上からは、竈の右脇で土師器坏（第 18 図 10）・須恵器高台付坏（第 18 図 11）、６区で土師器甕（第 18 図 12）が出土している。また、２区２層から正位で出土した土師器坏（第 18 図８）は、内底面に「×」の線刻が認められる。土器以外では、編物石が床面付近から出土した。位置は住居の北東側に偏る。

Ｈ－６号住居址（第 11・12 図）　Ｍ－７・８号溝およびＤ－２・３号土坑と重複する。本住居址はＤ－２・３号土坑より新しく、Ｍ－７・８号溝より古い。平面長方形である。床は全体的に良く締まり、竈前方から貯蔵穴（Ｄ－１）にかけて硬化面が認められる。貼床で、ロームブロック・ＹＰを含む黒褐色土が埋め戻されている。深さは２～８㎝で、竈付近では浅くなる。壁溝は各壁下で検出された。竈袖下まで廻っており、壁溝掘削後に竈を付設したことが分かる。主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は竈右脇に位置する。竈は東壁の中央よりやや南寄りに付設される。全長 101 ㎝、燃焼部幅 33 ㎝である。奥壁は良く焼けて赤色化している。燃焼部には焼土がごく薄く堆積し、中央やや北寄りに支脚痕が認められる。袖はロームと灰褐色粘質土の混合土で構築され、焼土・炭化物が多量に混入している。袖下からは、ピットが３本検出され（Ｐ－１～３）、袖と同じ土が充填されていた。Ｐ－１・２は袖の先端に位置することから、芯材の痕跡と推測される。床下土坑は住居中央で２基（Ｄ－３・４）確認され、ＹＰを主体とする土が充填されていた。Ｄ－４は南側に半円状の張り出しがあり、粘質土が貼り付けられていた。遺物はＤ－４の上層から須恵器坏片が１点出土したのみである。土坑・ピットの規模は、Ｄ－１が長径 64 ㎝、短径 52 ㎝、深さ 40 ㎝、Ｄ－２が長径 51 ㎝、短径 42 ㎝、深さ 24 ㎝、Ｄ－３が長径 125 ㎝、短径 125 ㎝、深さ 94 ㎝、Ｄ－４が長径 146 ㎝、短径 124 ㎝、深さ 91 ㎝、Ｐ－１が長径 25 ㎝、短径 24 ㎝、深さ 13 ㎝、Ｐ－２が長径 20 ㎝、短径 20 ㎝、深さ 16 ㎝、Ｐ－３が長径 19 ㎝、短径 18 ㎝、深さ 15 ㎝である。

遺物は、土師器の坏・盤・鉢・甕、須恵器の坏・蓋・高台付坏・甕が出土した。床面直上からは、竈周辺で土師器盤（第 19 図２）・鉢（第 19 図３）・甕（第 19 図８）が出土している。土器以外では、砥石および編物石があり、位置は住居北東角の下層から床面直上に集中している。

平安時代の住居址

Ｈ－１号住居址（第６図）　北側を現代の撹乱に壊される。平面正方形である。床は竈前方から貯蔵穴（Ｄ－１）にかけて硬化面が認められる。掘り方はなく、Ⅵ層を直接床面としているが、貯蔵穴と竈の間には浅い掘り込みがあり、焼土・炭化物・ローム粒を多量に含む黒褐色土が充填されていた。壁溝・主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は竈右脇に位置し、東西に２つ隣接して掘り込まれている。規模は、Ｄ－１東が長径 44 ㎝、短径 44 ㎝、深さ 24 ㎝、Ｄ－１西が長径 36 ㎝、短径 30 ㎝、深さ 21 ㎝である。東側の底面から須恵器坏２点（第 15 図８・９）、西側の上面から須恵器坏（第 15 図２）がそれぞれ伏せられた状態で出土した。第 15 図８は墨書土器で、文字は「秋」と判読される。竈は東壁のほぼ中央

に付設される。全長 103 ㎝、燃焼部幅 53 ㎝である。燃焼部にはわずかな灰の痕跡が認められる。竈から竈前方の２・３区にかけて、自然石（長さ 20 ～ 30 ㎝台が主体）が 20 点出土した。石材は安山岩と凝灰岩で、安山岩が多い。熱を受けて変色しているものが大半を占め、竈構築材として使用されていたものと判断される。

遺物は、土師器の甕、須恵器の坏・蓋・高台付碗・甕・羽釜が出土した。竈周辺に集中し、床面直上からは、４・５区で須恵器坏（第 15 図６・７）が出土している。土器以外では、10 区床面直上および 11 区１層から鉄製品の細片（器種不明）、16 区２層および竈から編物石が出土している。

Ｈ－２号住居址（第７図）　北側を現代の撹乱に壊される。平面長方形である。床は竈前方から貯蔵穴（Ｄ－１）にかけて硬化面が認められる。掘り方はなく、Ⅵ層を直接床面としている。壁溝・主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は竈右脇に位置する。規模は、長径 60 ㎝、短径 52 ㎝、深さ 14 ㎝である。竈は東壁の中央よりやや南側に付設される。全長 86 ㎝、最大幅 55 ㎝である。燃焼部にはわずかな灰の痕跡が見られ、支脚痕と考えられるピットが検出された。竈から住居南側にかけて自然石（長さ 10 ～ 30 ㎝台が主体）が７点出土した。石材は安山岩と凝灰岩で、安山岩が多い。熱を受けて赤化したものが大半を占め、竈構築材と判断される。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・蓋・高台付碗・高台付皿・甕・甑・羽釜、灰釉陶器の碗が出土した。竈南脇の４区１層からは須恵器高台付碗が２枚重なった状態（上 : 第 16 図６、下 : 第 16 図５）で出土している。竈出土の須恵器高台付皿（第 16 図７）は、底部内面に墨書が施されている。土器以外では、３区床面付近から鉄製品（第 16 図 16）、１・３区から編物石が出土している。

Ｈ－３号住居址（第８図）　平面長方形である。床は竈前方に硬化面が認められる。Ⅵ層を直接床面としているが、硬化面部分のみ貼床で、ロームブロックを含む褐色土が薄く充填されている。深さは２～６㎝である。壁溝は、西壁下および北・南壁下の西半分、東壁下の一部で検出された。貯蔵穴は検出されなかった。竈は東壁の中央より南側に付設される。全長 110 ㎝、燃焼部幅 34 ㎝である。燃焼部の上層から安山岩が１点出土した（長さ 30 ㎝）。片面が熱を受けて変色している。袖は黒色土混合のロームを主体として構築される。袖下には浅い窪み（長径 12 ～ 14 ㎝）が検出された。底面が締まっており、芯材として石を設置した痕跡と推測される。また、右袖内には、須恵器高台付碗・甑の破片が埋め込まれていた（第 17 図４・７・10）。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・蓋・高台付碗・甕・甑が出土した。床面直上からは、３区で須恵器高台付碗（第 17 図２）、14 区で須恵器高台付碗（第 17 図６）、竈右脇の４区で須恵器大甕（第 17 図 11）の破片が出土している。竈内からは須恵器高台付碗（第 17 図３・５）が出土している。土器以外では、８区の床面直上から鉄製鎌（第 17 図 12）が出土している。

Ｈ－４号住居址（第９図）　Ｍ－３号溝と重複し、本住居址が古い。平面正方形である。床はⅥ層を直接床面としており、硬化面は認められなかった。竈は東壁の中央より南側に付設されるが、焼土の堆積はわずかで不明瞭である。土坑が２基（Ｄ－１・２）検出された。規模は、Ｄ－１が長径 96 ㎝、短径 72 ㎝、深さ 24 ㎝、Ｄ－２が長径 76 ㎝、短径 43 ㎝、深さ 33 ㎝である。

遺物は土師器の坏・甕、須恵器の坏・高台付碗・甕・羽釜、灰釉陶器の碗が出土した。出土量は少な

く、竈付近に集中する。Ｄ－１からはほとんど出土しないが、Ｄ－２からは須恵器坏（第 18 図１・２）が出土している。

Ｈ－７号住居址（第 13 図） 東・西側を現代の撹乱に壊され、全体の約１/３の調査となった。床は住居中央部に硬化面が認められる。硬化面部分はロームと黒褐色土の混合土による貼床であるが、住居周縁はⅥ層を直接床としている。貼床は中央部が皿状に掘り込まれ（最深 13 ㎝）、ロームが主体として充填されている。この部分が最も強く硬化しており、上面には焼土・炭化物が散っている。竈は検出範囲内では見られなかった。ピットは１本検出され、ローム主体の貼床内に位置する。規模は、長径 26 ㎝、短径 17 ㎝、深さ 12 ㎝である。土坑状の掘り込みも２ヵ所検出され、Ｄ－１・Ｄ－２は埋没土に焼土・炭化物が混入する。また、掘り方調査の際にはＤ－３が検出された。規模は、Ｄ－１が長径 64 ㎝、短径 46 ㎝、深さ 36 ㎝、Ｄ－２が長径 81 ㎝、深さ 17 ㎝、Ｄ－３が長径 56 ㎝、短径 52 ㎝、深さ 28 ㎝である。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の蓋・高台付碗・甕が出土した。土器以外では、１区の床面より１～２㎝浮いた状態で、鉄製の焼印（第 21 図１）と椀形鉄滓（第 20 図６）が出土している。

２．溝（遺構：第 14 図）

１条が確認され、Ｍ－11 号溝が該当する。Ｍ－９・10 号溝およびＰ－43・44・45 号ピットと重複し、本溝が古い。概ね東西方向に直行し、方位はＮ－ 81°－Ｅを指す。両端は調査区外となる。断面は浅い逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、西から東へ緩やかに傾斜する。埋没土は黒色土を主体とし、自然埋没と推定される。遺物は出土しなかった。埋没土が住居址と似ていることから、古墳～奈良・平安時代の帰属と推測される。

３．土坑（遺構：第 14 図）

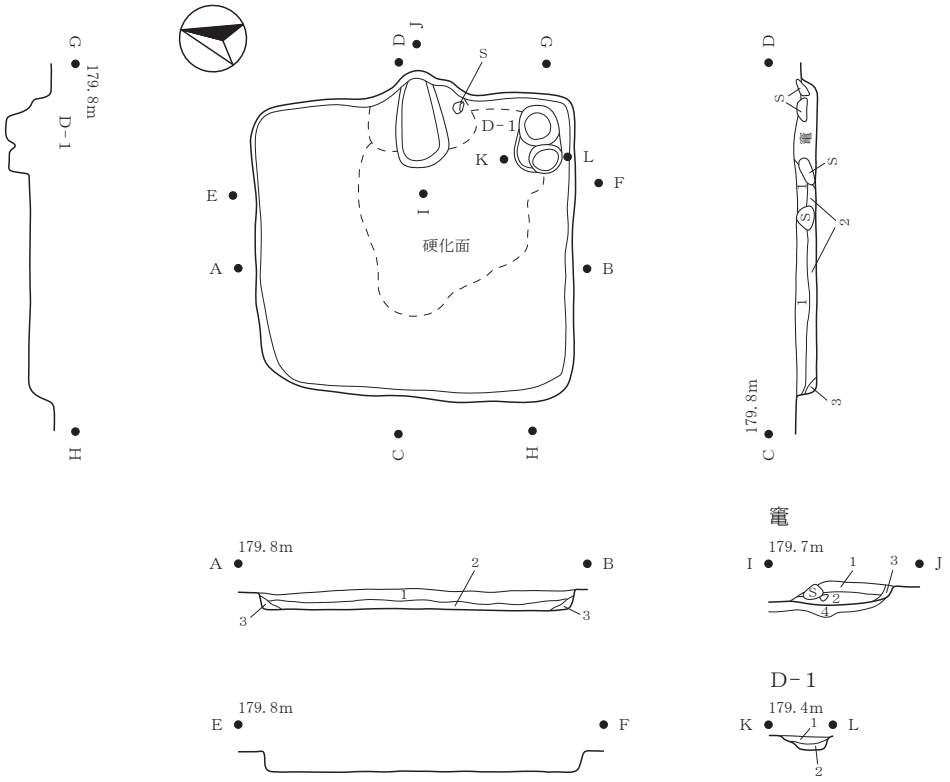
５基が確認され、Ｄ－１～５号土坑が該当する。この内、Ｄ－１～３号土坑は、東西方向に並んで検出され、長軸方位もＮ－ 19 ～ 21°－Ｗと近い数値を示す。平面は楕円形および隅丸長方形で、断面は浅い逆台形状を呈する。深さは 17 ～ 24 ㎝である。Ｄ－４号土坑は平面楕円形で、断面逆台形状を呈する。深さは 33 ㎝である。Ｄ－５号土坑は平面ほぼ円形で、断面Ｕ字状を呈する。深さは 54 ㎝である。埋没土は全て黒色土を主体とし、自然埋没と推定される。

遺物は、Ｄ－１・４号土坑で土師器坏・甕の破片、Ｄ－２号土坑で須恵器坏の破片、Ｄ－５号土坑で須恵器甕の口縁部片（第 20 図７）が出土している。出土遺物および埋没土が住居址と似ていることから、古墳～奈良・平安時代の帰属と推測される。

４．ピット（遺構：第４・25 図）

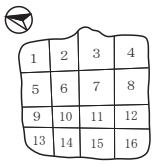
８基が検出され、Ｐ－ 42・43・44・45・48・54・56・60 号ピットが該当する。平面はほぼ円形および楕円形を呈する。規模は、長径 28 ㎝～ 44 ㎝、短径 25 ㎝～ 37 ㎝、深さ 18 ㎝～ 47 ㎝である。埋没土は黒色土を主体とし、自然埋没と推定される。埋没土が住居址と似ていることから、古墳～奈良・平安時代の帰属と推測される。

Ｈ－１号住



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	混入物 YP	混入物 白色粒	混入物 焼土	混入物 炭	備考
Ｈ－１	1	黒褐色土層		△	△	×	○	○	×	△	
	2	黒褐色土層	2＜1	◎	○	×	△	○	×	△	
	3	灰黄褐色土層	2＜3	○	○	×	×	※	×	×	
竈	1	黒色土層		○	○	×	※	×	△	△	にぶい黄褐色粘土○
	2	黒褐色土層	1＜2	○	○	×	×	×	△	△	にぶい黄褐色粘土◎
	3	黒褐色土層	2＜3	○	○	×	※	※	※	※	
	4	黒褐色土層	4＜3	◎	○	△	×	×	△	×	掘り方
Ｄ－１	1	黒褐色土層		○	○	×	△	△	×	×	
	2	黒色土層	2＜1	○	○	×	※	※	×	×	

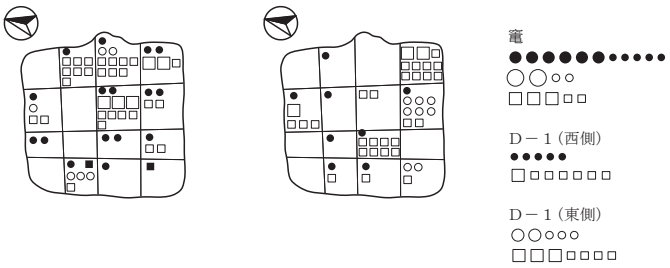
分割図



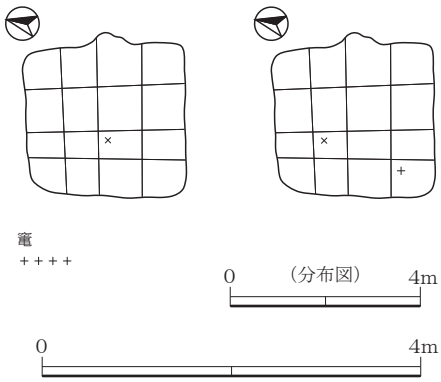
１層：10 ～ 12 ㎝
２層：８ ～ 10 ㎝

土師器
甕　834g
坏　5 g
須恵器
甕　2,345g
坏　2,058g
鉄製品　２点
編物石　５点

土器分布
１層　　２層

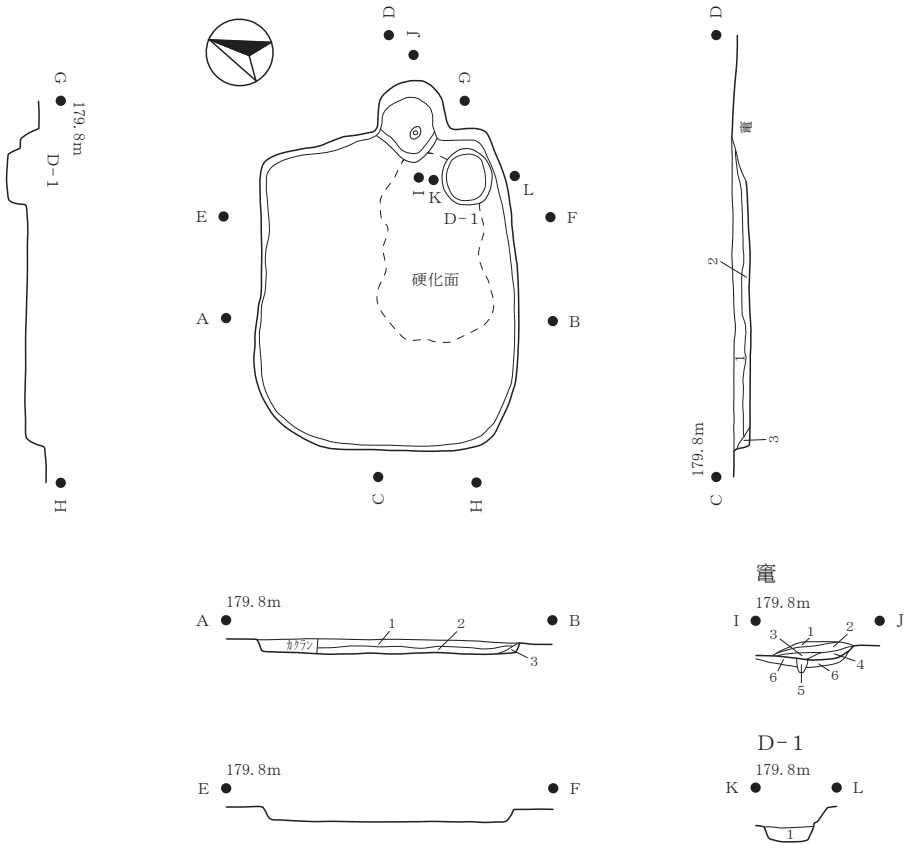


石製品・鉄製品分布
１層　　２層



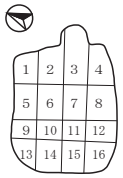
第６図　Ｈ－１号住居址実測図

Ｈ－２号住



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	混入物 YP	混入物 白色粒	混入物 焼土	混入物 炭	備考
Ｈ－２	1	黒褐色土層		△	△	×	○	○	×	△	
	2	暗褐色土層	1＜2	○	○	×	△	△	×	※	
	3	灰黄褐色土層	2＜3	○	○	×	×	※	×	×	
竈	1	黒色土層		○	○	×	△	△	△	△	明黄褐色粘土△
	2	灰黄褐色土層	1＜2	○	○	×	※	※	※	△	明黄褐色粘土△
	3	黒褐色土層	3＜2	○	○	×	※	×	※	※	
	4	黒褐色土層	4＜3	○	○	×	△	×	△	※	
	5	黒褐色土層	4＜5	△	○	×	×	×	△	△	
	6	黒褐色土層	5＜6	○	○	△	×	×	△	×	掘り方
Ｄ－１	1	暗褐色土層		○	○	×	△	※	×	△	

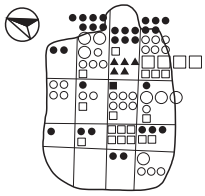
分割図



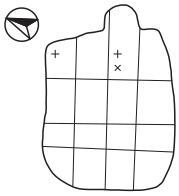
１層：13 ～ 17 ㎝

土師器
甕　1,083g
坏　5g
須恵器
甕　1,941g
坏　1,030g
灰釉陶器
碗　50g
鉄製品　１点
編物石　２点

土器分布
１層



石製品・鉄製品分布
１層

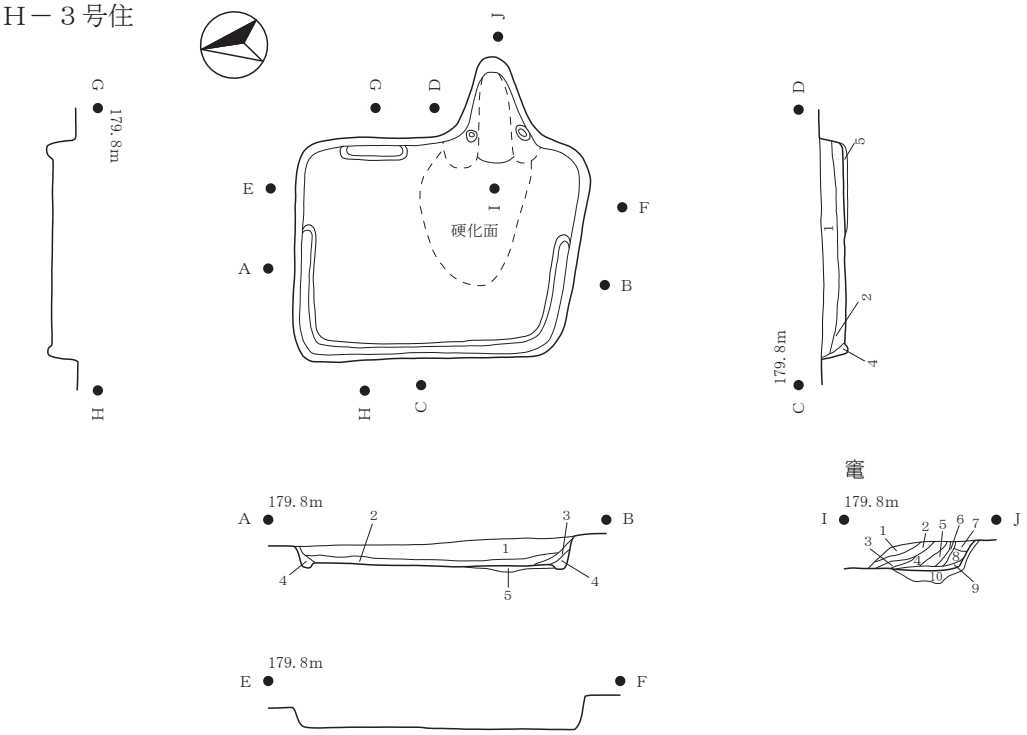


0　（分布図）　4m

0　4m

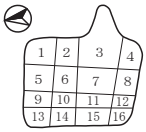
第７図　Ｈ－２号住居址実測図

Ｈ－３号住



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	白色粒	焼土	炭	備考
Ｈ－３	1	黒褐色土層		△	△	×	×	○	○	×	△	
	2	黒褐色土層	1＜2	○	○	×	×	△	△	×	△	
	3	黒褐色土層	2＜3	○	○	×	×	※	※	×	×	
	4	褐灰色土層	3＜4	○	○	×	×	※	※	×	×	
	5	褐色土層	5＜4	○	◎	○	○	×	×	×	×	貼り床
竈	1	黒色土層		○	○	×	○	※	※	△	△	
	2	黒色土層	2＜1	○	○	×	△	×	×	△	△	
	3	黒褐色土層	2＜3	○	○	×	※	×	×	△	△	
	4	暗褐色土層	3＜4	○	○	△	△	×	×	△	△	
	5	褐色土層	4＜5	○	○	×	○	×	×	○	○	
	6	明黄褐色土層	5＜6	○	◎	※	◎	×	×	※	×	黒色土※、ロームが主体
	7	にぶい黄褐色土層	7＜6	○	○	△	○	×	×	×	×	
	8	明黄褐色土層	7＜8	○	◎	※	◎	×	×	※	×	黒色土△、ロームが主体
	9	黒褐色土層	9＜8	○	○	×	※	×	×	△	△	
	10	褐灰色土層	9＜10	◎	○	×	△	×	×	△	×	掘り方

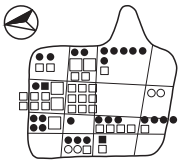
分割図



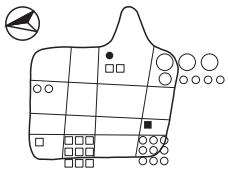
１層：14～16㎝
２層：７～11㎝

土師器
甕　448g
坏　11g
須恵器
甕　3,860g
坏　1,782g
鉄製品　１点

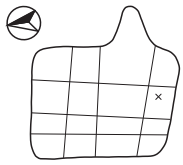
土器分布
１層



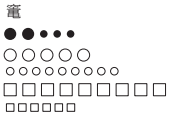
２層



石製品・鉄製品分布
１層



竈

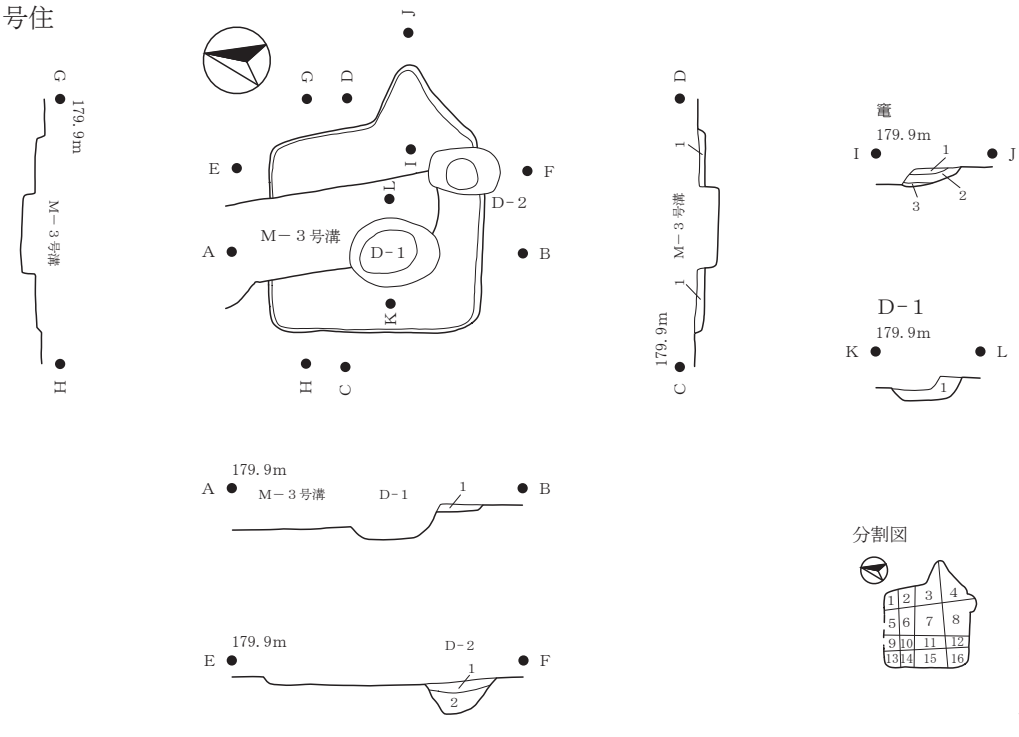


0　（分布図）　4m

0　4m

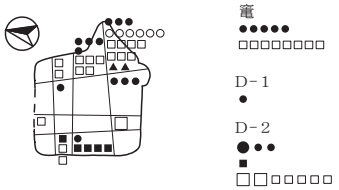
第８図　Ｈ－３号住居址実測図

Ｈ－４号住

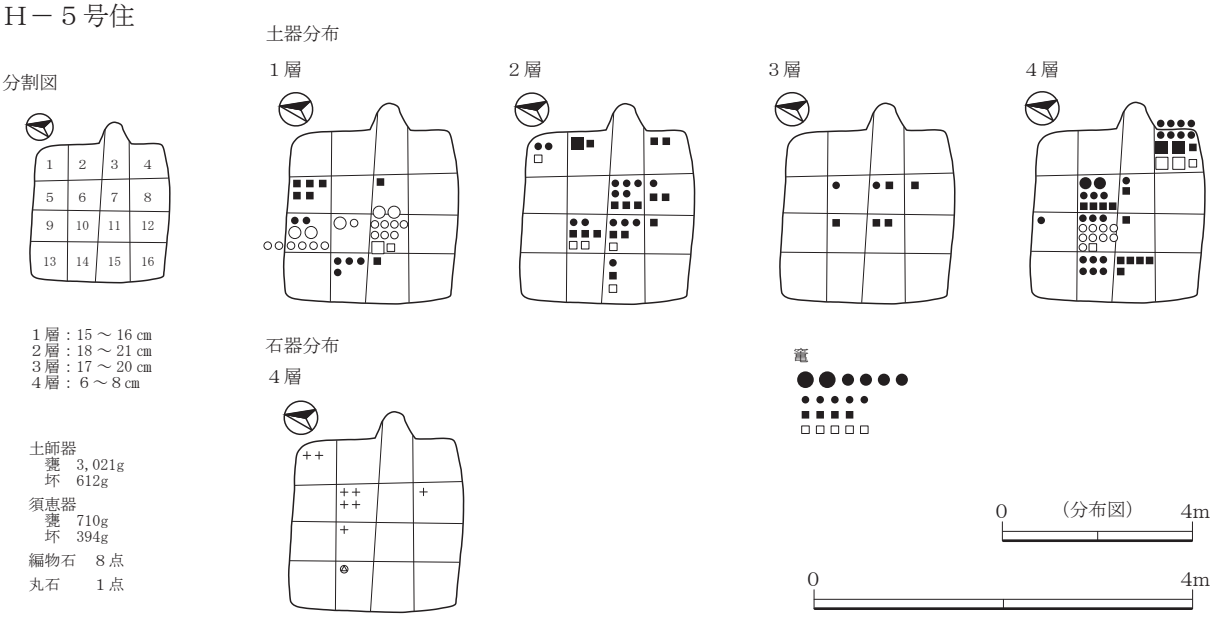


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	YP	白色粒	焼土	炭	備考
Ｈ－４	1	黒褐色土層		○	○	×	△	△	△	※	
竈	1	黒褐色土層		○	○	△	×	△	※	※	
	2	黒褐色土層	2＜1	○	○	△	×	△	※	※	
	3	黒色土層	3＜2	○	○	※	×	×	※	×	
Ｄ－１	1	黒色土層		○	○	△	※	△	×	×	
Ｄ－２	1	黒褐色土層		○	○	※	×	△	△	※	
	2	黒色土層	2＜1	○	○	○	×	※	△	△	

土器分布
１層

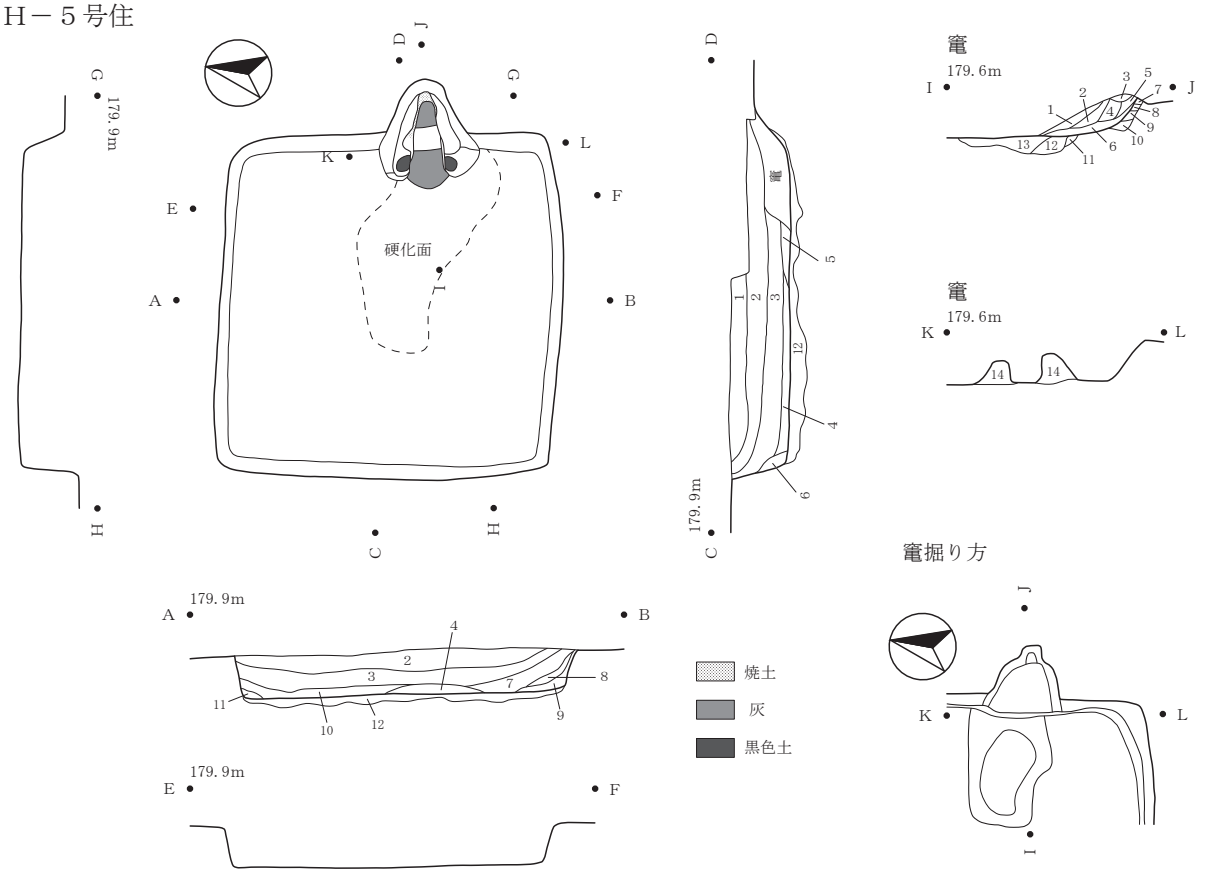


Ｈ－５号住



第９図　Ｈ－４・５号住居址実測図

Ｈ－５号住

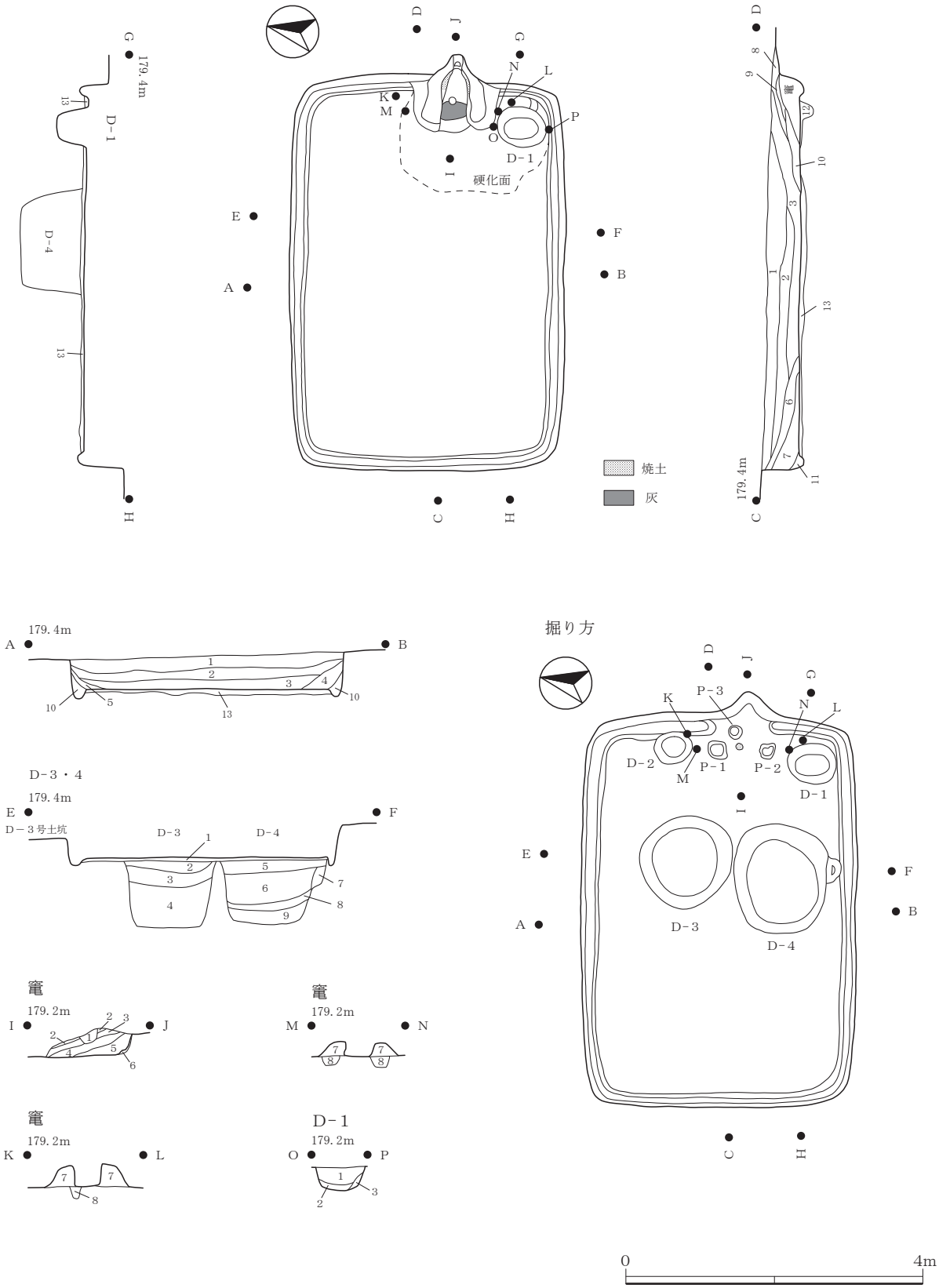


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	白色粒	焼土	炭	備考
Ｈ－５	1	黒褐色土層		○	○	×	×	◎	◎	×	※	
	2	黒褐色土層	1＜2	○	○	×	△	○	○	×	×	
	3	暗褐色土層	3＜2	○	○	×	○	◎	◎	×	×	
	4	暗褐色土層	3＜4	○	○	×	×	※	※	△	△	黄褐色土◎
	5	黒色土層	4＜5	○	○	×	○	※	※	×	×	
	6	黒色土層	6＜5	○	○	×	×	※	※	×	×	にぶい黄褐色土○
	7	黒褐色土層	6＜7	○	○	×	○	○	○	×	×	
	8	黒褐色土層	8＜7	○	○	×	×	△	△	×	×	
	9	黒色土層	9＜8	○	○	×	◎	※	※	×	×	
	10	黒色土層	10＜9	○	○	×	×	×	△	×	×	にぶい黄褐色土○
	11	黒色土層	11＜10	○	○	×	◎	※	※	×	×	
	12	黒色土層	11＜12	◎	○	◎	◎	×	×	×	×	にぶい橙色粘質土◎、貼り床
竈	1	黒色土層		○	○	×	×	×	×	○	※	橙色粘土△
	2	黒色土層	1＜2	○	○	×	×	×	×	○	※	明黄褐色粘土○
	3	黒色土層	2＜3	○	○	×	×	×	×	○	×	にぶい赤褐色土◎
	4	黒色土層	3＜4	○	○	×	×	×	×	◎	×	
	5	黒色土層	5＜4	○	○	×	×	×	×	○	×	
	6	黒色土層	5＜6	○	○	×	×	×	×	○	※	明黄褐色粘土※
	7	黒褐色土層	6＜7	◎	○	△	×	×	×	△	×	掘り方
	8	黒褐色土層	8＜7	△	○	×	×	×	×	◎	×	掘り方
	9	黒褐色土層	8＜9	◎	○	※	×	×	×	×	×	掘り方
	10	黒褐色土層	9＜10	○	○	×	×	×	×	○	×	掘り方
	11	褐灰色土層	10＜11	◎	○	×	×	×	×	○	×	掘り方
	12	黒色土層	12＜11	◎	○	×	×	×	△	×	×	橙色粘土◎、掘り方
	13	黒褐色土層	12＜13	◎	○	×	○	×	×	×	×	橙色粘土◎、掘り方
	14	黄橙色土層	13＜14	◎	◎	△	◎		○	※		黒色土△、竈袖材

0　　4m

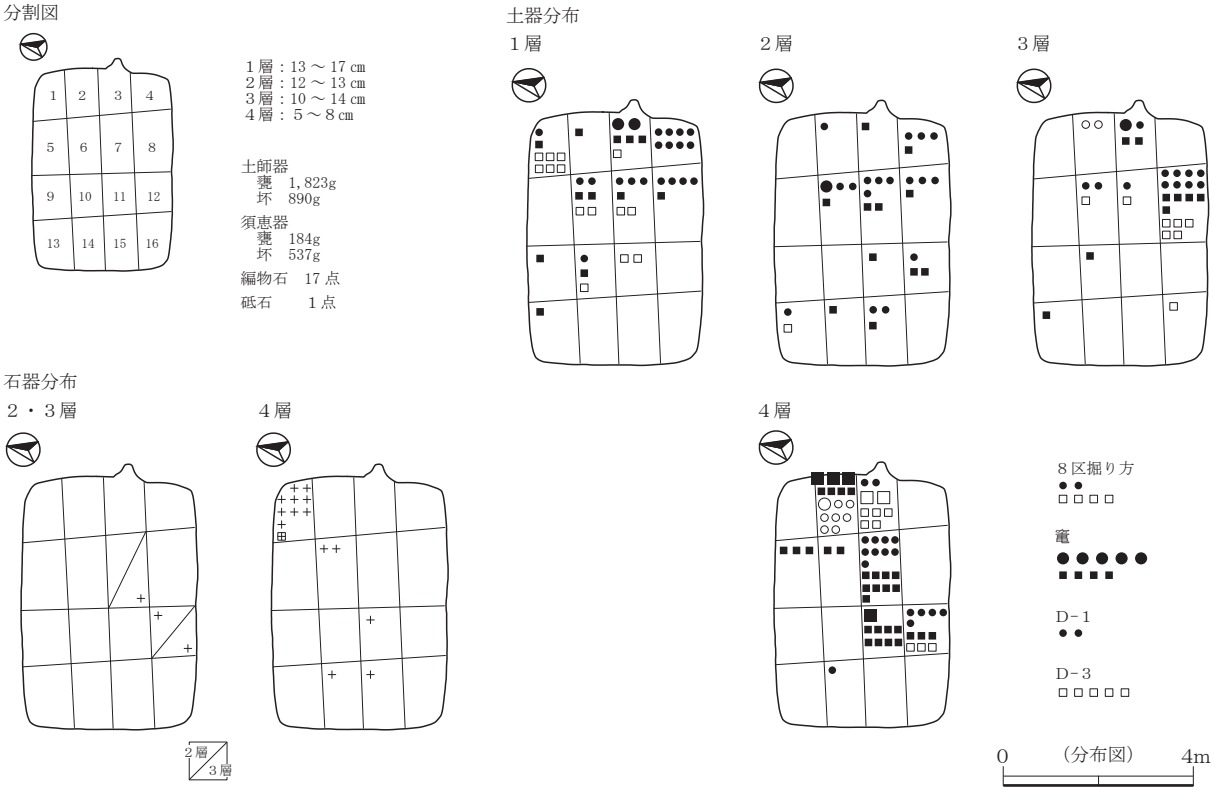
第10図　Ｈ－５号住居址実測図

H－６号住



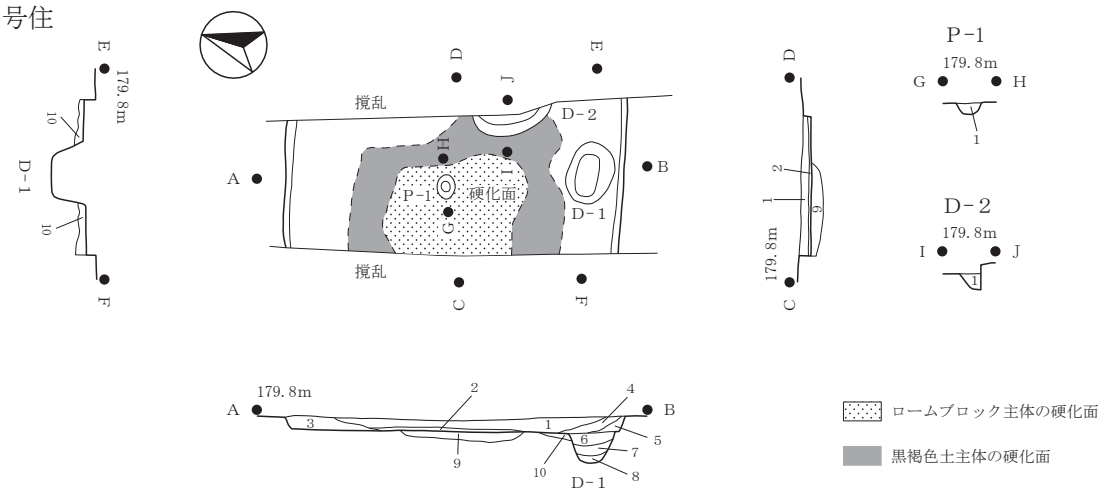
第11図　H－６号住居址実測図（１）

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	白色粒	焼土	炭	備考
H－6	1	黒色土層		○	○	○	×	○	○	×	△	
	2	黒色土層	2＜1	○	○	○	○	○	○	△	△	
	3	黒色土層	2＜3	○	○	△	△	△	△	※	△	
	4	黒褐色土層	3＜4	○	○	※	×	※	※	×	※	
	5	褐灰色土層	4＜5	○	○	△	×	×	×	×	×	
	6	黒褐色土層	6＜5	○	○	○	×	○	○	△	△	
	7	暗褐色土層	6＜7	○	○	○	×	○	○	×	×	黒色土△
	8	暗褐色土層	7＜8	○	○	○	○	△	△	△	△	
	9	暗褐色土層	9＜8	○	○	○	×	△	△	△	△	
	10	褐色土層	9＜10	○	○	○	×	△	△	○	○	
	11	黒色土層	11＜10	○	○	×	◎	×	×	×	×	壁溝
	12	灰褐色土層	11＜12	◎	○	×	◎	×	×	◎	○	竈袖下のピット（P－1）
	13	黒褐色土層	13＜12	◎	○	◎	◎	×	×	×	×	貼り床
竈	1	にぶい黄褐色土層		○	○	○	×	×	×	○	×	黒色土△
	2	暗褐色土層	2＜1	○	○	×	○	×	×	○	△	
	3	にぶい赤褐色土層	2＜3	○	○	×	○	×	×	○	※	黒色土△、土器出土
	4	暗赤褐色土層	4＜3	○	○	×	○	×	×	◎	△	黒色土△
	5	黒褐色土層	5＜4	○	○	○	×	×	×	○	△	
	6	にぶい赤褐色土層	5＜6	◎	○	×	×	×	×	◎	×	掘り方
	7	灰褐色土層	7＜6	◎	○	×	◎	×	×	◎	○	竈袖材
	8	灰褐色土層	8＜7	◎	○	×	○	×	×	◎	○	
D－1	1	黒色土層		○	○	×	○	×	×	※	×	
	2	黒色土層	2＜1	○	○	※	×	×	○	×	×	
	3	黒色土層	3＜2	○	○	×	×	×	×	×	×	黄褐色粘土ブロック○
D－3・4	1	黒褐色土層		◎	○	◎	◎	×	×	×	×	貼り床、H－6の13層と同じ
	2	橙色土層	1＜2	△	○	△	×	×	×	×	×	黒色土△、D－3
	3	黒色土層	3＜2	△	○	×	○	○	×	×	×	D－3
	4	橙色軽石層	3＜4	△	△	○	◎	×	×	×	×	黒色土○、D－3
	5	橙色軽石層	5＜4	△	×	×	×	×	×	×	×	黒色土△、D－4
	6	橙色軽石層	6＜5	△	×	×	◎	×	×	×	×	黒色土◎、D－4
	7	にぶい赤褐色土層	7＜6	○	◎	△	×	×	×	×	×	粘質土、壁面に貼り付けたものか、D－4
	8	黒色土層	8＜7	△	○	×	○	○	×	×	×	D－4
	9	橙色軽石層	8＜9	△	△	○	◎	×	×	×	×	黒色土○、D－4

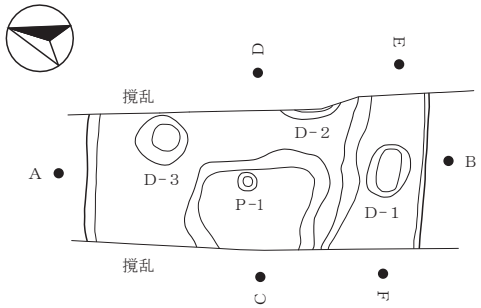


第12図　H－6号住居址実測図（2）

Ｈ－７号住

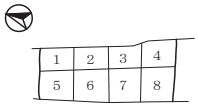


掘り方



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	白色粒	焼土	炭	備考
Ｈ－７	1	黒色土層		○	○	△	×	※	※	△	△	
	2	黒色土層	2＜1	○	○	○	×	※	※	△	△	
	3	黒褐色土層	2＜3	○	○	×	×	※	※	×	※	
	4	黒褐色土層	3＜4	○	○	×	×	○	○	△	※	
	5	黒褐色土層	5＜4	○	○	×	×	△	△	×	×	
	6	黒褐色土層	5＜6	○	○	×	×	×	×	△	△	Ｄ－１
	7	黒色土層	7＜6	○	○	×	△	※	※	×	×	黒色土◎、Ｄ－１
	8	黒色土層	8＜7	○	○	△	×	×	×	×	×	Ｄ－１
	9	黄橙色土層	8＜9	◎	○	×	×	×	×	×	×	貼り床、ローム主体、表面に焼土が散る
	10	黒褐色土層	10＜9	◎	○	△	×	×	×	×	×	貼り床
Ｐ－１	1	黒褐色土層		○	○	◎	◎	×	×	×	×	
Ｄ－２	1	暗褐色土層		○	○	△	×	×	×	○	×	

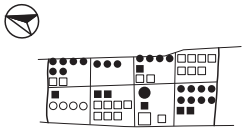
分割図



１層：８～15㎝

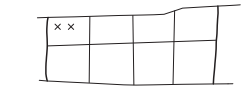
土師器
　甕　277g
　坏　40g
須恵器
　甕　182g
　坏　266g
鉄製品　２点

土器分布
１層



D-1
D-2

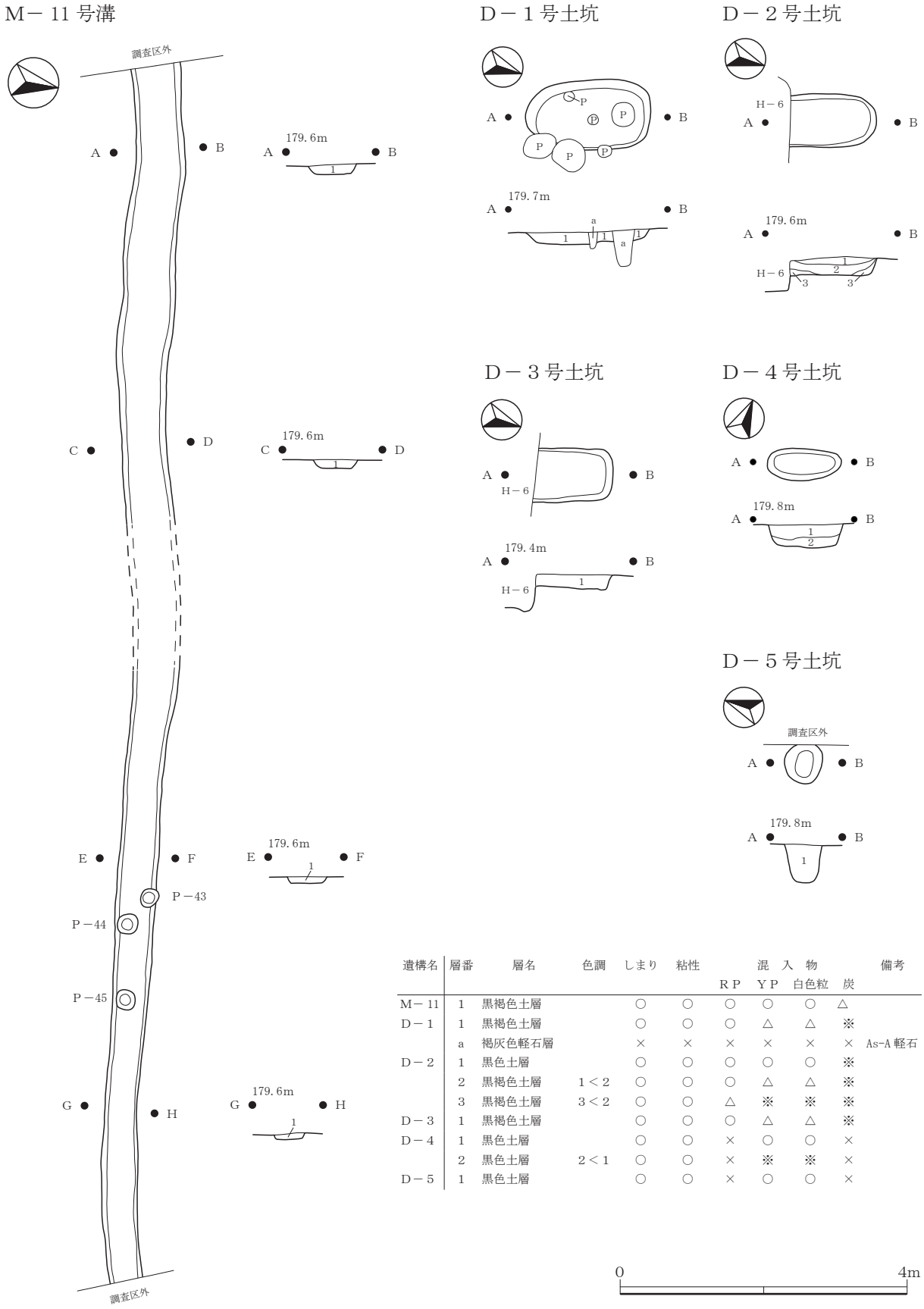
鉄製品分布
１層



0　（分布図）　4m

0　4m

第 13 図　Ｈ－７号住居址実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	混入物 YP	混入物 白色粒	混入物 炭	備考
M－11	1	黒褐色土層		○	○	○	○	○	△	
D－1	1	黒褐色土層		○	○	○	△	△	※	
	a	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	×	As-A 軽石
D－2	1	黒色土層		○	○	○	○	○	※	
	2	黒褐色土層	1＜2	○	○	○	△	△	※	
	3	黒褐色土層	3＜2	○	○	△	※	※	※	
D－3	1	黒褐色土層		○	○	○	△	△	※	
D－4	1	黒色土層		○	○	×	○	○	×	
	2	黒色土層	2＜1	○	○	×	※	※	×	
D－5	1	黒色土層		○	○	×	○	○	×	

第 14 図　M－11 号溝、D－1～5 号土坑実測図

（２）遺物

１．古墳時代の土器（第 20 図）

器種は、須恵器瓹が見られる。扁平な胴部で、底部は小さな平底である。胴部は２条の横位沈線の間に連続刺突文が施され、下位は回転篦ケズリとなる。遺物包含層（Ｖ層）からの出土である。

２．奈良時代の土器（第 18 ～ 19 図）

器種は、土師器坏・盤・鉢・甕、須恵器高台付坏・蓋・甕が見られる。土師器坏は、丸底から口縁部が短く内傾・内湾・直立するもので、口径により大中小に分化する。第 18 図８は内底面に「×」の線刻がある。盤は体部の弱い稜線から外反する口縁部に至る。鉢は体部の深い丸底で、口縁部は直立する。甕は長胴で、胴部が直線的で縦方向の篦削りを施すタイプと、胴部上位にわずかな膨らみを持ち斜方向の篦削りを施すタイプがある。内面は横方向の篦ナデで、第 19 図７のようにミガキが施されるものも見られる。須恵器高台付坏は平底から体部が直線的に立ち上がる。高台は内端が接地し、断面台形を呈する。底部回転篦ケズリである。蓋は短い返りを有するものである。甕は叩き整形の破片のみである。

３．平安時代の土器（第 15 ～ 18・20 図）

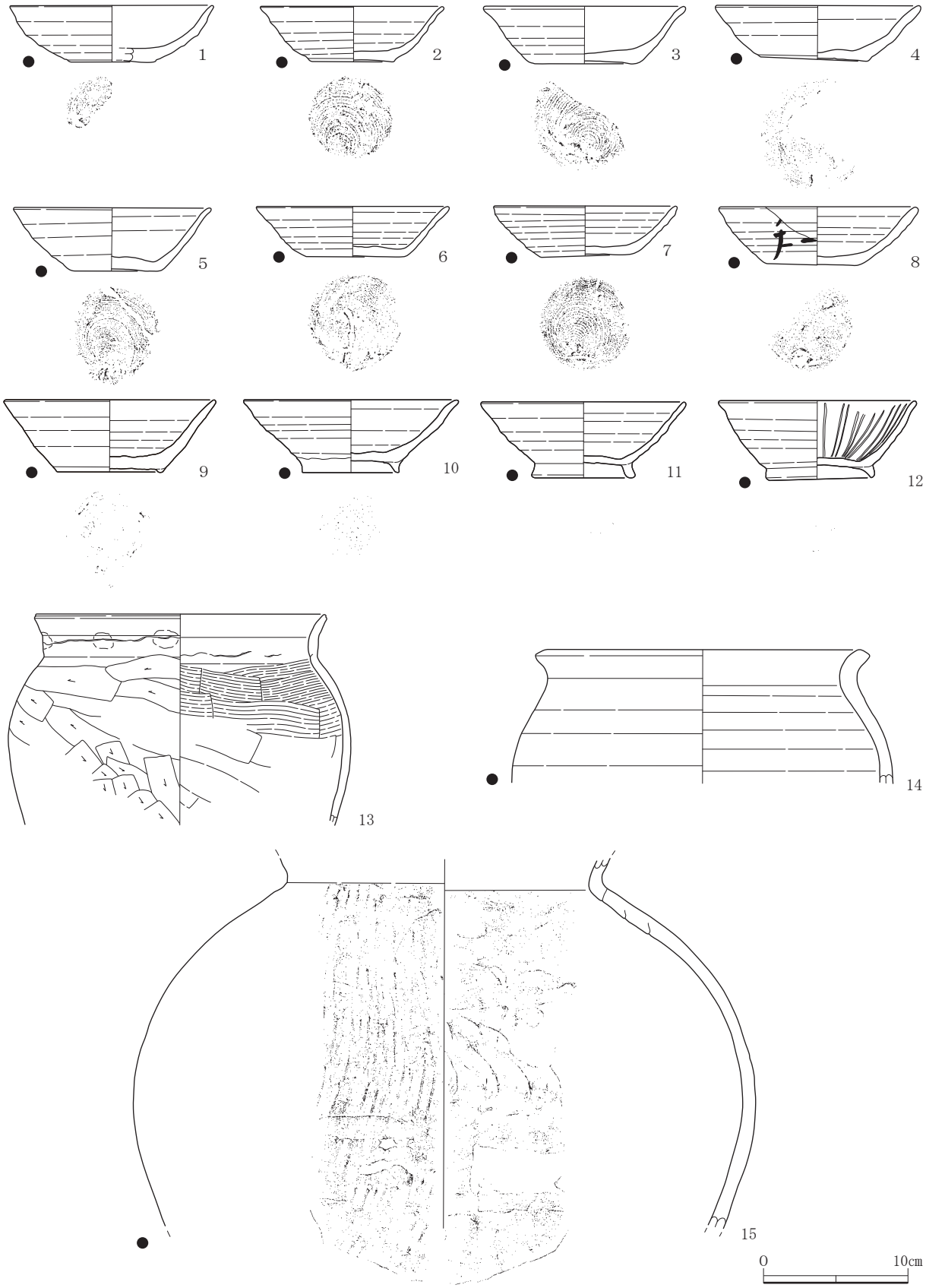
器種は、土師器坏・甕、須恵器坏・高台付碗・高台付皿・甕・甑・羽釜、灰釉陶器碗が見られる。土師器坏は小片のため図示できるものはなかった。甕は器肉が厚くなる。口縁部が崩れた「コ」の字状を呈するものと、口縁部が短く外反するものがある。須恵器坏・高台付碗は口縁部がわずかに外反するもの、轆轤痕が顕著で体部が直線的なもの、体部下位にわずかな丸みを持ち口縁部が外反するものがある。底部は全て回転糸切り未調整である。焼成は酸化焔が主体を占める。高台の断面形状は三角形と台形がある。第 15 図 12 は内面に放射状の暗文が施されている。高台付皿は底部回転糸切り未調整で、断面三角形の高台が付く。酸化焔焼成である。墨書土器は２点確認された。第 15 図８の坏（体部外面：「秋」）と第 16 図７の高台付皿（内底面：判読不明）である。須恵器甕は叩き整形と轆轤整形があり、酸化焔焼成が主体となる。甑・羽釜は轆轤成形で、羽釜の口唇部は水平またはやや内傾し、断面三角形の鍔が付く。焼成は酸化焔である。灰釉陶器碗は体部が浅く開く器形で、底部は回転篦削りである。高台が三日月状を呈し、釉薬刷毛塗りの第 20 図９と、三日月高台の屈曲が緩やかになり、釉薬漬け掛けの第 16 図８・第 18 図４がある。

４．鉄製品・鉄滓・石製品・編物石（第 16・17・19 ～ 21 図）

鉄製品・鉄滓は、平安時代のＨ－１・２・３・７号住居址から出土した。器種は刀子、鎌、焼印が確認された。鉄滓は椀形鉄滓である。石製品は、奈良時代のＨ－６号住居址から砥石が１点出土した。石材は安山岩で、角柱状を呈し、１面に研磨による窪みが認められる。

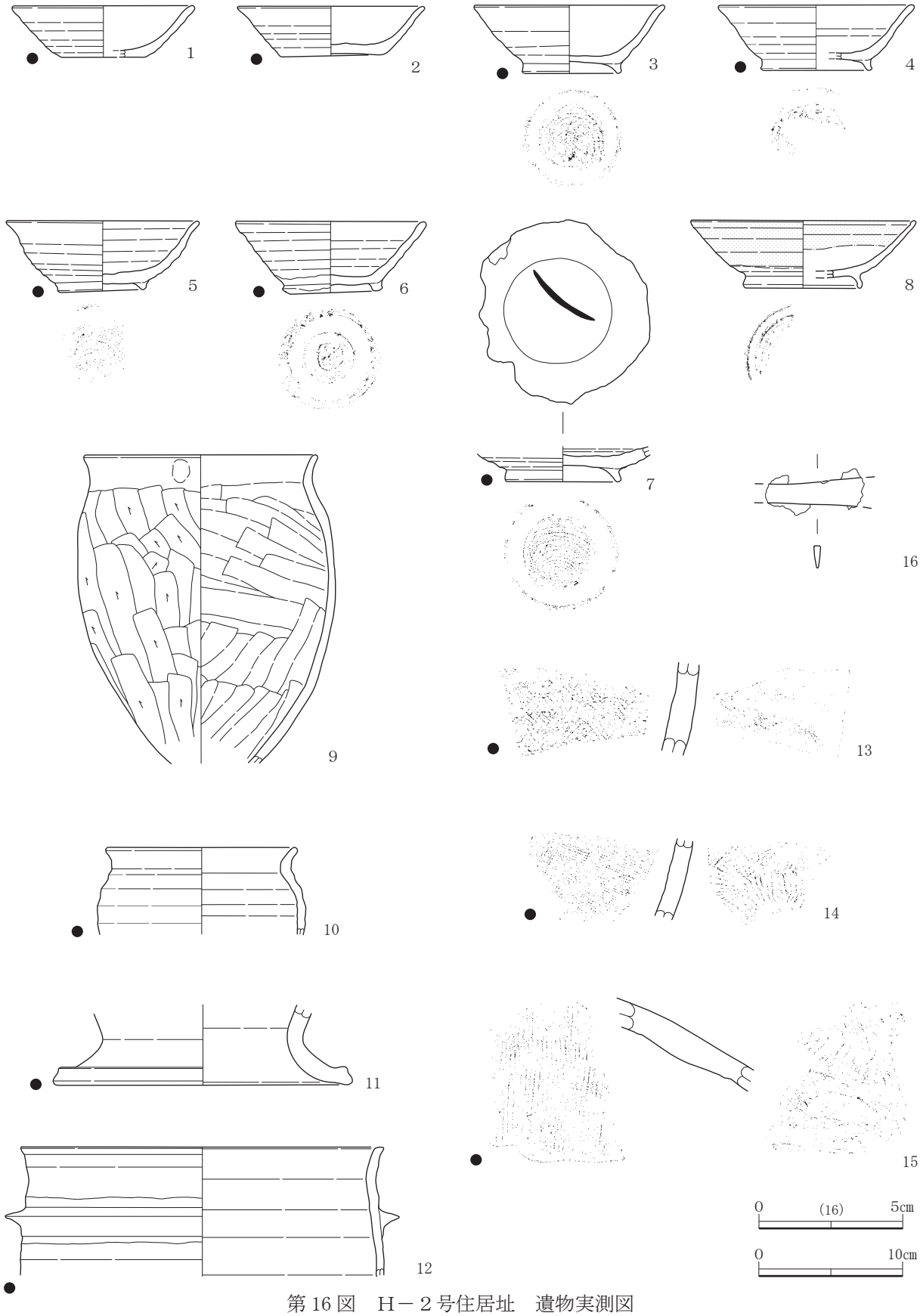
編物石は、全て安山岩である。奈良時代の住居址からは、Ｈ－５号住居址で８点、Ｈ－６号住居址で 17 点(内欠損１点)が出土した。大きさの平均値は(欠損を除く)、重量 490.07 ｇ、長さ 13.2 ㎝、幅 6.1 ㎝、厚さ 4.2 ㎝である。平安時代の住居址からは、Ｈ－１号住居址で５点（内欠損１点)、Ｈ－２号住居址で２点が出土した。大きさの平均値は（欠損を除く)、重量 601.83 ｇ、長さ 14.0 ㎝、幅 6.6 ㎝、厚さ 4.7 ㎝である。

H－１号住



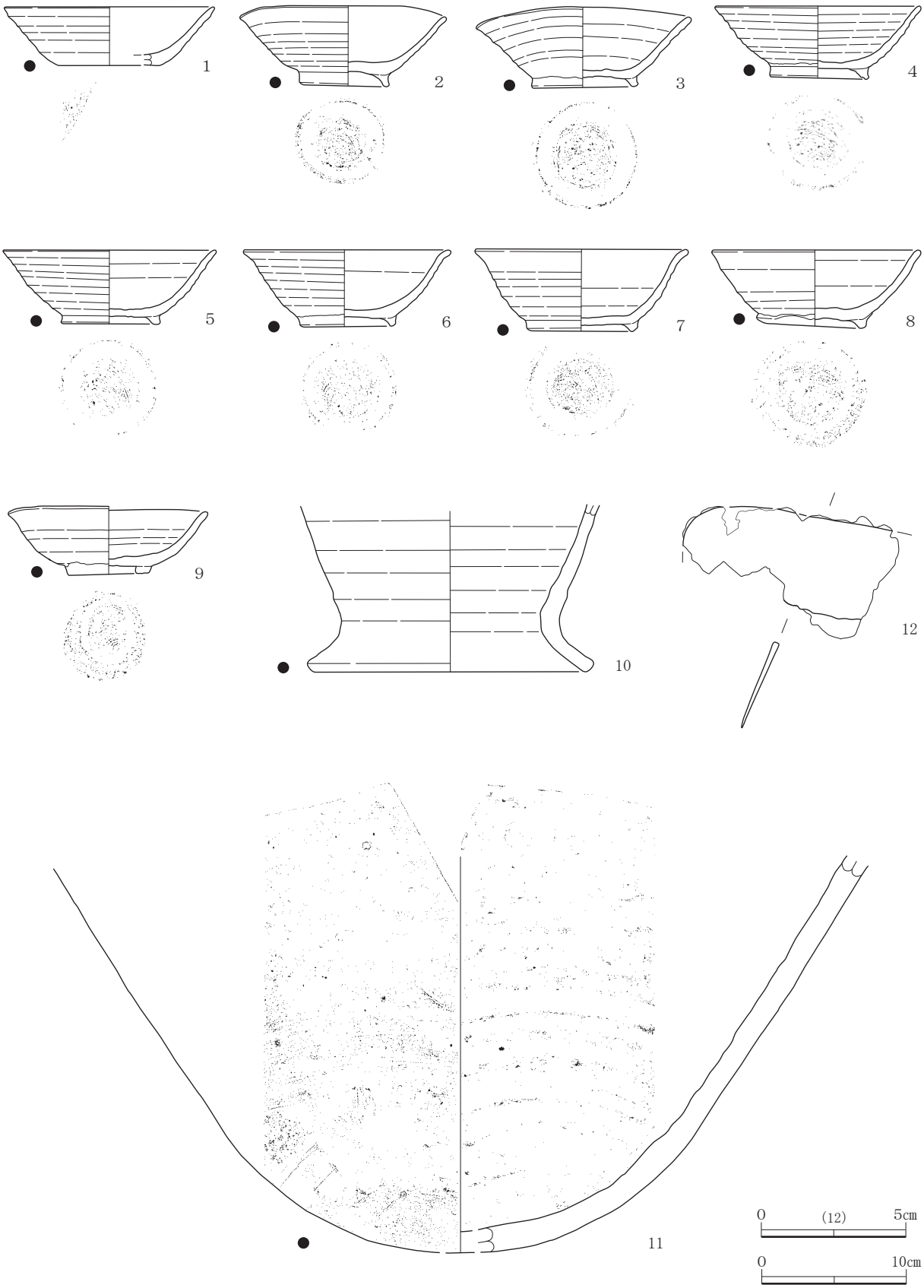
第 15 図　H－１号住居址　遺物実測図

H－２号住

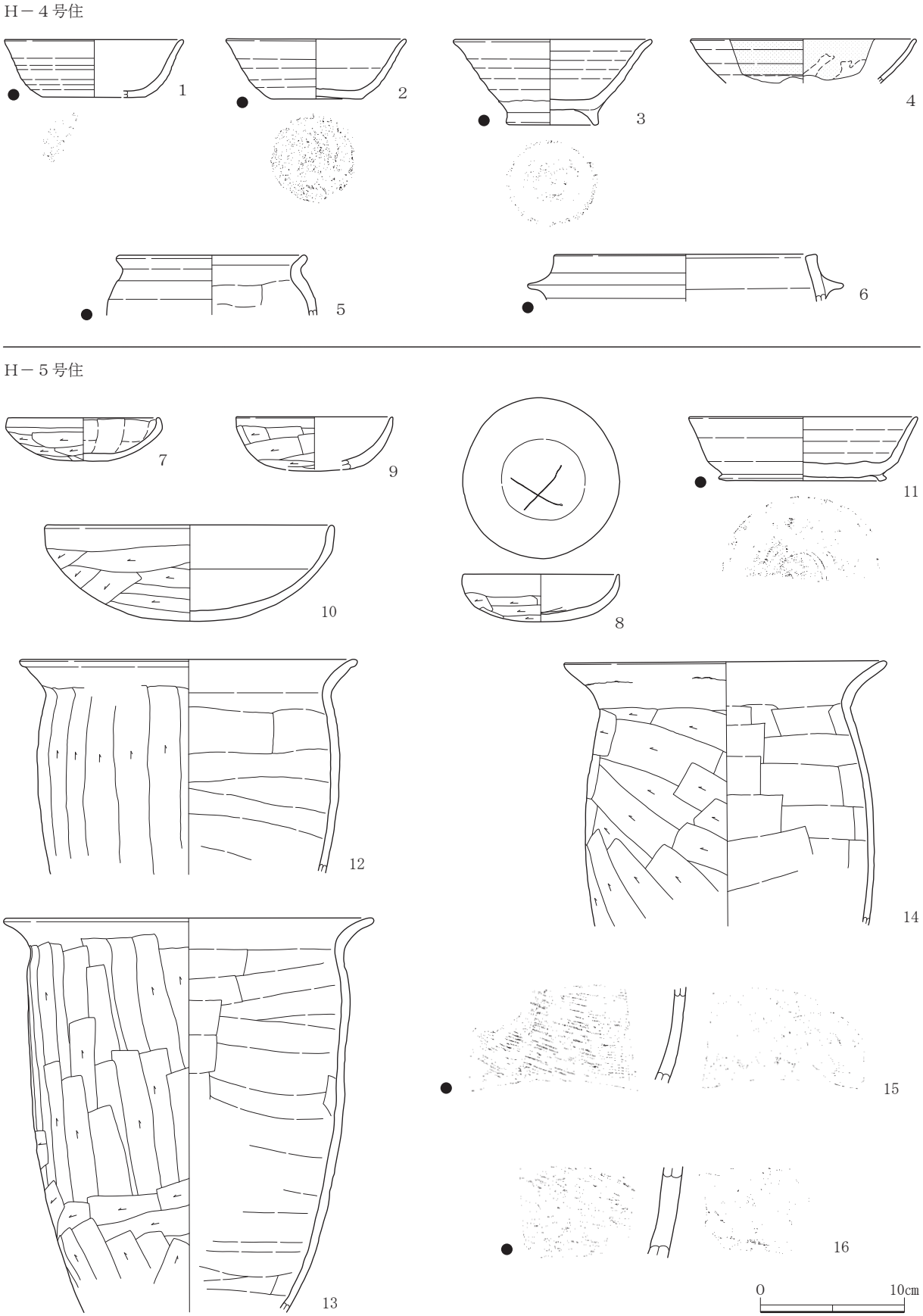


第 16 図　H－２号住居址　遺物実測図

H－３号住

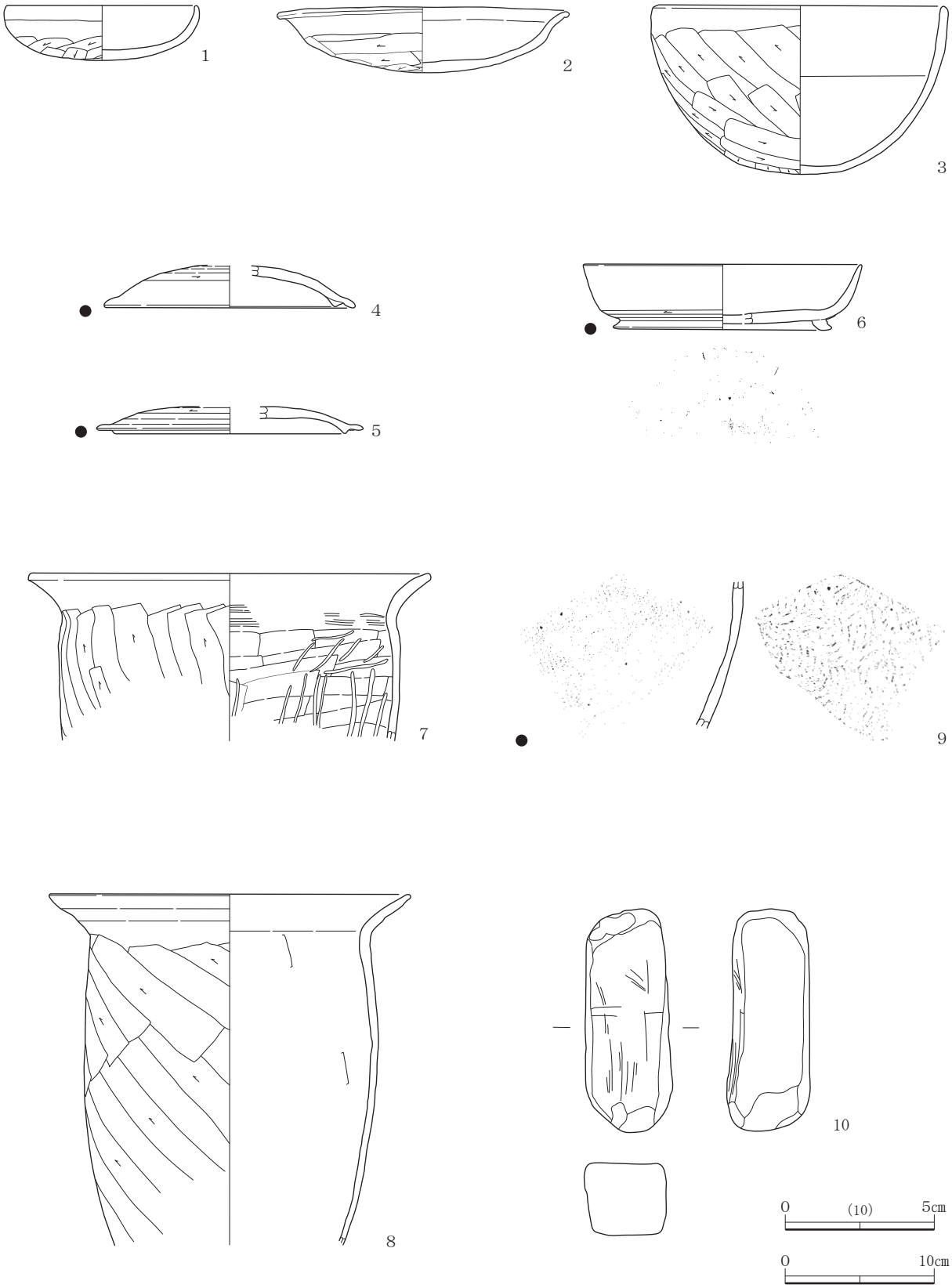


第 17 図　H－３号住居址　遺物実測図



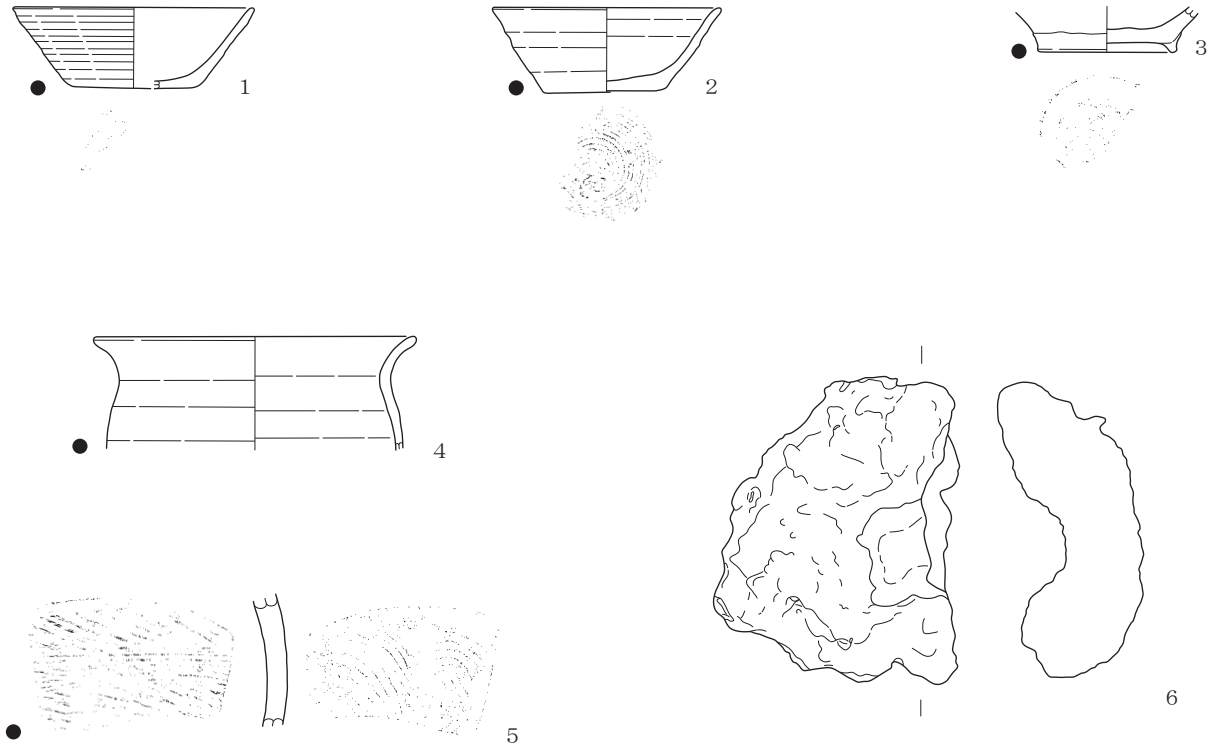
第 18 図　H－４・５号住居址　遺物実測図

H－6号住

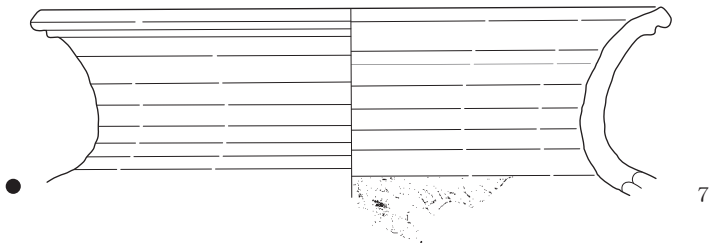


第19図　H－6号住居址　遺物実測図

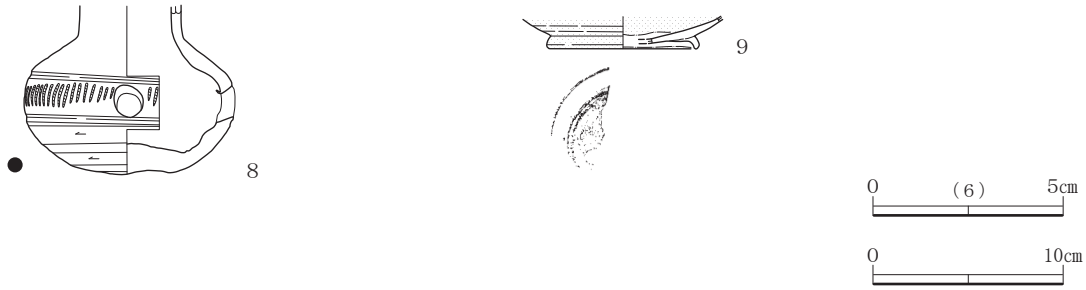
H－７号住



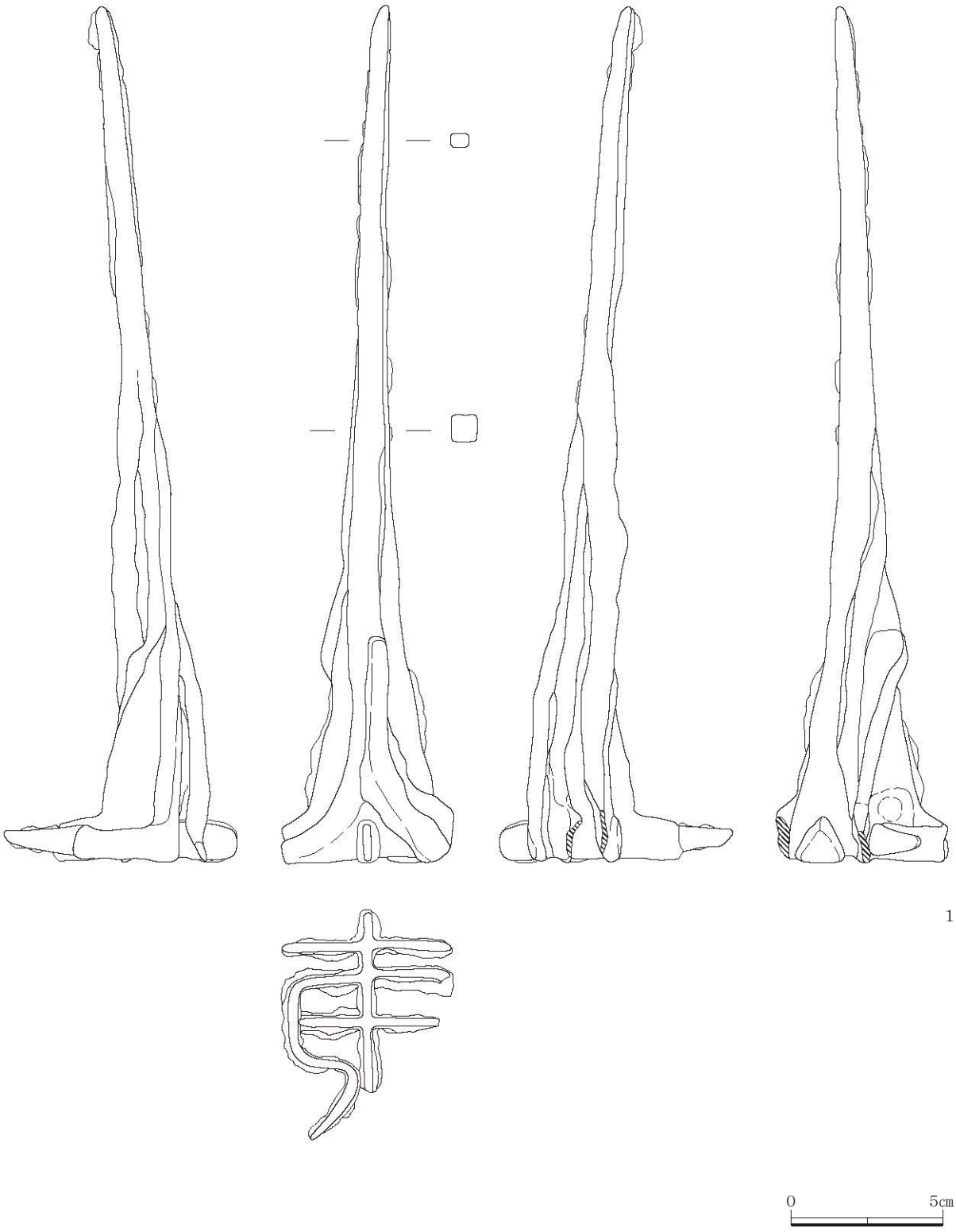
D－５号土



遺構外



第 20 図　H－７号住居址、D－５号土坑、遺構外　遺物実測図



第 21 図　Ｈ－７号住居址　遺物実測図

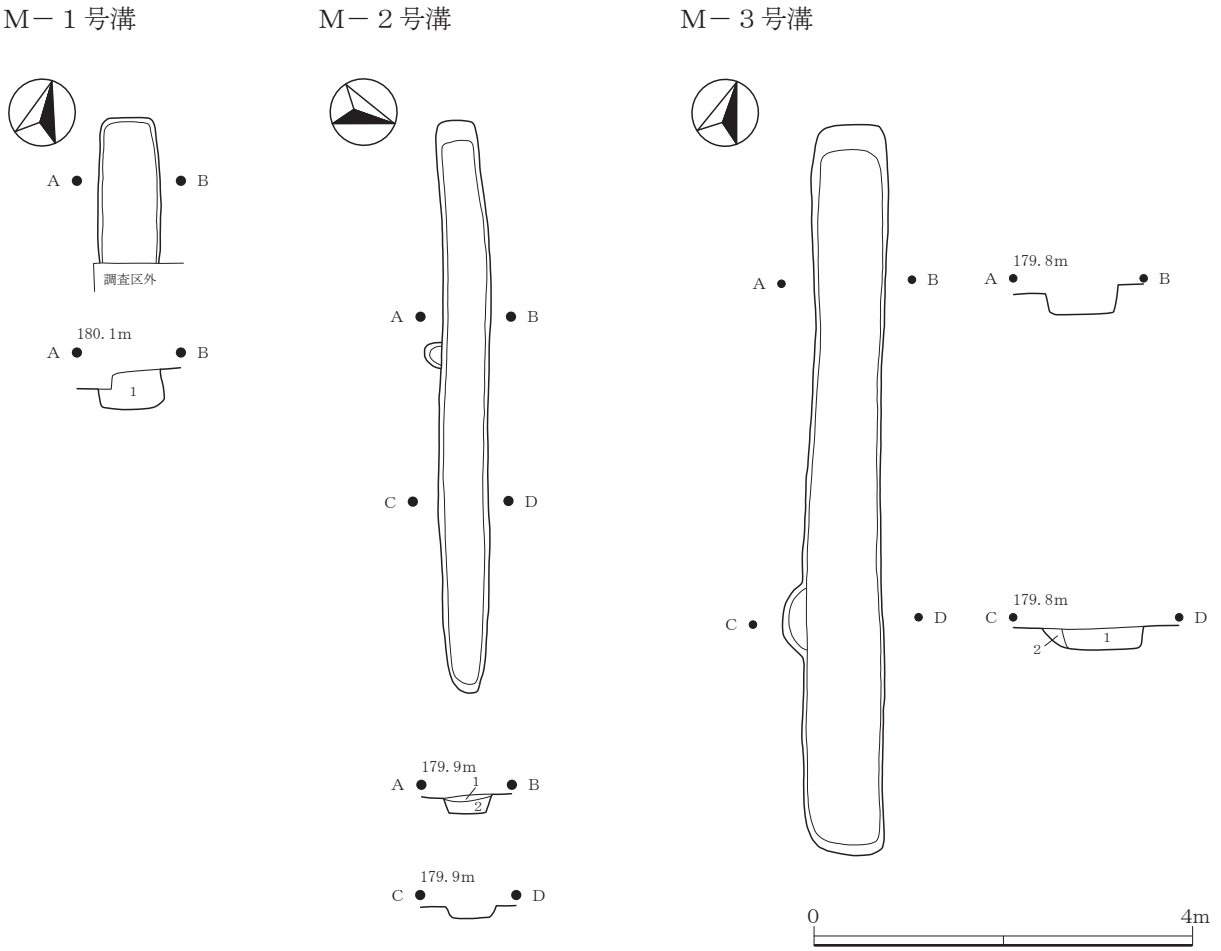
4　近世の遺構

1．溝（第 22 ～ 24 図）

12 条が確認され、Ｍ－１～ 10・12・13 号溝が該当する。断面は箱状を呈し、底面はほぼ平坦である。走行方位はＮ－ 15 ～ 22°－Ｗ（北西－南東）およびＮ－ 66 ～ 72°－Ｅ（南西－北東）の２方向に分かれる。規模は、長さ 253 ～ 763 ㎝、幅 44 ～ 88㎝ 、深さ 12 ～ 40 ㎝である。埋没土は浅間Ａ軽石が主体となり、人為による埋め戻しの様相を示す。遺物は、Ｍ－２～４・６～ 10・12 号溝で土師器甕、須恵器坏・甕、灰釉陶器碗、近世陶器碗・甕、近世在地系土器鍋等の破片が少量出土している。

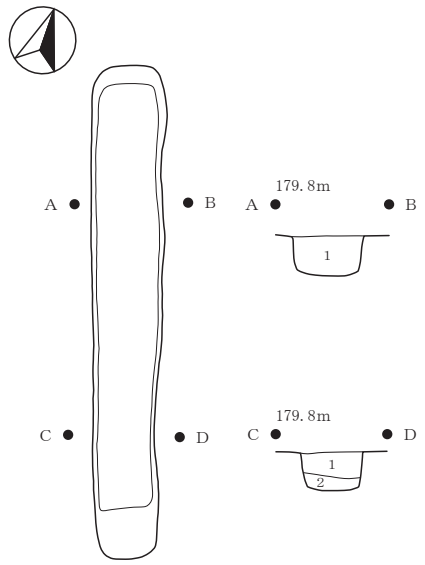
2．ピット（第４・25 図）

52 基が確認され、Ｐ－１～ 41・46・47・49 ～ 53・55・57 ～ 59 号ピットが該当する。平面は楕円形およびほぼ円形を呈する。規模は、長径 17 ㎝～ 87 ㎝、短径 13 ㎝～ 44 ㎝、深さ 10 ㎝～ 74 ㎝である。Ｐ－１～ 38 号ピットは、不揃いながらも２基ずつ逆「Ｌ」字状に並ぶが、深さは一定ではない。北西側には空閑地が広がり、区画を目的としたものと推測される。埋没土は浅間Ａ軽石を含む褐灰色土が主体となる。遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・甕の小片がわずかに出土している。

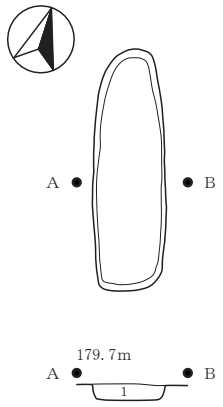


第 22図　Ｍ－１～３号溝実測図

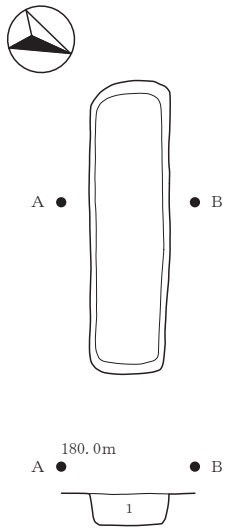
M－４号溝



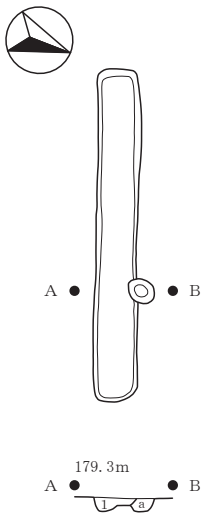
M－５号溝



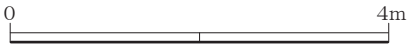
M－６号溝



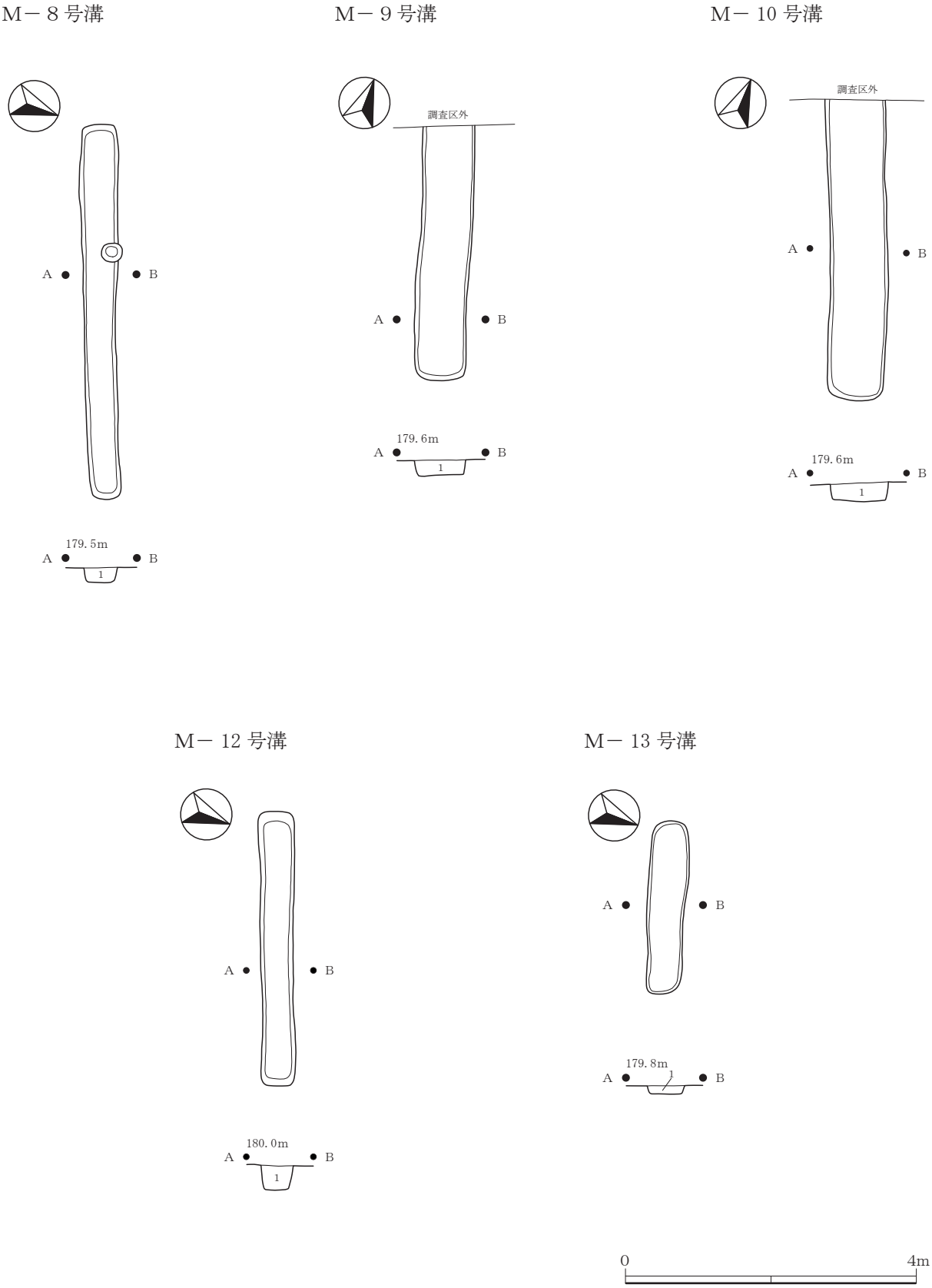
M－７号溝



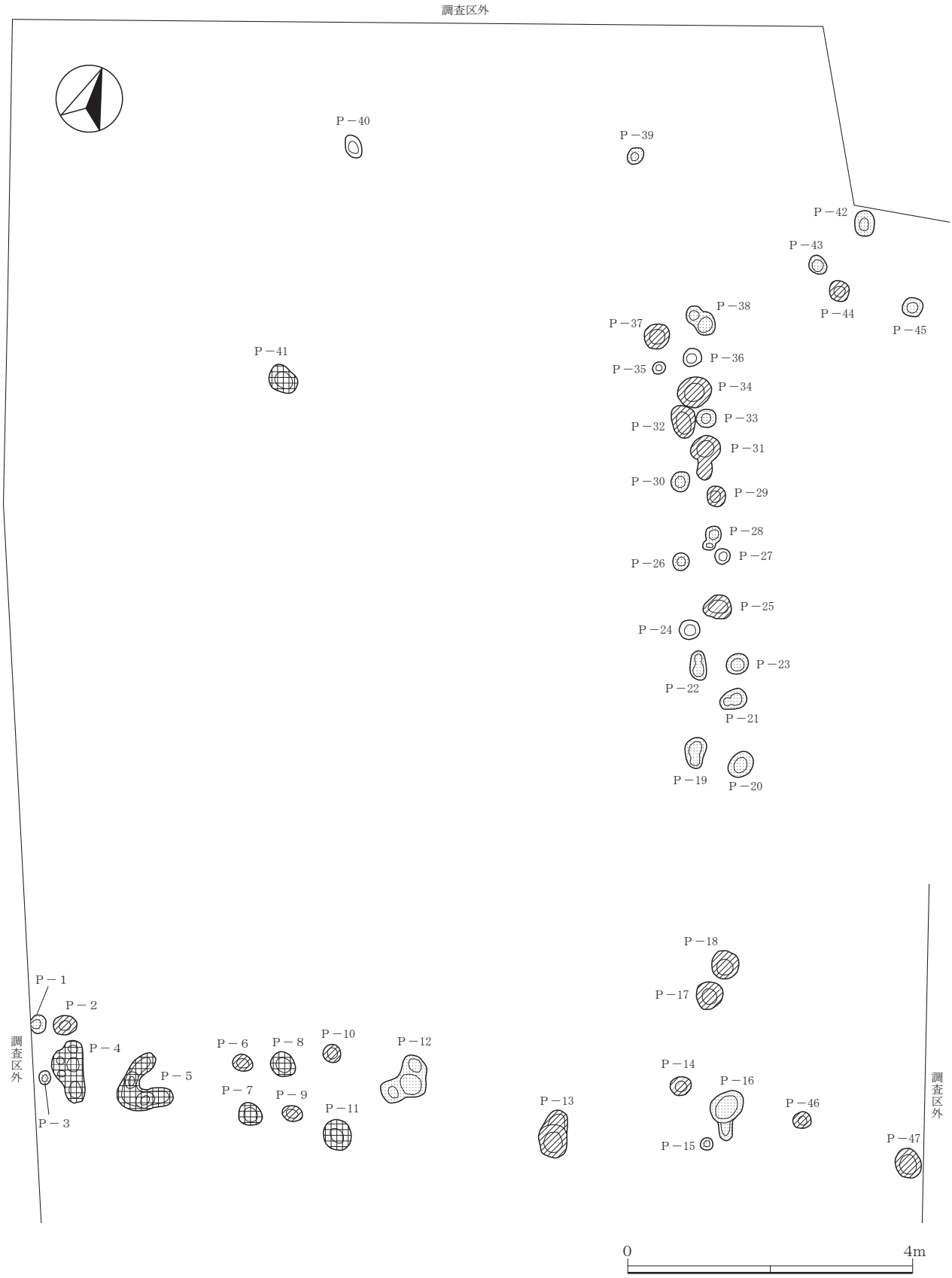
遺構名	層番	層　名	色調	しまり	粘性	混　入　物			備考
						A	YP	白色粒	
M－１	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石
M－２	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石
	2	褐灰色土層	2＜1	△	○	○	×	×	
M－３	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石
	2	褐灰色軽石層	2＜1	×	×	×	○	×	As-A 軽石
M－４	1	褐灰色軽石層		×	×		×	×	As-A 軽石
	2	黒色土層	2＜1	○	○	◎	×	×	褐色土ブロック△
M－５	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石
M－６	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石
M－７	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石
	a	黒色土層		○	○	×	△	△	
M－８	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石
M－９	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石
M－10	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石
M－12	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石
M－13	1	褐灰色軽石層		×	×	×	×	×	As-A 軽石



第 23 図　M－４～７号溝実測図



第24図　M－８～10・12・13号溝実測図



第 25 図　Ｐ－１～ 47 号ピット実測図

住居址観察表

（単位：m）

遺構名	平面形態	規模			壁溝	主軸方向	主柱穴	土坑		貼床	竈		遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ				貯蔵	床下		位置	構造			
H－1	中形正方形	3.22	3.08	0.22	×	N－76°－E	×	南東隅	×	×	東壁中央	B	○	10c前	墨書土器出土。
H－2	小形縦長方形	3.18	2.62	0.17	×	N－70°－E	×	南東隅	×	×	東壁南寄り	B	△	10c前	墨書土器出土。
H－3	小形横長方形	2.84	2.18	0.27	部分的	N－109°－E	×	×	×	×	東壁南寄り	B	○	10c前	
H－4	小形正方形	2.20	2.06	0.09	×	N－79°－E	×	×	×	×	東壁南寄り	不明	※	10c前	
H－5	中形正方形	3.42	3.27	0.64	×	N－82°－E	×	×	×	○	東壁南寄り	A	○	8c前	刻書土器出土。
H－6	中形縦長方形	5.12	3.58	0.47	全周	N－79°－E	×	南東隅	2	○	東壁南寄り	A	◎	8c前	
H－7	不明	〈3.46〉	〈1.61〉	0.15	×	N－75°－E	×	不明	2	○	不明	不明	△	10c前	焼印出土。

凡例　平面形態　小形：4m以下　中形：4～6m　大形：6m以上

規　　模　（　）：推定値　＜　＞：残存値

竈　構　造　A：ローム＋黒色土　B：ローム＋黒色土＋袖芯礫

遺物出土量　土器類　※：1～1000g　△：1000～5000g　○：5000～10000g　◎：10000g以上

溝観察表

（単位：m）

遺構名	断面形態	規模			遺物	時期	備考
		長さ	幅	深さ			
M－1	箱状	〈1.52〉	0.60～0.68	0.40	×	1783年以降	
M－2	箱状	6.08	0.44～0.52	0.20	近世陶器※	1783年以降	
M－3	箱状	7.63	0.72～0.88	0.32	土師器・須恵器※	1783年以降	H－4と重複、本溝が新しい。
M－4	箱状	5.16	0.64～0.80	0.40	土師器※	1783年以降	
M－5	箱状	2.53	0.52～0.80	0.17	×	1783年以降	H－5と重複、本溝が新しい。
M－6	箱状	3.12	0.80～0.86	0.33	近世在地系土器※	1783年以降	H－41と重複、本溝が古い。
M－7	箱状	3.49	0.44～0.48	0.15	土師器※	1783年以降	H－6と重複、本溝が新しい。
M－8	箱状	5.12	0.44～0.52	0.21	須恵器※	1783年以降	H－6と重複、本溝が新しい。
M－9	箱状	〈3.53〉	0.68～0.72	0.22	土師器・須恵器※	1783年以降	M－11と重複、本溝が新しい。
M－10	箱状	〈4.16〉	0.72～0.84	0.26	土師器・須恵器※	1783年以降	M－11と重複、本溝が新しい。
M－11	逆台形状	〈16.83〉	0.44～0.76	0.14	×	古墳～古代	M－9・10およびP－43～45と重複、本溝が古い。
M－12	箱状	3.74	0.44～0.52	0.32	近世陶器※	1783年以降	
M－13	箱状	2.36	0.48～0.56	0.12	×	1783年以降	

土坑観察表

（単位：m）

遺構名	平面形態	規模			断面	遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ				
D－1	楕円形	1.75	0.96	0.17	逆台形状	土師器坏・甕※	古墳～古代	P－32・34～37と重複、本土坑が古い。
D－2	楕円形か	〈1.20〉	0.74	0.24	逆台形状か	須恵器坏※	古墳～古代	H－6と重複、本土坑が古い
D－3	隅丸長方形か	〈1.08〉	0.71	0.20	逆台形状か	×	古墳～古代	H－6と重複、本土坑が古い。
D－4	楕円形	1.02	0.45	0.33	逆台形状	土師器坏・甕※	古墳～古代	
D－5	円形	〈0.53〉	0.52	0.54	U字状	須恵器甕※	古墳～古代	

ピット観察表

（単位：cm）

遺構名	規模		
	長径	短径	深さ
P－1	27	－	20
P－2	33	27	54
P－3	20	16	20
P－4	87	44	62
P－5	80	27	71
P－6	29	22	51
P－7	34	32	67
P－8	37	32	62
P－9	29	22	58
P－10	25	24	54
P－11	44	37	74
P－12	74	42	37

遺構名	規模		
	長径	短径	深さ
P－13	68	39	57
P－14	29	26	50
P－15	17	17	26
P－16	51	40	37
P－17	40	38	45
P－18	39	39	59
P－19	44	29	36
P－20	40	32	36
P－21	29	27	36
P－22	41	13	34
P－23	31	28	36
P－24	28	27	17

遺構名	規模		
	長径	短径	深さ
P－25	40	23	53
P－26	25	23	24
P－27	22	22	14
P－28	25	23	35
P－29	32	30	47
P－30	28	25	26
P－31	63	42	40
P－32	46	33	45
P－33	28	25	30
P－34	48	41	52
P－35	18	18	16
P－36	27	23	10

遺構名	規模		
	長径	短径	深さ
P－37	36	34	43
P－38	46	32	28
P－39	23	22	21
P－40	36	23	19
P－41	42	32	62
P－42	35	28	27
P－43	28	23	36
P－44	28	28	40
P－45	31	30	32
P－46	25	23	59
P－47	42	34	43
P－48	29	24	47

遺構名	規模		
	長径	短径	深さ
P－49	25	23	16
P－50	35	20	33
P－51	30	25	36
P－52	74	35	40
P－53	28	－	14
P－54	29	25	18
P－55	32	28	19
P－56	44	37	27
P－57	21	19	23
P－58	38	29	21
P－59	30	26	28
P－60	87	－	15

第2表　遺構観察表

挿図№	番号	遺構名	区	層	種類	器種	法量（cm）			成・整形技法の特徴						備考
							口径	底径	器高	①焼成	②色調	③胎土	残存	外面	内面	
5図	1	一括	—	—	縄文土器	深鉢	—	—	—	良好	橙色	石英・白色粒・黒色粒	胴部片	半截竹管状工具による縦位の沈線文。	ナデ。	内面摩耗。中期初頭（五領ヶ台式）。
	2	C－1 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	—	V	縄文土器	深鉢	—	—	—	良好	にぶい赤褐色	片岩・白色粒・黒色粒	胴部片	単節ＲＬ縄文。	ナデ。	中期初頭（五領ヶ台式）。
	3	H－6	一括	一括	縄文土器	深鉢	—	—	—	良好	明赤褐色	金雲母・白色粒・黒色粒	胴部片	丸棒状工具による横位沈線文、横隆帯上に指頭押圧、ひれ状圧痕。	ナデ。	中期前葉（阿玉台Ｉ式）。
	4	C－1 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	—	V	縄文土器	深鉢	—	—	—	良好	明赤褐色	チャート・白色粒・黒色粒	胴部片	幅広工具による連続押引文、三角押文。	ナデ。	中期前葉（勝坂Ｉ式）。
15図	1	H－1	D１西＋4	2	須恵器	坏	(13.7)	(5.8)	4.1	酸化	浅黄色	白色粒・黒色粒	1／4	轆轤整形、底部回転糸切り。	轆轤整形。	
	2	H－1	D１西	上	須恵器	坏	12.7	5.7	3.8	酸化	灰白色	チャート・黒色粒	口縁部1／4欠	轆轤整形、底部右回転糸切り。	轆轤整形。	
	3	H－1	竈	上	須恵器	坏	(13.9)	(7.0)	4.0	酸化	浅黄橙色	白色粒・黒色粒	1／3	轆轤整形、底部右回転糸切り。	轆轤整形。	
	4	H－1	4 ＋ 12 ＋竈	2＋1＋上	須恵器	坏	(14.1)	(7.4)	3.9	酸化	灰白色	白色粒・黒色粒	1／2	轆轤整形、底部右回転糸切り。	轆轤整形。	
	5	H－1	4	1	須恵器	坏	13.6	6.1	4.4	酸化	灰白色	チャート・黒色粒	ほぼ完形	轆轤整形、底部右回転糸切り。	轆轤整形。	器形に歪み。内外面に薄いスス付着、二次被熱か。
	6	H－1	4	床面直上	須恵器	坏	13.3	6.9	3.5	酸化	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	口縁部一部欠	轆轤整形、底部右回転糸切り。	轆轤整形。	
	7	H－1	5	床面直上	須恵器	坏	12.6	6.3	3.6	酸化	灰色	白色粒	3／4	轆轤整形、底部右回転糸切り。	轆轤整形、炭素吸着。	
	8	H－1	D１東	底面付近	須恵器	坏	(13.7)	(6.4)	4.1	酸化	灰白色	白色粒・黒色粒	1／2	轆轤整形、底部右回転糸切り。	轆轤整形。	体部外面に「秋」の墨書あり。
	9	H－1	D１東	底面付近	須恵器	高台付碗	(14.5)	(7.3)	5.0	酸化	浅黄色	白色粒・黒色粒	口縁部～底部2／3・高台部一部	轆轤整形、底部右回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	
	10	H－1	13	1	須恵器	高台付碗	(14.8)	(6.7)	5.1	酸化	灰白色	白色粒・黒色粒	2／3	轆轤整形、底部右回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	口縁部内外面にスス付着、二次被熱か。
	11	H－1	竈	上	須恵器	高台付碗	(14.1)	(6.9)	5.3	還元	灰色	白色粒	1／4	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	
	12	H－1	7＋11	1	須恵器	高台付碗	13.6	7.1	5.5	酸化	灰白色	白色粒・黒色粒	2／3	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形、体部放射状暗文。	器形に歪み。内外面部分的にスス付着、二次被熱か。

第３表　土器観察表（１）

挿図№	番号	遺構名	区	層	種類	器種	法量（cm）			成・整形技法の特徴						備考
							口径	底径	器高	①焼成	②色調	③胎土	残存	外面	内面	
15図	13	H－1	竈	上	土師器	甕	(20.1)	－	〈14.7〉	良好	橙色	白色粒・黒色粒	口縁部～胴部中位1／4	口縁部横ナデ・指頭痕、胴部上半横・斜方向の篦削り、下半縦・斜方向の篦削り。	口縁部横ナデ、胴部上半木口状工具による横方向のナデ、下半横・斜方向の篦ナデ。	内外面に破片単位でスス付着、破損後に二次被熱か。
	14	H－1	竈	上	須恵器	甕	(22.0)	－	〈9.2〉	酸化	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	白色粒・小礫	口縁部～胴部上位1／2	轆轤整形。	轆轤整形。	
	15	H－1	竈＋5	上＋1	須恵器	甕	－	－	〈25.8〉	酸化	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	白色粒・赤褐色粒	頸部～胴部中位片	頸部横ナデ、胴部平行叩き。	頸部横ナデ、胴部無文の当て具痕。	内面剥離。
16図	1	H－2	竈	上	須恵器	坏	(12.6)	(5.8)	3.6	酸化	にぶい橙色	白色粒・黒色粒	1／4	轆轤整形、底部回転糸切り。	轆轤整形。	
	2	H－2	竈	上	須恵器	坏	13.0	7.2	3.5	酸化	にぶい橙色	白色粒・黒色粒	口縁部1／4欠	轆轤整形、底部回転糸切り。	轆轤整形、内底面轆轤痕明瞭。	外底面磨滅著しい。
	3	H－2	竈	上	須恵器	高台付碗	(13.2)	6.5	4.8	酸化	灰黄色	白色粒・黒色粒	2／3	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	器形に歪み。内底面に重ね焼き痕。
	4	H－2	竈	上	須恵器	高台付碗	(13.6)	(7.4)	4.6	酸化	にぶい黄橙色	白色粒・黒色粒	1／3	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	
	5	H－2	4	1	須恵器	高台付碗	13.4	(5.8)	(5.0)	酸化	にぶい褐色	白色粒・黒色粒	高台部4／5欠	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	第16図6と重なって出土（下）。
	6	H－2	4	1	須恵器	高台付碗	13.2	6.2	5.1	酸化	にぶい黄橙色	白色粒・黒色粒	ほぼ完形	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	第16図5と重なって出土（上）。
	7	H－2	竈	上	須恵器	高台付皿	－	7.9	〈2.5〉	酸化	灰黄色	白色粒・黒色粒	底部～高台部のみ	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	内底面に墨書あり。
	8	H－2	3	1	灰釉陶器	碗	(15.7)	(8.0)	4.7	還元	灰白色	黒色粒	1／4	轆轤整形、底部回転篦削り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	灰釉漬け掛け。
	9	H－2	2＋3＋竈	1＋1＋上	土師器	甕	16.1	－	〈21.6〉	良好	にぶい橙色	チャート・小礫	口縁部～胴部3／4	口縁部横ナデ・指頭痕、胴部縦・斜方向の篦削り。	口縁部横ナデ、胴部横・斜方向の篦ナデ。	内外面一部スス付着、二次被熱か。
	10	H－2	7＋竈	1＋上	須恵器	小型甕	(13.1)	－	〈6.1〉	酸化	にぶい黄橙色	チャート・小礫	口縁部～胴部上半1／5	轆轤整形。	轆轤整形。	内面に一部スス付着、二次被熱か。
	11	H－2	竈	上	須恵器	甑	－	(20.4)	〈5.6〉	酸化	橙色	チャート・白色粒	底部片	轆轤整形。	轆轤整形。	内面コゲ付着。
	12	H－2	竈	上	須恵器	羽釜	(25.4)	－	〈9.0〉	酸化	にぶい黄橙色	白色粒・黒色粒	口縁部～胴部上位片	轆轤整形、鍔貼付後横ナデ。	轆轤整形。	
	13	H－2	2	1	須恵器	甕	－	－	－	還元	灰色	白色粒・黒色粒	胴部片	格子目叩き。	無文の当て具痕後ナデ。	
	14	H－2	竈	上	須恵器	甕	－	－	－	還元	灰色	白色粒	胴部片	平行叩き。	平行文の当て具痕。	
	15	H－2	竈	上	須恵器	甕	－	－	－	還元	黄灰色	白色粒	胴部片	平行叩き。	同心円の当て具痕後ナデ。	外面自然釉付着。
17図	1	H－3	6	1	須恵器	坏	(14.6)	(7.0)	4.1	酸化	灰白色	チャート・黒色粒	1／4	轆轤整形、底部回転糸切り。	轆轤整形。	内外面スス付着、二次被熱か。

第4表　土器観察表（2）

挿図No.	番号	遺構名	区	層	種類	器種	法量（cm）			成・整形技法の特徴						備考
							口径	底径	器高	①焼成	②色調	③胎土	残存	外面	内面	
17図	2	H－3	3＋竈	床面直上＋下	須恵器	高台付碗	(14.3)	5.9	5.6	酸化	灰色	白色粒・小礫	口縁部～体部1／4欠	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	器形に歪み。外面にスス付着。
	3	H－3	竈	下	須恵器	高台付碗	14.9	7.1	5.6	酸化	灰色	白色粒・小礫	口縁部一部欠	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	器形に歪み。
	4	H－3	竈＋3	袖内＋1	須恵器	高台付碗	14.2	6.6	5.1	酸化	にぶい黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	口縁部～体部1／3欠	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	器形に歪み。内外面スス付着、二次被熱か。
	5	H－3	1＋2＋6	1＋2＋1	須恵器	高台付碗	14.8	6.6	5.2	酸化	黄灰色	白色粒・黒色粒	3／4	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	
	6	H－3	9＋14	1＋床面直上	須恵器	高台付碗	(14.2)	6.3	5.3	酸化	灰白色	白色粒・黒色粒	口縁部～体部1／2欠	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	
	7	H－3	竈	袖内＋下	須恵器	高台付碗	(14.7)	7.0	5.7	酸化	にぶい褐色	チャート・黒色粒・小礫	口縁部～体部3／4欠	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	内外面一部スス付着、二次被熱か。
	8	H－3	5	1	須恵器	高台付碗	14.3	6.6	5.4	酸化	灰色	白色粒・黒色粒	口縁部一部欠	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	
	9	H－3	2	1	須恵器	高台付碗	13.8	5.6	4.8	酸化	灰色	白色粒・黒色粒	ほぼ完形	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	器形に歪み。
	10	H－3	竈	袖内	須恵器	甑	－	(19.0)	〈11.7〉	酸化	浅黄色	白色粒・黒色粒	胴部下位～底部1／4	轆轤整形。	轆轤整形。	内面コゲ付着。
	11	H－3	4	床面直上	須恵器	甕	－	－	〈28.7〉	還元	灰色	白色粒・黒色粒	胴部下半～底部片	轆轤整形、胴部格子目叩き後ナデ、底部削り。	轆轤整形、胴部無文の当て具痕、底部ナデ。	
18図	1	H－4	D－2	上	須恵器	坏	(12.4)	(7.2)	4.1	酸化	灰白色	白色粒・黒色粒	1／5	轆轤整形、底部回転糸切り。	轆轤整形。	
	2	H－4	D－2	上	須恵器	坏	12.4	6.4	4.2	酸化	にぶい黄橙色	白色粒・黒色粒	ほぼ完形	轆轤整形、底部右回転糸切り。	轆轤整形。	
	3	H－4	4＋12	1＋1	須恵器	高台付碗	(13.7)	(6.1)	6.0	酸化	にぶい黄橙色	白色粒・黒色粒	1／2	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	
	4	H－4	4	1	灰釉陶器	碗	(15.6)	－	〈3.1〉	還元	灰黄褐色	黒色粒	口縁部片	轆轤整形。	轆轤整形。	灰釉漬け掛け。
	5	H－4	4	1	須恵器	小型甕	(13.0)	－	〈4.2〉	酸化	にぶい黄橙色	チャート	口縁部～胴部上位片	轆轤整形、口縁部横ナデ。	轆轤整形、口縁部横ナデ、胴部篦ナデ。	外面薄いスス付着。
	6	H－4	4	1	須恵器	羽釜	(18.2)	－	〈3.3〉	酸化	にぶい褐色	白色粒・雲母	口縁部片	轆轤整形。鍔貼付後横ナデ。	轆轤整形。	
	7	H－5	5	1	土師器	坏	(10.5)	－	3.0	普通	明赤褐色	白色粒・黒色粒	1／4	口縁部横ナデ、体部篦削り。	口縁部～体部篦ナデ。	
	8	H－5	2	2	土師器	坏	10.8	－	3.3	普通	にぶい橙色	白色粒	完形	口縁部横ナデ、体部篦削り。	口縁部横ナデ、体部篦ナデ。	内底面に「×」の線刻あり。
	9	H－5	15	4	土師器	坏	(10.9)	－	〈3.7〉	普通	にぶい赤褐色	白色粒・黒色粒	1／3	口縁部横ナデ、体部篦削り。	口縁部～体部横ナデ。	

第5表　土器観察表（3）

挿図No.	番号	遺構名	区	層	種類	器種	法量（cm）			成・整形技法の特徴						備考
							口径	底径	器高	①焼成	②色調	③胎土	残存	外面	内面	
18図	10	H－5	4	床面直上	土師器	坏	(19.9)	－	6.7	普通	橙色	白色粒・黒色粒	1／2	口縁部横ナデ、体部篦削り。	口縁部横ナデ、体部篦ナデ。	
	11	H－5	4	床面直上	須恵器	高台付坏	(15.9)	(10.8)	4.4	還元	灰白色	黒色粒	1／2	轆轤整形、底部回転篦削り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	
	12	H－5	6	床面直上	土師器	甕	(23.3)	－	〈14.9〉	普通	赤褐色	雲母・白色粒・赤褐色粒	口縁部～胴部上位1／4	口縁部横ナデ、胴部縦方向の篦削り。	口縁部横ナデ、胴部横・斜方向の篦ナデ。	
	13	H－5	11＋竈	床面直上＋下	土師器	甕	25.6	－	〈27.5〉	普通	明赤褐色	雲母・白色粒・黒色粒	口縁部～胴部3／4	口縁部横ナデ、胴部上半縦方向の篦削り、下半横・斜方向の篦削り。	口縁部横ナデ、胴部横方向の篦ナデ。	
	14	H－5	1 ＋ 14＋竈	3＋4＋下	土師器	甕	22.3	－	〈18.5〉	普通	明赤褐色	白色粒・黒色粒	口縁部～胴部中位	口縁部横ナデ、胴部斜方向の篦削り。	口縁部横ナデ、胴部横方向の篦ナデ。	内面磨耗気味。
	15	H－5	10	1	須恵器	甕	－	－	－	還元	灰白色	白色粒・黒色粒	胴部片	平行叩き。	無文の当て具痕。	
	16	H－5	9	1	須恵器	甕	－	－	－	還元	灰色	白色粒	胴部片	平行叩き。	同心円の当て具痕後ナデ。	
19図	1	H－6	11	4	土師器	坏	12.8	－	3.7	普通	橙色	白色粒・黒色粒	口縁部1／4欠	口縁部横ナデ、体部上位ナデ、中～下位篦削り。	口縁部横ナデ、体部篦ナデ。	
	2	H－6	2＋8	床面直上＋3	土師器	盤	19.4	－	4.4	普通	橙色	白色粒・黒色粒	口縁部一部欠	口縁部横ナデ、体部篦削り。	口縁部横ナデ、体部篦ナデ。	
	3	H－6	3	4	土師器	鉢	19.3	－	11.5	普通	橙色	粗粒チャート・白色粒	2／3	口縁部横ナデ、体部篦削り。	口縁部横ナデ、体部篦ナデ。	
	4	H－6	8	3	須恵器	蓋	(16.7)	－	〈2.9〉	還元	灰白色	白色粒	口縁部～天井部1／4	轆轤整形、天井部回転篦削り。	轆轤整形。	
	5	H－6	1＋6＋7＋8	1＋1＋3＋3	須恵器	蓋	(15.6)	－	〈1.8〉	還元	灰白色	白色粒・黒色粒	口縁部～天井部1／4	轆轤整形、天井部回転篦削り。	轆轤整形。	
	6	H－6	3	4	須恵器	高台付坏	(18.7)	(13.6)	4.4	還元	灰色	白色粒・黒色粒	1／2	轆轤整形、体部下端～底部回転篦削り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形、底部篦ナデ。	
	7	H－6	3＋竈	床面直上＋下	土師器	甕	(26.8)	－	〈11.2〉	普通	にぶい黄橙色	白色粒	口縁部～胴部上位1／2	口縁部横ナデ、胴部縦方向の篦削り。	口縁部横ナデ、胴部横方向の篦ナデ後ミガキ。	
	8	H－6	7＋5＋8	3＋4＋4	土師器	甕	24.2	－	〈23.7〉	普通	橙色	白色粒・黒色粒	口縁部～胴部中位2／3	口縁部横ナデ、胴部斜方向の篦削り。	口縁部横ナデ、胴部篦ナデ。	
	9	H－6	2	4	須恵器	甕	－	－	－	還元	灰色	白色粒	胴部片	擬格子叩き。	同心円の当て具痕。	内面下に自然釉。
20図	1	H－7	7	1	須恵器	坏	(12.6)	(6.5)	4.3	酸化	にぶい黄橙色	白色粒	1／5	轆轤整形、底部回転糸切り。	轆轤整形。	
	2	H－7	3＋4	1	須恵器	坏	(12.0)	(6.4)	4.5	酸化	灰色	白色粒	1／3	轆轤整形、底部右回転糸切り。	轆轤整形。	
	3	H－7	6	1	須恵器	高台付碗	－	(7.0)	〈2.4〉	酸化	にぶい黄褐色	白色粒	底部1／2	轆轤整形、底部回転糸切り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	

第6表　土器観察表（4）

挿図No.	番号	遺構名	区	層	種類	器種	法量（cm）			成・整形技法の特徴						備考
							口径	底径	器高	①焼成	②色調	③胎土	残存	外面	内面	
20図	4	H－7	8	1	須恵器	小型甕	(16.9)	－	〈6.0〉	酸化	褐灰色	白色粒	口縁部～胴部上位片	口縁部横ナデ、胴部轆轤整形。	口縁部横ナデ、轆轤整形。	
	5	H－7	D－1	上	須恵器	甕	－	－	－	還元	灰色	白色粒	胴部片	平行叩き後カキメ。	同心円の当て具痕。	
	7	D－5	－	上	須恵器	甕	(32.8)	－	〈10.0〉	還元	灰色	白色粒・黒色粒	口縁部片	口縁部轆轤整形。	口縁部轆轤整形、頸部同心円の当て具痕。	外面肩部・内面口縁部に自然釉。
	8	遺構外	D－1 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	V	須恵器	甕	－	－	〈8.9〉	還元	黄灰色	白色粒	口縁部～頸部欠	轆轤整形、胴部中位に２条の横位沈線文と刺突文、胴部下位～底部回転篦削り。	轆轤整形。	胴部中位に孔１ヶ所。外面肩部・内面底部に自然釉。
	9	遺構外	M－6 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	V	灰釉陶器	碗	－	(7.7)	〈1.7〉	還元	暗灰黄色	白色粒	底部片	轆轤整形、底部回転篦削り、高台貼付後周縁ナデ。	轆轤整形。	灰釉刷毛塗り。発色良好。

第７表　土器観察表（５）

挿図No.	番号	遺構名	区	層	器種	形態	材質	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考
５図	5	C－２ グリッド	－	V	打製石斧	－	頁岩	〈885〉	54	28	〈153.1〉	下半部欠損。
16図	16	H－2	竈	下	刀子か	－	鉄	〈34〉	9	2	〈5.32〉	破片。
17図	12	H－3	8	床面直上	鎌	－	鉄	〈70〉	〈32〉	2	〈29.87〉	破片。
19図	10	H－6	1	4	砥石	－	安山岩	75	30	24	〈83.78〉	一部欠損。
20図	6	H－7	1	床面付近	鉄滓	椀形	鉄	81	〈63〉	31	〈253.91〉	約１／２欠損。
21図	1	H－7	1	床面付近	焼印	－	鉄	286	57	印面９～14 柄４～９	〈258.26〉	印面右下部分欠損。印面は縦75㎜、横57㎜。印文「東」。

第８表　石器・石製品・鉄製品観察表

Ⅵ　成果と問題点

１　奈良・平安時代の土器群の変遷について

本遺跡では、７軒の住居址が検出された。これらの住居址は、出土土器から、奈良・平安時代の帰属と考えられ、大きく２時期に分けられる。当該期の土器については、県内において編年基準が示されており（坂口・三浦 1986 ほか）、市内の土器群はこれを基にした編年的位置付けが行われている。ここでは、出土土器をⅠ～Ⅲの３段階に分け、土器群の様相について検討していきたい（第 26 図）。

Ⅰ段階

Ｈ－５・６号住居址の２軒が該当する。出土した器種は、土師器坏・盤・鉢・甕、須恵器高台付坏・蓋が見られる。

土師器坏は、丸底から口縁部が短く内傾・内湾・直立して立ち上がる。口径 10.5 ㎝前後、13 ㎝前後、20 ㎝前後の３種類がある。盤は当該期に特徴的な、浅い体部から口縁部との境に弱い稜線を持って外反するものである。鉢は丸底から直立する口縁部に至る。甕は長胴で最大径を口縁部に持つ。胴部が直線的で口縁部が外反するタイプと、胴部上位にわずかな膨らみを持ち、口縁部が長く外行するタイプがある。前者は器肉がやや厚めで、縦方向の篦削りが施される。篦削りは頸部の屈曲にまで及ぶ。後者は斜方向の篦削りが施される。

須恵器高台付坏は、平底から体部が直線的に立ち上がる。高台は内端が接地し、断面が台形を呈する。底部は回転篦ケズリである。蓋は短い返りを持つタイプである。天井部は回転篦削りで、摘みは環状と推測される。天井部から丸みを持って口縁部に至るものと、水平気味の天井部から緩やかに湾曲するものがある。

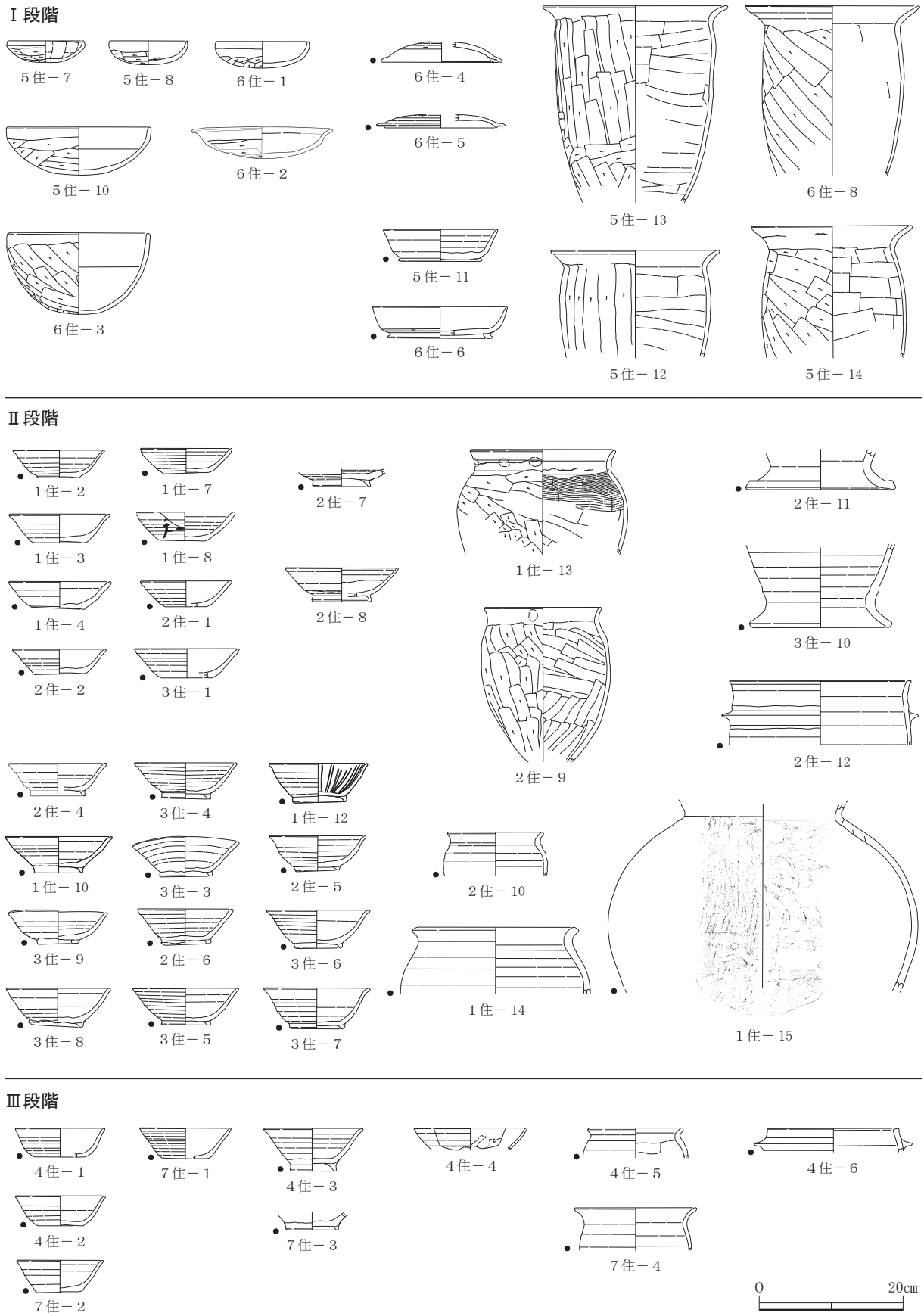
Ⅱ段階

Ｈ－１・２・３号住居址の３軒が該当する。出土した器種は、土師器甕、須恵器坏・高台付碗・高台付皿・甕・甑・羽釜、灰釉陶器碗が見られる。

土師器甕は器肉が厚くなる。口縁部に指頭痕が残り、胴部は縦・斜方向の篦削りが施される。口縁部が崩れた「コ」の字状を呈するものと、口縁部が短く外反するものがある。

須恵器坏は、浅い体部から口縁部がわずかに外反するタイプと、体部が直線的で轆轤痕の顕著なタイプがある。底部は回転糸切り未調整で、酸化焔焼成が主体を占める。高台付碗は、口縁部がわずかに外反するタイプ、体部が直線的で轆轤痕の顕著なタイプ、体部下位にわずかな丸みを持ち口縁部が外反するタイプがある。高台の断面形状は、三角形か台形である。台形の高台には貼り付けの粗雑なものが目立つ。底部は回転糸切り未調整で、酸化焔焼成が主体を占める。Ｈ－１号住居址 12 は内面に放射状暗文が施されている。高台付皿は器肉が厚く、高台は断面三角形である。底部は回転糸切り未調整で、焼成は酸化焔である。甕は轆轤整形と叩き整形が見られ、酸化焔焼成が主体となる。轆轤整形の甕は短い口縁が強く外反し、器肉が厚い。叩き整形の甕は丸底の大形である。甑・羽釜は轆轤整形である。甑は胴部下端を外側へ大きく曲げる。羽釜は口唇部がほぼ水平で、断面三角形の鍔が水平に貼付される。焼成は酸化焔である。

灰釉陶器碗は、三日月高台の屈曲が緩やかになったもので、底部は回転篦削りである。釉薬は漬け掛けで、東濃窯編年の大原２号窯式期に相当すると考えられる。



第26図　奈良・平安時代の土器群

Ⅲ段階

Ｈ－４・７号住居址の２軒が該当する。出土した器種は、須恵器坏・高台付碗・甕・羽釜、灰釉陶器碗が見られる。

須恵器坏は、口縁部がわずかに外反するタイプと、体部が直線的で轆轤痕の顕著なタイプがある。口径は 12 ㎝前後である。底径に比して口径が小さくなるため、体部がⅡ段階より立ち上がり気味になる。底部は回転糸切り未調整である。高台付碗は、口縁部がわずかに外反するタイプである。高台の断面形は三角形か台形である。底部は回転糸切り未調整である。甕は轆轤整形で口縁部が強く外反し、器肉は厚い。羽釜は轆轤整形で、口唇部がやや内傾し、断面三角形の鍔が水平に貼付される。須恵器は全て酸化焔焼成である。灰釉陶器碗は、釉薬漬け掛けで、体部から口縁部にかけて浅く開く。Ⅱ段階同様、大原２号窯式期に相当すると考えられる。

以上、県内の土器編年研究を援用して３段階に区分したが、実年代については、おおよそ、Ⅰ段階が８世紀前半の前段階、Ⅱ段階が 10 世紀前半の前段階、Ⅲ段階が 10 世紀前半の後段階に比定できよう。

２　Ｈ－７号住居址出土の焼印について

焼印は、竪穴住居の北壁際で、床面よりやや浮いた位置から出土した。住居址は共伴した土器の年代観から、前述した土器分類のⅢ段階、10 世紀前半の後段階と考えられる。焼印の材質は鉄製で、全長は 286 ㎜、印面の向かって右下が欠失している。印面の大きさは縦 75 ㎜（二寸五分）、横 57 ㎜（一寸九分）、厚さは９～ 14 ㎜である。印文は「東」と判読できる。印面は複数本の扁平な鉄板で構成され、それらを印面より約 151 ㎜の所で合体させて一本の柄としている。柄は徐々に細くなり、先端では６㎜×４㎜の断面方形を呈する。柄の末端は尖鋭で、木質の柄部が装着されていたと見られる。

古代の焼印は関東甲信越地方からの出土に限られており、群馬県が最も多い。出土遺跡の性格は一般的な集落遺跡の範疇に入るものが多く、ほとんどが竪穴住居址からの出土である。これは本遺跡も同様であろう。焼印の用途については、牛馬等に押す畜産印と、木器などの木製品に押す印が考えられている。実物からの用途特定は困難だが、近接地を通過していたと推定される東山道駅路の存在から、畜産印の可能性が示唆される。牛馬に押す場合、その目的は所有・所属先の表示、他との区別と言えよう。文字の意味するところについては、焼印が出土した遺跡で印文と同一の文字、もしくは密接な関連を有する文字を記した墨書土器が共伴する場合が多いことから、集落内におけるある種の集団を象徴する文字のひとつとも推測されている（高島 2001）。但し、本遺跡ではⅡ段階に該当する住居址から２点の墨書土器が確認されたものの、文字は「秋」[※1] と判読不明とで、「東」との関連性は見出せなかった。

※１　高島英之氏のご教授による。

参考文献

安中市教育委員会　1991『地尻遺跡・地尻Ⅱ遺跡』
安中市教育委員会　1999『堀谷戸遺跡』
安中市教育委員会　1999『嶺・下原Ⅱ遺跡』
安中市教育委員会　2007『清水Ⅱ遺跡・清水Ⅴ遺跡・清水Ⅵ遺跡』
安中市市史刊行委員会　2001『安中市史』第四巻　原始古代中世資料編
安中市市史刊行委員会　2003『安中市史』第二巻　通史編
安中市埋蔵文化財発掘調査団　2005『西裏遺跡』
安中市埋蔵文化財発掘調査団　2005『下原・賽神遺跡』
安中市埋蔵文化財発掘調査団　2005『植松・地尻遺跡』
安中市埋蔵文化財発掘調査団　2006『蔵畑Ⅱ遺跡』
安中市埋蔵文化財発掘調査団　2009『土井遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984『中尾（遺物篇）』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1989『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』
坂口　一・三浦京子　1986「奈良・平安時代の土器編年」『群馬県史研究』24　群馬県史編さん委員会
高島英之　1992「古代の焼印についての覚書」『古代史研究』第 11 号　立教大学古代史研究会
高島英之　2001「群馬県榛名町高浜広神遺跡出土の平安時代焼印について」『青山考古』第 18 号　青山考古学会
田中広明　2005「古代の地域開発と牛馬の管理」『牧と考古学－馬をめぐる諸問題－』資料集　山梨県考古学協会
中沢　悟　1997「矢田遺跡周辺における古墳時代後期から平安時代の土器について」『矢田遺跡Ⅶ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
伏見冲敬　1977『伏見冲敬編　角川書道字典』角川書店
妙義町遺跡調査会　1990『古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連狸沢遺跡・八木連荒畑遺跡』

写　真　図　版

東山道駅路関係学術調査時における並木遺跡周辺（上が東）

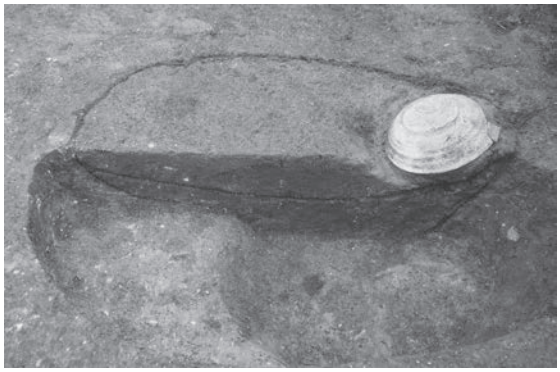
並木遺跡　全景（上が南西）

図版２

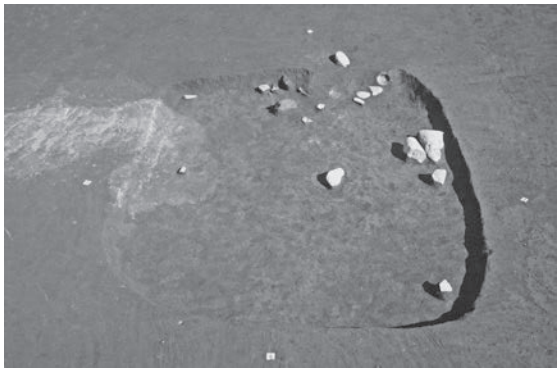
Ｈ－１号住居址

Ｈ－１号住居址　竈

Ｈ－１号住居址　竈遺物出土状態

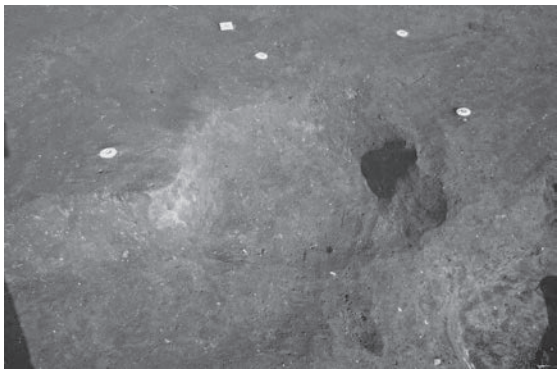


Ｈ－１号住居址　貯蔵穴遺物出土状態



Ｈ－２号住居址

Ｈ－２号住居址　遺物出土状態近景



Ｈ－２号住居址　竈

Ｈ－２号住居址　竈遺物出土状態

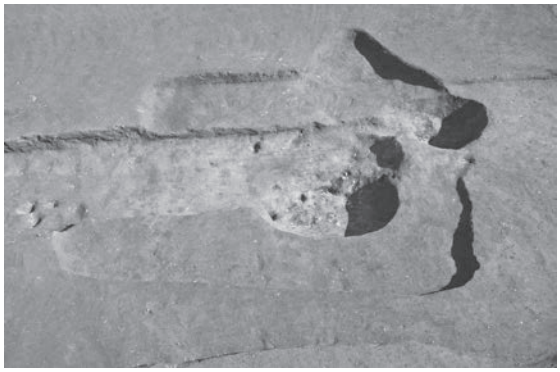
Ｈ－３号住居址

Ｈ－３号住居址　遺物出土状態近景

Ｈ－３号住居址　竈

Ｈ－３号住居址　竈遺物出土状態

Ｈ－３号住居址　竈袖内遺物出土状態



Ｈ－４号住居址

Ｈ－５号住居址

Ｈ－５号住居址　遺物出土状態近景

図版４

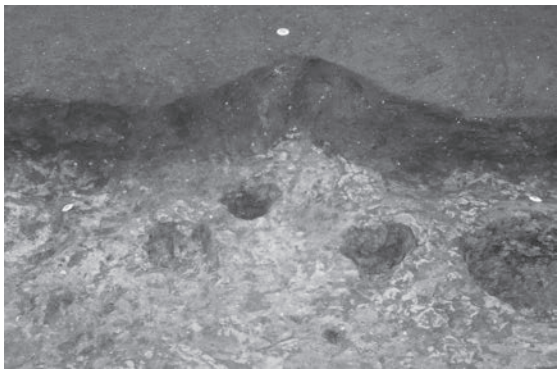
Ｈ－５号住居址　竈

Ｈ－５号住居址　竈断ち割り

Ｈ－６号住居址

Ｈ－６号住居址　遺物出土状態近景

Ｈ－６号住居址　竈



Ｈ－６号住居址　竈掘り方

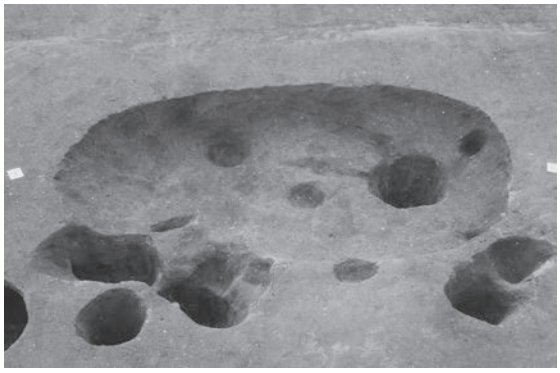
Ｈ－６号住居址　掘り方

Ｈ－６号住居址　Ｄ－３断面

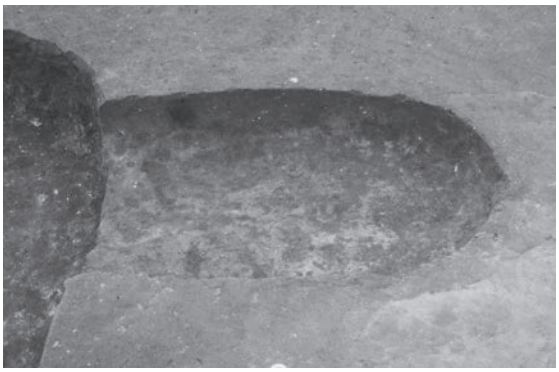
Ｈ－７号住居址

Ｈ－７号住居址　焼印出土状態

Ｈ－７号住居址　掘り方



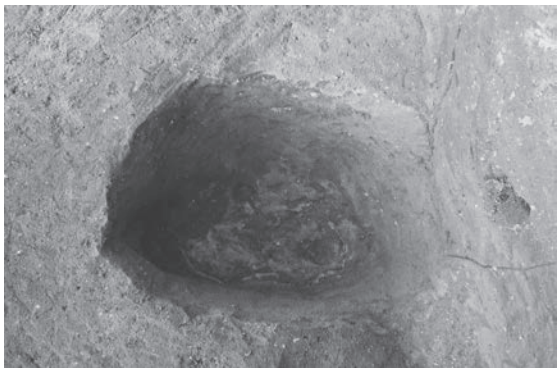
Ｄ－１号土坑



Ｄ－２号土坑

Ｄ－３号土坑

Ｄ－４号土坑



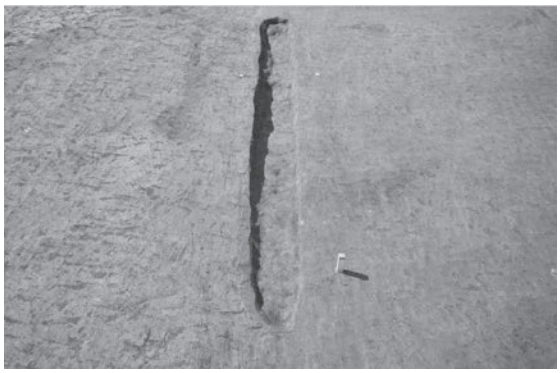
Ｄ－５号土坑

図版６

Ｐ－1～ 47 号ピット

Ｐ－１～ 47 号ピット

Ｍ－1号溝



Ｍ－2号溝

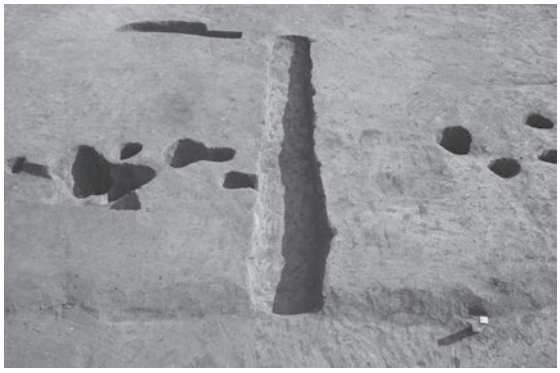
Ｍ－3号溝

Ｍ－4号溝　断面

Ｍ－5号溝

Ｍ－6号溝

Ｍ－７号溝



Ｍ－８号溝

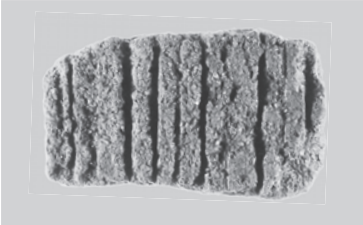
Ｍ－９・10 号溝

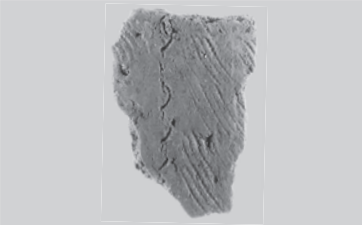
Ｍ－ 12 号溝

Ｍ－ 11 号溝

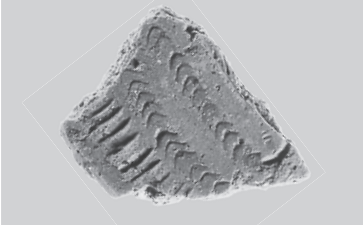
基本層序

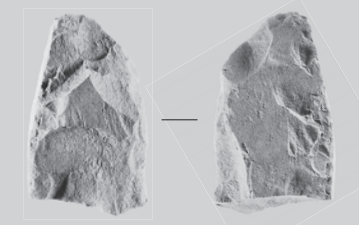
図版８


縄文土器（1）

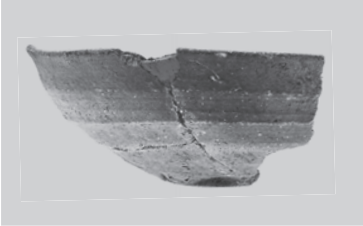

縄文土器（2）

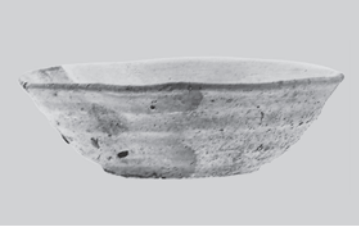
縄文土器（3）


縄文土器（4）


打製石斧（5）

H－1号住居址　編物石


H－1号住居址　坏（1）

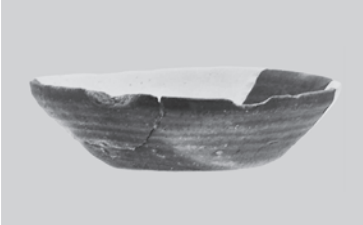

H－1号住居址　坏（2）

H－1号住居址　坏（3）

H－1号住居址　坏（4）

H－1号住居址　坏（5）

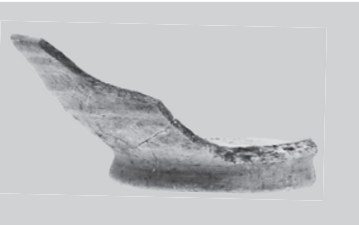
H－1号住居址　坏（6）


H－1号住居址　坏（7）

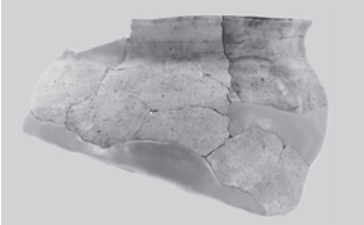
H－1号住居址　坏（8）

H－1号住居址　高台碗（9）

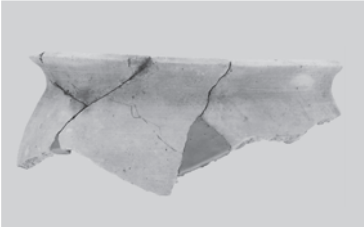
H－1号住居址　高台碗（10）


H－1号住居址　高台碗（11）

H－1号住居址　高台碗（12）



Ｈ－１号住居址　甕（13）



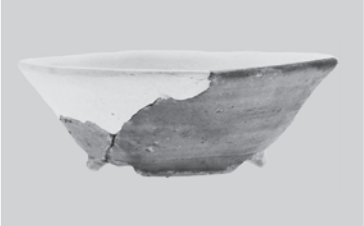
Ｈ－１号住居址　甕（14）

Ｈ－１号住居址　甕（15）

Ｈ－２号住居址　坏（1）

Ｈ－２号住居址　坏（2）

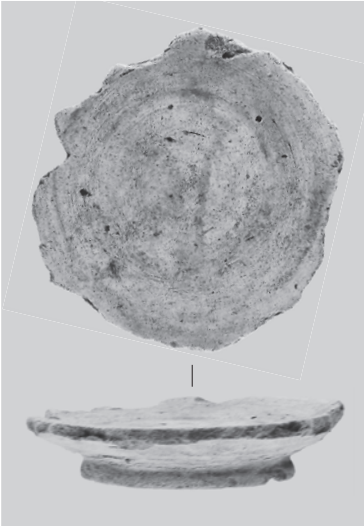
Ｈ－２号住居址　高台碗（3）



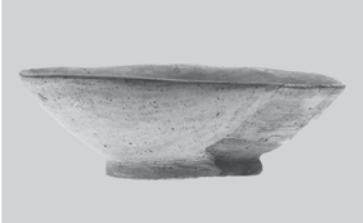
Ｈ－２号住居址跡　高台碗（4）

Ｈ－２号住居址　高台碗（5）

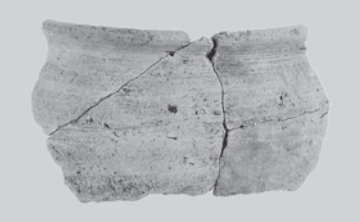
Ｈ－２号住居址　高台碗（6）



Ｈ－２号住居址　高台皿（7）



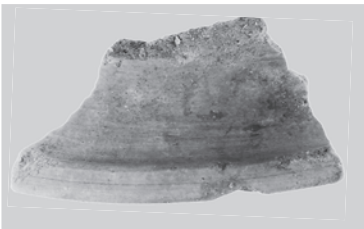
Ｈ－２号住居址　碗（8）



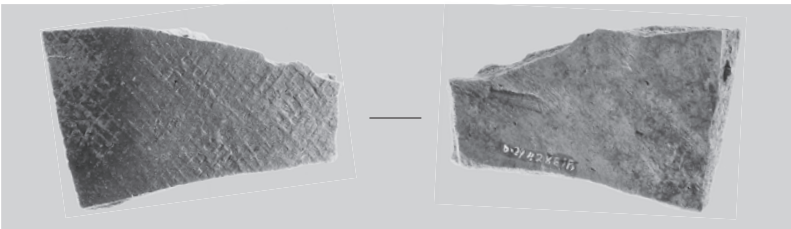
Ｈ－２号住居址　甕（10）

Ｈ－２号住居址　甕（9）

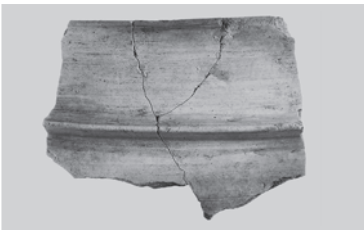
図版 10



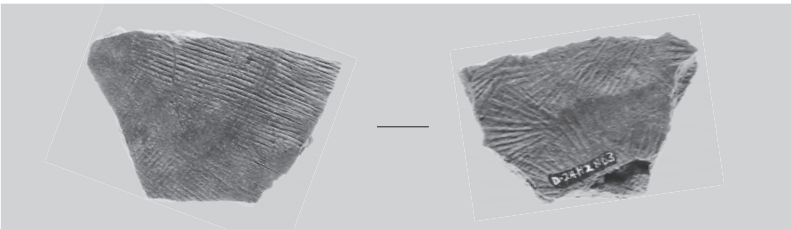
H－2号住居跡　甑（11）



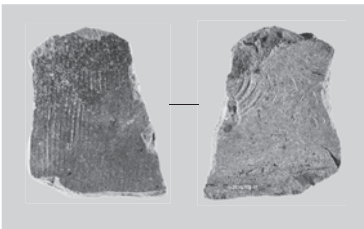
H－2号住居跡　甕（13）



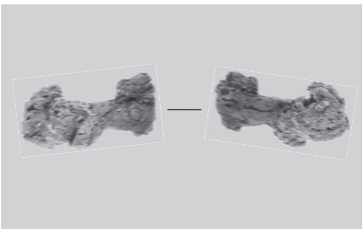
H－2号住居址　羽釜（12）



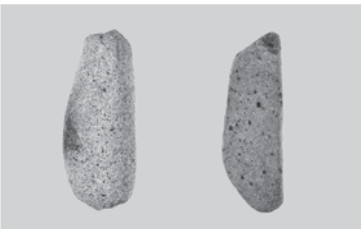
H－2号住居址　甕（14）



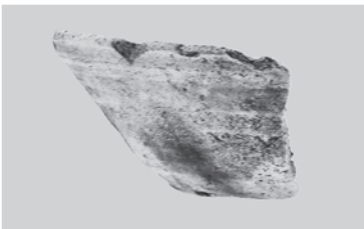
H－2号住居址　甕（15）



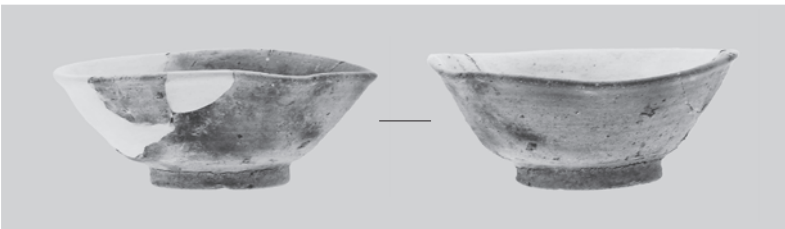
H－2号住居址　鉄製品（16）



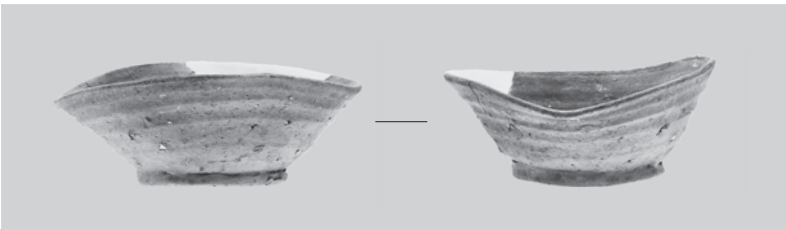
H－2号住居址　編物石



H－3号住居址　坏（1）

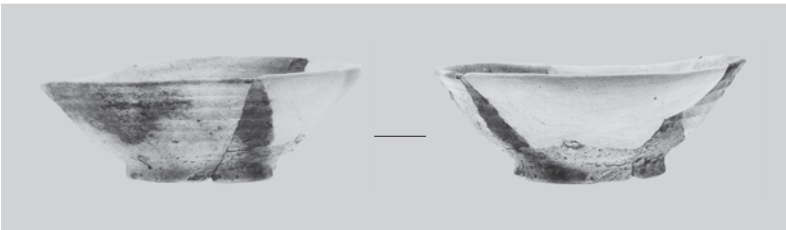


H－3号住居址　高台碗（2）



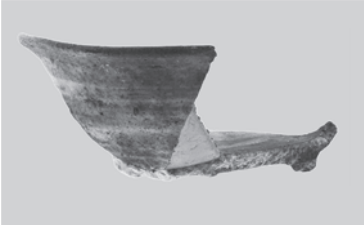
H－3号住居址　高台碗（3）

H－3号住居址　高台碗（5）



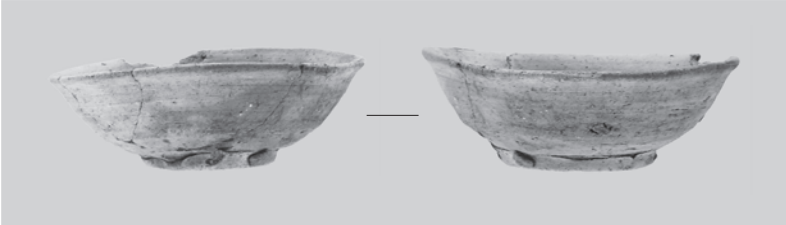
H－3号住居址　高台碗（4）

H－3号住居址　高台碗（6）



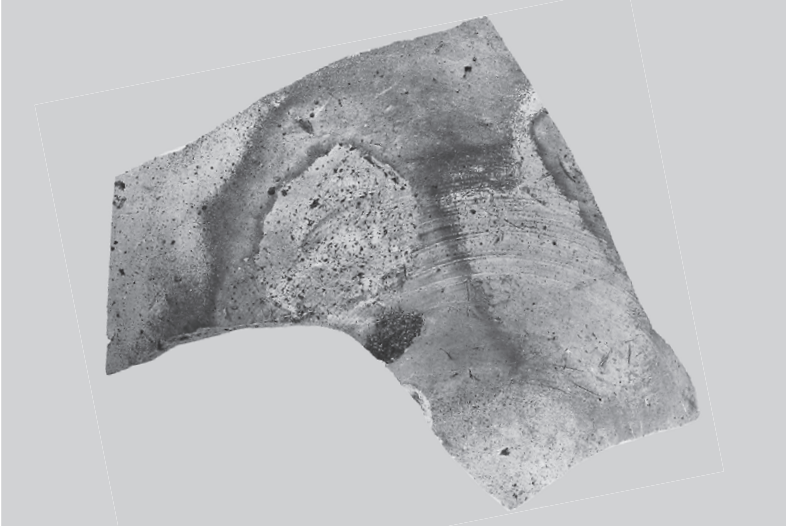
H－3号住居址　高台碗（7）

H－3号住居址　高台碗（8）

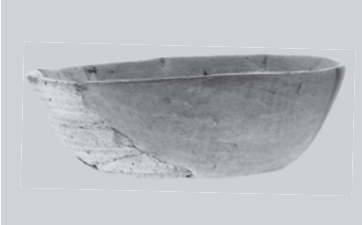


H－3号住居址　高台碗（9）

H－3号住居址　甑（10）

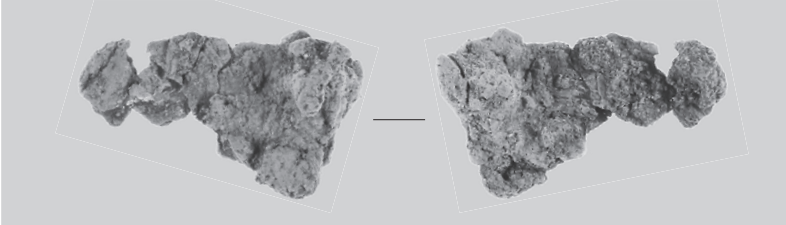


H－3号住居址　甕（11）



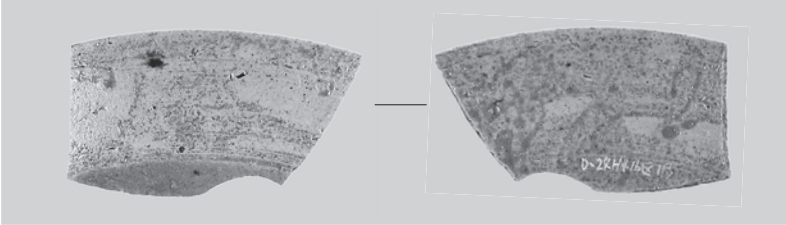
H－4号住居址　坏（1）

H－4号住居址　坏（2）

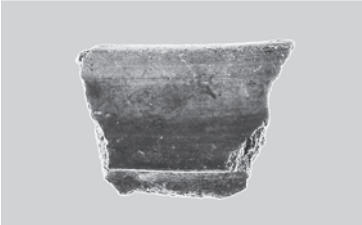


H－3号住居址　鉄製品（12）

H－4号住居址　高台碗（3）

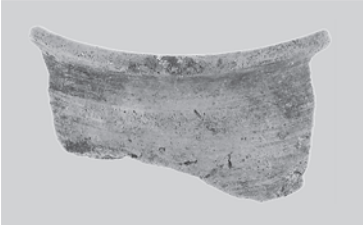


H－4号住居址　碗（4）

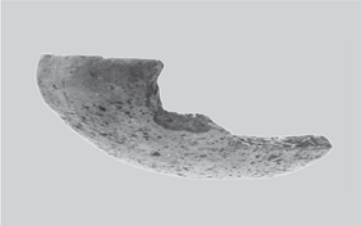


H－4号住居址　羽釜（6）

図版 12



H－4号住居址　甕（5）



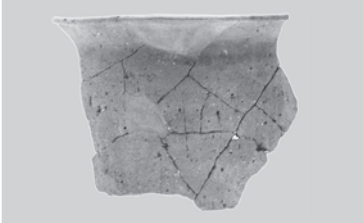
H－５号住居址　坏（７）

H－5号住居址　坏（8）

H－５号住居址　坏（９）

H－５号住居址　坏（10）

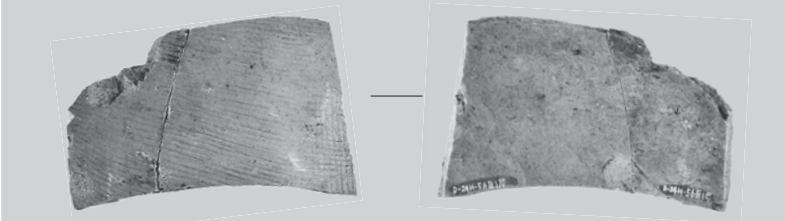
H－５号住居址　高台坏（11）



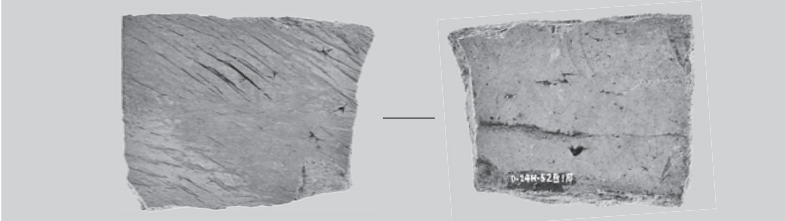
H－５号住居址　甕（12）

H－５号住居址　甕（13）

H－５号住居址　甕（14）



H－５号住居址　甕（15）

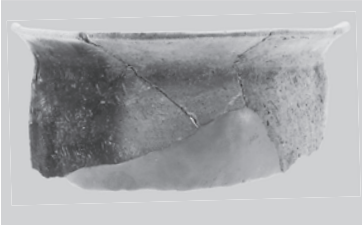


H－５号住居址　甕（16）

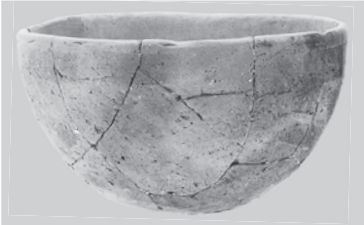
H－５号住居址　編物石

H－6号住居址　坏（1）

H－6号住居址　盤（2）



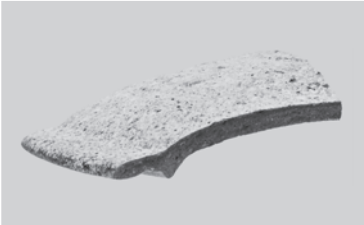
H－6号住居址　甕（7）



H－6号住居址　鉢（3）

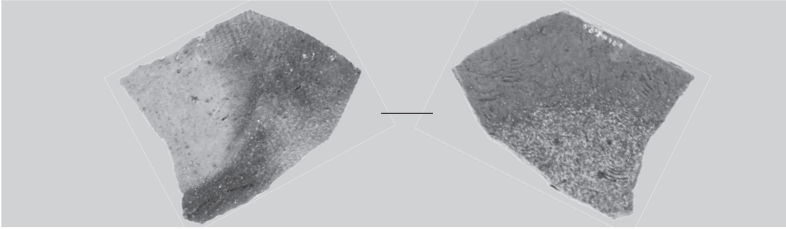
H－6号住居址　高台坏（6）

H－6号住居址　甕（8）

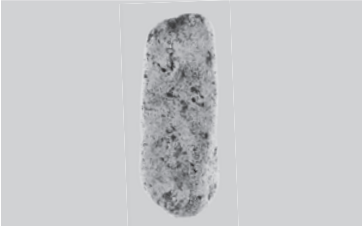


H－6号住居址　蓋（4）

H－6号住居址　蓋（5）



H－6号住居址　甕（9）



H－6号住居址　砥石（10）

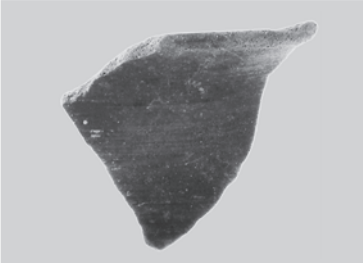
H－6号住居址　編物石

図版 14

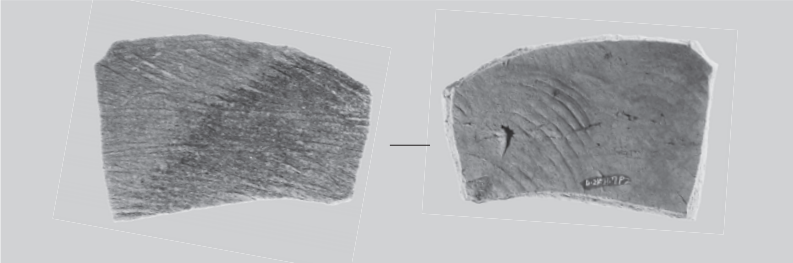
H－7号住居址　坏（1）

H－7号住居址　坏（2）

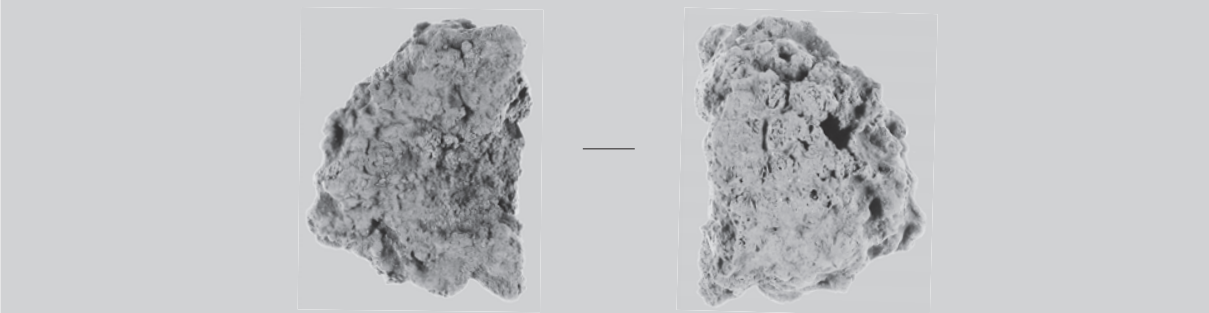
H－7号住居址　高台碗（3）



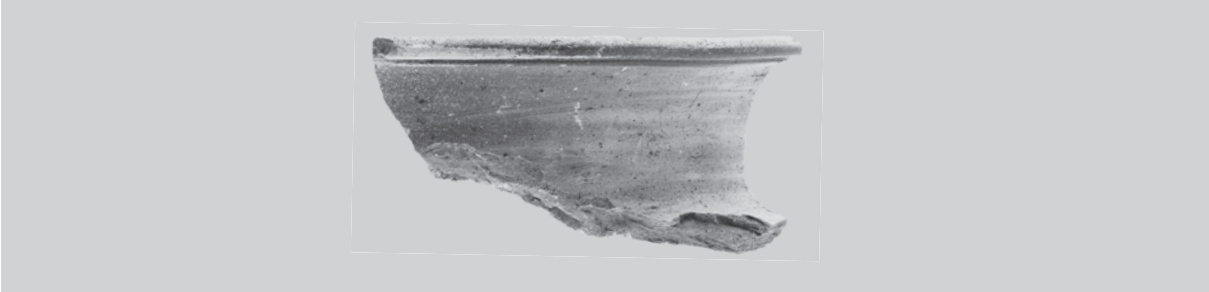
H－7号住居址　甕（4）



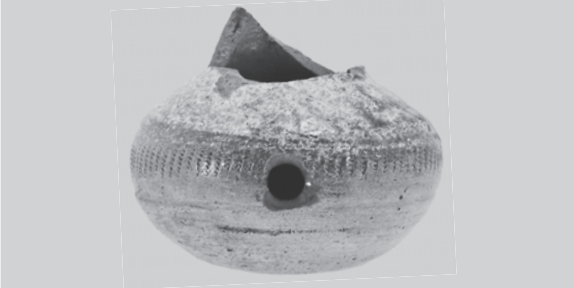
H－7号住居址　甕（5）



H－7号住居址　椀形鉄滓（6）

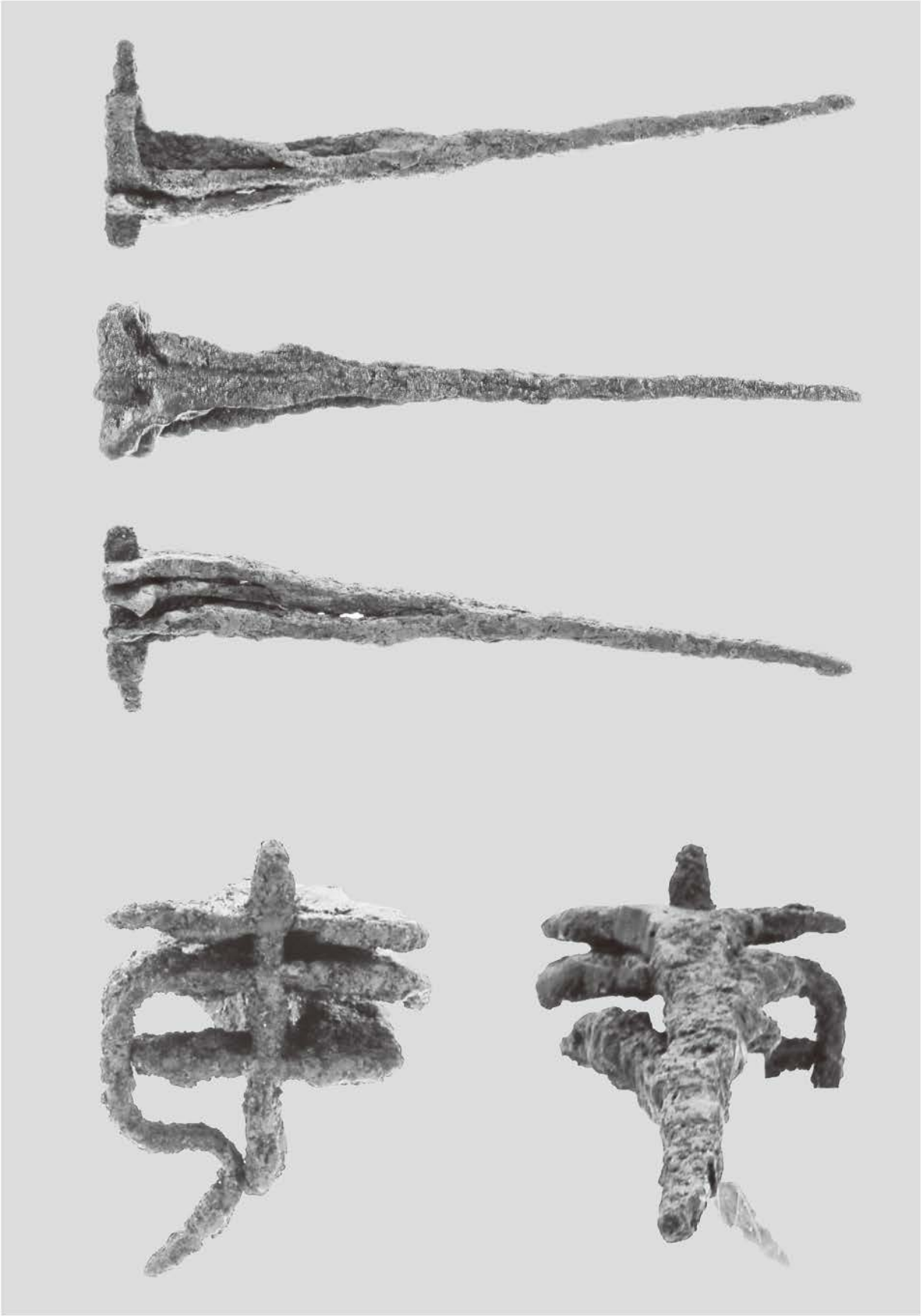


D－5号土坑　甕（7）



遺構外　瑤（8）

遺構外　碗（9）



H－7号住居址　焼印（1）

図版 16

焼印X線写真

発掘調査報告書　抄録

ふりがな	なみきいせき
書名	並木遺跡
副書名	安中市消防署庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ番号	
編著者名	千田茂雄・有山径世
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0292　群馬県安中市松井田町新堀 245　　TEL027-382-1111
発行年	西暦 2010 年（平成 22 年）３月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
並木遺跡（なみきいせき）	安中市安中一丁目字並木地内（あんなかしあんなかいっちょうめあざなみきちない）	102113	Ｄ－24	36° 19′ 26″	138° 53′ 03″	20081003 ～ 20081202	約 862 ㎡	安中市消防署庁舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
並木遺跡	集落	縄文時代 奈良・平安時代 近世	－ 住居址７ 溝１ 土坑５、ピット８ 溝 12 ピット 52	縄文土器・石器 土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品・鉄滓・砥石・編物石	奈良・平安時代の集落址。平安時代のＨ－７号住居址から印文「東」の焼印と椀形鉄滓、Ｈ－１号住居址から「秋」と墨書された須恵器坏が出土。

並木遺跡

－安中市消防署庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行日　平成 22 年３月 31 日
編集・発行　安中市教育委員会
群馬県安中市松井田町新堀 245
印刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町 67 番地